

日本質的心理学会

第1回大会

アブストラクト集

2004.9.11

京都大学

教育学研究科





日本質的心理学会

第1回大会の開催にあたって

大会委員長 やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

日本質的心理学会が設立されました2004年、記念すべき第1回大会を京都大学で開催することになりました。京都は、晩夏と初秋のはざま、苔むした路地の入り組んだ古都と、先端文化が自由に行き交う国際都市、歩くほどに季節の移ろいの多彩な表情があらわれる街で、みなさまをお迎えいたします。

京都大学は、フィールド科学発祥の地でもあり、文系・理系ともにフィールド研究が非常にさかんなところ。また、外国の研究を紹介する研究よりも、冒険と進取の気風にあふれた個性で、オリジナルな研究を自ら立ち上げて独創的な学問を創り、新しい学問を構築していく伝統を長年のあいだ培ってまいりました。このような気がみちたトポス（場所）で、新しい学会の第1回大会を開催し、新しい質的心理学を創っていこうという意欲にみちた方々をお迎えできることは、大変うれしいことです。

日本質的心理学会は、10年以上にわたるフィールド心理学や質的心理学会に関する活動を助走とし、その後3年間刊行した『質的心理学研究』（新曜社）を母胎にして生まれました。研究誌を中心に学会へと飛翔した2004年は、心理学のみならずほかの学問分野においても画期的なこととして記憶される記念の年になることでしょう。

日本質的心理学会は、心理学およびその関係学問領域における質的研究に発表の場を提供し、質的研究の発展をはかるために、この分野の研究者に広くひらかれた学際的な学会です。したがって、心理学だけではなく、教育学、社会学、人類学、福祉学、看護学、文学、言語学、歴史学、地理学、経済学、経営学、法学、医学、生物学、工学など広く他領域の研究や学際的研究との幅広い連繫を考えていることが大きな特色です。実際、質的研究の認識論や方法論への最近の国際的な関心の高まりは、一学問分野だけの問題や方法ではなく、ナラティブ・ターン（物語的転換）やパラダイム・シフトと呼ばれるような大きな学問横断的变化に基づいております。今回の大会においても、質的研究の方法論に関する多彩な催しに、従来の学会にはみられなかった学際的な対話をしていく試みを多々行っています。その開かれた志向性と意欲を、ぜひ読みとっていただけたらと思います。

学会発足後日が浅いこともあり、いろいろ準備はいきとどきませんが、わずか1日という短い会期に、招待講演・シンポジウム・WS・対談など、多彩で多様なかたちの魅力的な企画を満載しました。参加者のみなさまの主体的な活動によって熱く刺激的な討論の渦が幾重にも生まれてくるような、既存学会にはない画期的な共同生成の場をつくっていききたいと願っています。

みなさまの力で、この学会を大きく育ててくださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。



質的心理学会のロゴは、篆刻古書体です。

シンボルマークは、金古文字（青銅器時代）で「質」をあらわしています。

学会ロゴ・学会シンボルマーク・大会アブストラクト集表紙デザイン：やまだようこ

大会参加者へのご案内

1. 大会会場

大会は京都大学文学部および教育学部（吉田キャンパス・本部構内）で開催されます。会場の位置や配置については9～10頁の案内図をご参照下さい。

2. 受付

場所：京都大学教育学部 1 階ロビー

時間：8:20～18:00

学会の入会申し込み手続き、その他学会や大会に関する御質問等も受付で承ります。

【大会参加費】

予約参加	一般会員	4,000 円	学生会員	3,000 円
当日参加	会員（一般・学生）			5,000 円
	非会員（一般・学生）			5,000 円

*会員の参加費にはアブストラクト集代が含まれていますが、非会員の参加費にはアブストラクト集代が含まれておりません。アブストラクト集は、一部 1000 円で受付にて販売いたします。なお、「学生」とは、正規に学籍がある者とし、聴講生、研究生等は一般会員とさせていただきます。

3. 懇親会

カンフォーラ（正門西側）にて 19:20～20:40 まで開催いたします。多くの方々との交流の場として、是非ご参加ください。場所は9頁の案内図をご覧ください。

【懇親会参加費】

予約参加	一般会員	4,000 円	学生会員	3,000 円
当日参加	一般・学生	5,000 円		

4. クローク

大会期間中教育学部 1 階第 1 演習室にクロークを設け参加者の荷物をお預かりいたします。利用の際には必ず係員より預かり証を受領しご利用下さい。なお、貴重品はご遠慮下さい。

【利用時間】 8:20～19:10

5. 休憩室

大会期間中の休憩室を文学部第1講義室に設けます。お茶やコーヒーを準備いたしておりますので是非ご利用下さい。

6. 昼食

会場では、お弁当など昼食の販売はいたしません。昼食の休憩時間が短いので、あらかじめ御持参くださると便利です。なお、学生食堂は営業しておりますのでご利用ください。おもな大学関係の食堂には、次のようなものがあります。

場所は9頁の案内図をご覧ください。

- ・ルネ生協食堂（教育学部棟から東大路通りをわたって西側）
- ・カンフォーラ（正門入り口西側）
- ・ラ・トゥール（フランス料理食堂・時計台記念館1F）

＊生協中央食堂は夏期休業中のためご利用いただけません。ご注意ください。

7. 禁煙にご協力下さい

学内は、全館禁煙となっております。ご協力下さい。

8. 展示

休憩室と同じ文学部第1講義室で書籍販売と機器等の展示を行います。是非、お立ち寄り下さい。

9. 打ち合わせ室

各企画発表のための打ち合わせ室を教育学部3階 320 教室に設けます。発表者の方々は、ご利用下さい。

10. 大会本部及び学会事務局

教育学部3階の第3演習室に大会本部を設置します。

大会行事のご案内

本大会は、大会シンポジウム、シンポジウム、対談、ワークショップ、講演と対話、招待講演、懇親会から構成されています。なお、大会シンポジウムと招待講演は京都大学 21COE 心理学連合が共催しています。

8 : 20 ~

受付開始

京都大学教育学部 1 階ロビー

学会の入会申し込み、ご質問・手続き、その他学会や大会に関する御質問等も受付で承ります。

9 : 10 ~ 12 : 10

大会シンポジウム

(p. 12~20)

「質的研究の方法論——KJ 法とグラウンデッド・セオリー」

文学部第 3 講義室

企画：やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

司会：能智正博（東京女子大学文理学部）

〈グラウンデッド・セオリー法の意義と発展〉

「グラウンデッド・セオリー法の分析的ポテンシャル」水野節夫（法政大学社会学部）

「グラウンデッド・セオリー法をもちいた分析」

戈木クレイグヒル滋子（東京都立保健科学大学保健科学部）

〈KJ 法の意義と発展〉

「三大科学方法論の時代」 川喜田二郎（川喜田研究所・東京工業大学名誉教授）

「KJ 法図解化の核心」 川喜田二郎（川喜田研究所・東京工業大学名誉教授）

やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

〈総合討論〉 「KJ 法とグラウンデッド・セオリー」

12 : 20 ~ 12 : 50 総 会

〈文学部第 3 講義室〉

(12 : 50 ~ 13 : 20 休憩)

● シンポジウム1 (p. 22~29)

「他者との出会い 教育のフィールド：出会いを記録する」

文学部第2講義室

企画・司会：秋田喜代美(東京大学大学院教育学研究科)

話題提供：

「子どもの発達を表す」

鯨岡 峻(京都大学大学院人間・環境学研究科)

「教室の風景を表す」

佐藤公治(北海道大学大学院教育学研究科)

「マイクロとマクロの狭間で」 箕浦康子

(お茶の水女子大学開発途上国女子教育協力センター)

● シンポジウム2 (p. 30~37)

「質的研究はいかに『科学的』たりえるか？ー医療・看護領域の研究に学ぶ」

教育学部第2講義室

企画：松嶋秀明(滋賀県立大学人間文化学部)

西條剛央(国立精神・神経センター精神保健研究所)

司会：荒川 歩(立命館大学人間科学研究所)

話題提供：

「質的研究法と臨床の知ーエビデンスとナラティブをめぐってー」

齊藤清二(富山大学保健管理センター)

「身体論的な視点が拓く地平ー看護研究の立場から」

西村ユミ(静岡県立大学看護学部)

「看護学校のエスノグラフィーから実践の時間論の構築へ

ー現場から理論生成の試みー」

香川秀太(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

指定討論：川野健治(国立精神・神経センター精神保健研究所)

西條剛央(国立精神・神経センター精神保健研究所)

● シンポジウム 3 (p. 38~47)

「記念日と記念碑」

教育学部第1 講義室

企画・司会：矢守克也（京都大学防災研究所）

話題提供：

「9. 11ーアメリカ同時多発テロはいかに記憶されているのか、記憶されようとしているのかー」

寺田匡宏（国立歴史民俗博物館）

「1 月 17 日～社会学の立場から」

今井信雄（神戸大学大学院自然科学研究科）

「12. 26ーイラン南東部地震：協働想起のツールとしての絵画展」

渥美公秀（大阪大学大学院人間科学研究科）

15 : 40 ~ 17 : 10 対談、ワークショップ、講演と対話 (p. 48~63)

● 対談 (p. 48~53)

「倫理的実践としてのフィールド研究」

文学部第2 講義室

企画：日本質的心理学会研究交流委員会

対談：

「市民社会に支えられたアカデミック・コミュニティへの忠誠としての倫理実践」

樫田美雄（徳島大学総合科学部）

「倫理はあとからついてくる」

杉万俊夫（京都大学大学院人間・環境学研究科）

進行：抱井尚子（青山学院大学国際政治経済学部）

● ワークショップ (p. 54~57)

「福祉と医療における質的研究の生成プロセスー若手研究者が語るデータ・プレゼンテーションの工夫」

教育学部第2 講義室

企画：田垣正晋（大阪府立大学社会福祉学部）・山崎浩司（京都大学大学院医学研究科）

話題提供：

「語りから論文への生成プロセス」

田垣正晋（大阪府立大学社会福祉学部）

「保健医療分野における質的研究の生成プロセス」

山崎浩司（京都大学大学院医学研究科）

指定討論：無藤 隆（白梅学園短期大学）

● 講演と対話 (p. 58~63)

「工学と質的心理学の弁証法—質的研究にかかる期待と不安、そして展望」

教育学部第1講義室

企画：塩瀬隆之（京都大学大学院情報学研究科）

話題提供：「職人のものづくり技能をめぐる工学の視点と質的研究の視点」

塩瀬隆之（京都大学大学院情報学研究科）

指定討論・対話：

「工学における質的研究の可能性と意義」 佐伯 胖（青山学院大学文学部）

「テクノロジーの社会・文化的文脈での検討のための質的アプローチの必要性」

大谷 尚（名古屋大学教育発達科学研究科）

17:30~19:00 招待講演

(p. 64~77)

<< TRANSFORMATIONS AND FLEXIBLE FORMS:

WHERE QUALITATIVE PSYCHOLOGY BEGINS >>

文学部第3講義室

企画：サトウタツヤ（立命館大学文学部）

やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

司会・紹介：サトウタツヤ（立命館大学文学部）

やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

講演：Valsiner, J (Department of Psychology, Clark University, USA)

日本語解説：當眞千賀子（国立国語研究所）

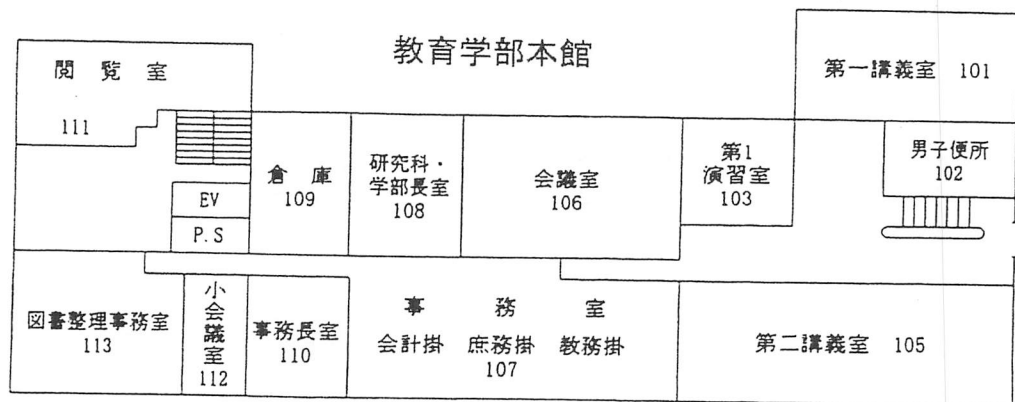
19:20~(20:40) 懇親会

カンフォーラ

京大時計台正面にある「楠」の学名にちなんだカフェレストランで、参加者同士の交流をお楽しみ下さい。今日一日の議論を味わいつつ、明日につながる新たな出会いが数多く生まれることを願っております。

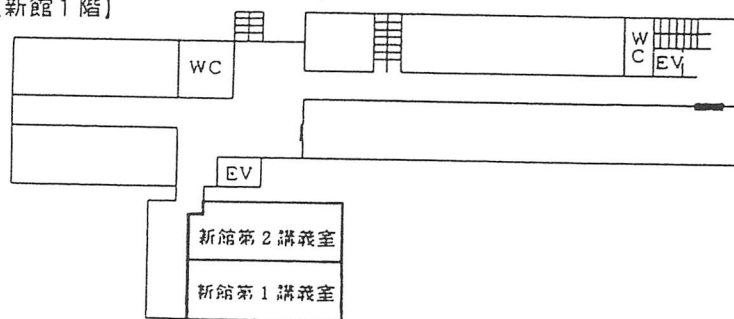
会場案内

受付	教育学部	ロビー
クローク	教育学部	第1演習室
書籍等展示、休憩室、	文学部	第1講義室
大会シンポジウム 「質的研究の方法論—K J法とグラウンデッド・セオリー」	文学部	第3講義室
総会	文学部	第3講義室
シンポジウム1 「他者との出会い 教育のフィールド：出会いを記録する」	文学部	第2講義室
シンポジウム2 「質的研究はいかに『科学的』たりえるか？—医療・看護領域の研究に学ぶ」	教育学部	第2講義室
シンポジウム3 「記念日と記念碑」	教育学部	第1講義室
対談 「倫理的実践としてのフィールド研究」	文学部	第2講義室
講演と対話 「工学と質的心理学の弁証法—質的研究にかかる期待と不安、そして展望」	教育学部	第1講義室
ワークショップ 「福祉と医療における質的研究の生成プロセス—若手研究者が語るデータ・プレゼンテーションの工夫」	教育学部	第2講義室
招待講演 「TRANSFORMATIONS AND FLEXIBLE FORMS: WHERE QUALITATIVE PSYCHOLOGY BEGINS」	文学部	第3講義室

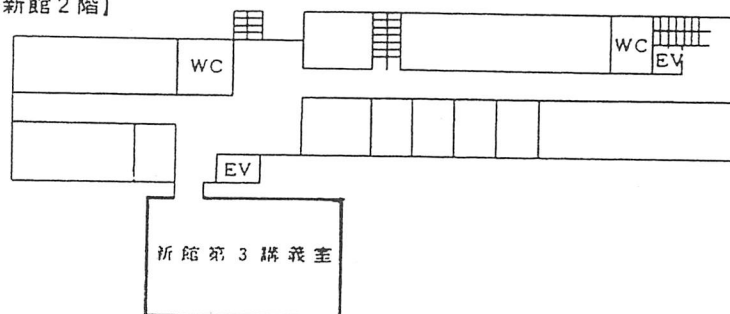


1階

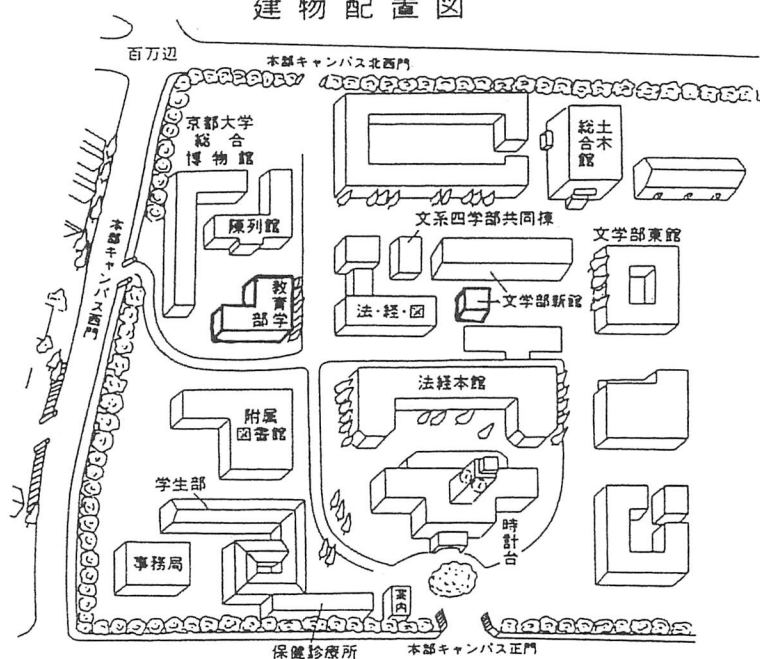
文学部 【新館1階】



【新館2階】



建物配置図



大会シンポジウム

大会シンポジウム

質的研究の方法論 ―KJ法とグラウンデッド・セオリー

企画: やまだようこ(京都大学大学院教育学研究科)

司会: 能智正博(東京女子大学文理学部)

<グラウンデッド・セオリー法の意義と発展>

グラウンデッド・セオリー法の分析的ポテンシャル

水野節夫(法政大学社会学部)

グラウンデッド・セオリー法をもちいた分析

戈木クレイグヒル滋子(東京都立保健科学大学保健科学部)

<KJ法の意義と発展>

三大科学方法論の時代

川喜田二郎(川喜田研究所・東京工業大学名誉教授)

KJ法図解化の核心

川喜田二郎(川喜田研究所・東京工業大学名誉教授)

やまだようこ(京都大学大学院教育学研究科)

<総合討論>

KJ法とグラウンデッド・セオリー

企画趣旨: やまだようこ

KJ法とグラウンデッド・セオリー(以下、GT)は、両者の主著である「発想法」と“The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research”が同じ1967年に、日本とアメリカで発表されており、ほぼ同時代に発展してきた方法論だといえよう。

KJ法とGTは、両者ともに、それまでの「理論」のあり方や実験や調査を中心とした「科学的方法」の批判から出発し、フィールドを重視した科学論とアプローチ方法と具体的な技法の提案を含んでいた。理論的にも方法論的にも、数量化イコール科学的であるかのような当時の科学の方法論に対して、質的研究の科学をつくっていくための革新的な提案を含んでいた。両者は、現場を重視したフィールド科学の発想に基づいた質的研究の方法論として、現在では、すでに古典の位置をしめており、技法としても広く用いられるようになっている。

しかし、両者ともに現在では、批判・対抗理論としての位置づけから脱して、新たな時代を迎えている。KJ法が対抗した、書斎科学は衰退し、実験科学のほかにフィールド科学が必要であることは、すでに幅広い学問領域で認められ、むしろ歓迎されるようになった。GTが対抗したグランド理論(誇大理論)は、現在ではかつての繁栄を想像できないほど崩壊してきた。一方で、フィールド科学や質的方法論への関心は高まるばかりであるが、その方法論の発展が伴っていない。それらの普及とともに、KJ法もGTも、単なる表面的な技法・技術としての利用のされ方も見受けられる。本来の「科学論」としての「ものの見方」を十分に吟味し、実践的な分析に基づきながら方法論としてさらに発展させる理論的検討が十分になされてきたとはいえない。特にKJ法においては、欧米を中心とした

G Tとは、発展のしかたも対照的である。G Tが、今では質的研究法の古典の位置をしめ多様な展開を生んでいるのに対して、K J法は「技法」「技術」としては広く普及したが、学問の方法論として理論的、概念的に練り上げてアカデミックな場で議論されることは少なかったように思われる。その生成継承的な発展は、次の世代を生きる私たちや、その次の将来世代に託された仕事であろう。

K J法とG Tをつきあわせて、その両者の特徴を十分に吟味し対話させてみたいという夢は、私にとっては長年あたためてきた萌芽のようなものであった。その夢が、それぞれの領域の第一人者をお迎えして、このような「質的心理学会」という新しい学会を発足させる記念すべき場で、ともかく芽吹いたことはありがたいことである。

K J法やG Tの内容を、単に技法の紹介や解説に終わらないで、現代科学の最先端の水準と照らし、質的方法論をどのように生産的にしていくかという観点から、双方を発展的に吟味し議論できればと考えている。また両者共に、書物を読んだだけでは、方法論や技法の実際はわからないので、できるだけ具体的な分析の方法を提示していただき、具体例に基づいて議論できるようにすることも、話題提供者にお願いした。

K J法とG Tを真に対話させるには、ともに長期の研究実践を経た上で、細かい用語の相異を超えて理論的一般化をしていく作業がある。その両方についての深い経験の裏打ちがなければ、両者を簡単につきあわせることは難しい。このシンポジウムは、無謀ともいえる実験的な試みであるが、今後の学問の新しい発展の第一歩になることを願っている。

<参考文献>

- Glaser, B.G. & Strauss, A.L. 1967. The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research. Chicago: Aldine Publishing Company. 後藤隆・大出春江・水野節夫 (訳)
1996 データ対話型理論の発見 新曜社
川喜田二郎 1967. 発想法 中公新書
川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ 2003. K J法の原点と核心を語る -川喜田二郎さんインタビュー 質的心理学研究 第2号, 6-28. 新曜社

グラウンデッド・セオリー法の分析的ポテンシャル

水野 節夫

(法政大学社会学部)

Grounded Theory Approach (以下、GT もしくは GT 法と略記) の分析的ポテンシャルはどういったところにあるのか。ここで考えてみたいのは、この問いである。

1990 年の Basics of Qualitative Research (第 1 版) 出版以来、とりわけ英語圏での社会調査論の領域において質的データ分析の手法としての GT の存在が大きくクローズアップされていく中で、さまざまな GT 論/GT 理解が蔓延することになった。その結果、GT 法という言い方でどういった内容のことを理解すべきか、といった点をめぐってさまざまな見解が乱立することになり、GT 理解・活用のポイントが見えにくくなっている状況が続いているように思う。

ぼく自身は、事例媒介的アプローチ (Case Mediated Approach) でのデータ分析を行なっているので、CM 派と言ってい立場にある者だが、GT 法とは The Discovery of Grounded Theory (1967) の翻訳 (1996) だけではなく、それ以前から質的データの分析訓練という脈絡で——GT の共同開発者の一人である A. Strauss 氏との交流も含めて——それなりに長いつきあいを重ねており、そうした経験を通じて、GT 法は、素材群やデータ群の分析局面で、とりわけその能力を発揮できるだけの可能性＝ポテンシャルを持っているという判断をしている。つまり、質的データの分析手法としての GT を高く評価する立場にあるわけだが、GT の分析的ポテンシャルを引き出してくるためには、どういった GT バージョンを構想することが必要なのか、GT の論理のどういったところに着目すべきなのか、といった点について——要するに、GT の分析的ポテンシャルはどこにあるのか、という点について——ぼくなり見解を提示することが、GT 理解が混沌としてきている現状においては、それなりに意義があると考えている。

ここでは、その問いに答えるために、次の順序で話を進めていくことにする。

まず初めに、M. Alvesson and K. Skoeldberg, 2000, Reflexive Methodology: New Vistas for Qualitative Research, Sage. の中で提起されている GT 批判の論点を紹介する形で、GT がどういった問題を抱え込んでいると見られているか、という点に言及する。ここで注目するのは、

(い) GT は帰納的アプローチ (inductive approach) か？

(ろ) GT は月並みなカテゴリーを生み出してしまっただけではないか、という問題、それから

(は) Strauss 氏らが提起しているコード化枠組み (coding paradigm) についての批判的論評の 3 つである。なお、(ろ) の問題は、GT が言うところのコード化作業が‘退屈’という印象、並びにぼくが‘瑣末主義の罠’と呼びならわしている問題とも関連した論点である。

次に、これらの論点を睨みながら、GT 法の分析的ポテンシャルを引き出してくるために、GT 法による概念化の論理の諸特徴について再検討を加える。

GT 法の論理として着目するに値すると考えているものは、

- (a) 《inductive approach》；
- (b) 《concept/indicator》モデル；
- (c) 《category/property; property/dimension》；
- (d) 《comparison》；〈比較・対照〉効果；
- (e) 《theoretical sensitivity》；
- (f) 《coding paradigm》；
- (g) 《fit and work》の発想；

などであるが、報告時間の関係もあるので、実際の発表でより詳しい説明・議論を行なうのは、これ

らの項目のうち、(a) (b) (f) の3つに関連した次のようなテーマである。それらは、

(A) GT 法は帰納的アプローチ (inductive approach) なのか；

(B) 《concept/indicator》モデルのありうる意味をめぐって；

(C) コード化枠組みをどう位置づけ、どう生かすか；

の3つである。

(A) の論点については、帰納的アプローチとしての GT 理解の例を紹介する形で話を始めながら、GT 法は、帰納的アプローチを含むもの、もしくは帰納的アプローチという側面を持っているという位置づけを再確認する。その上で、‘帰納的アプローチ’と言われていることの意味の再検討を行なうことを通して、GT での分析作業は、帰納的アプローチとして定式化するよりも、〈ボトムアップ〉的検討作業の奨励をしているものと位置づけた方がいいのではないか、という議論を展開する。

次に (B) の論点に移って、まずは、この議論が概念化立ち上げ局面での主題であることを確認した上で、指標と概念とをセットにするという考え方は、《X という概念上の事象を経験的レベルで指し示すもの》という形で結びつけられているということ、つまり、そこでは、概念 (→カテゴリー) と素材群・データ群の中に見出される特定のものとを関連づける論理が問われている、ということを指摘する。そして、この X を埋めるものとしての (概念としての様々な展開可能性を持った) 〈複数の概念〉もしくは 〈possible concepts〉という発想の大切さに着目する。この議論脈絡で、この〈concept/indicator〉モデルの発想が、実は Strauss 氏らのみの特殊なものではないことを、P.Lazarsfeld の議論に遡って再確認した後、C.Peirce のアブダクション論や、C.Ginzburg の徴候論、さらには S.Freud の症候論の発想や議論とも接続可能なことを示すことにする。その上で、GT の分析的ポテンシャルを生かしていくという観点からすると、指標を概念へと関連づけていくにあたっては、そこに事実上 C.Peirce が言う意味でのアブダクションの論理が関与しているとみなすことができるのではないか、という問題提起を行なう。そして、(A) での主張と関連づけることによって、GT を《ボトムアップ+アブダクション》という形で位置づけ直すことが重要だ、という主張を展開する。

最後に (C) の関連では、次の3点を指摘する形でコード化枠組みの位置づけ・意義づけを試みる。まず第1は、コード化枠組みの構成要素としてあげられている各項目の位置づけ方についての私見である。まず〈条件 (condition)〉と〈帰結 (consequence)〉は、Alvesson らのいわば ‘きつきつの因果主義’ 的解釈とは違って、ゆるやかな因果論への取り組みの発想として位置づけることができるし、そうすべきだということ。〈方略 (strategy)〉は、行為主体の側の意図・狙いの契機への着目を、また〈相互行為/相互作用 (interaction)〉は、複数の行為主体間に見られる相互行為/相互作用自体が個々の行為主体の行為には還元することができず、それ自体が創発的に生み出してくる独自の論理を備えているという点への着目を、各々示している、という具合に、位置づけるべきではないかということである。第2は、ぼくが ‘(素材群やデータ群への概念群の) 動員原則’ の発動と呼びならわしていることに関連している。これは、とりわけ条件や帰結について言えることだが、コード化枠組みにおいては、何の条件、何の帰結といったことはあらかじめ明示されていない。つまり、初めから何が条件や帰結になるのか、という点を決めつけるのではなく、素材群・データ群と向き合う中から分析者がそれらとの関連で実質上効果を発揮している可能性の高い条件群や帰結群を (場合によっては何度も試行錯誤を経ながら) 引き出し/絞り込み/特定化してくることができる仕組みとしてコード化枠組みは設定されている、という具合に理解することができるし、そうすべきだということである。最後に第3は、Strauss 氏らがコード化枠組み論の関連で提起している〈条件/帰結マトリックス (The Conditional/Consequential Matrix)〉についての見解である。ぼくとしては第2点として指摘したような形でコード化枠組みは位置づけるべきであるという立場である。そうした立場からすれば、条件/帰結マトリックスを実際の分析作業に動員してくると、素材やデータへの取り組む際の着眼点が形式的になりすぎる嫌いがあると判断しているので、ぼくとしてはこれを採用しない、ということである (ただし、メゾ的契機やマクロ的契機などに注目すべきではない、という意味ではない)。

グランデッド・セオリー法をもちいた分析

戈木クレイグヒル滋子
(東京都立保健科学大学保健科学部)

私の担当は、具体的な分析プロセスを通して、グランデッド・セオリー法の特徴と分析的可能性を示すことである。当日は、下記のインタビューデータを素材にして概念のプロパティとディメンジョン、理論的比較を中心にグランデッド・セオリー法に沿った分析をおこなってみたい。

<練習問題>

小児病院勤務中のナースQさんの語り

Qさんの経歴：A内科病棟（4年）→B外科病棟（4年）→認定看護師（がんコース，半年）→ 現在，C内科病棟勤務中

- 1 多分，自分の中の整理をしたかった部分が大きかったんだと思います。
- 2 結局はそのA病棟にいる4年間では，体験，経験はしてきたけど，それに対する答えが多分自分で何一つ出せてなかったなと思いますね。
- 3 だから，病棟を移してもらうことで，その場所から逃げたっていうことは今でも自分で思ってるんです。逃げたことは事実なんですよ。
- 4 でも，逃げても，結局はB病棟でも，そんなにたくさんは亡くなりませんけど，亡くなる子達はいますし。
- 5 そういう時に，何度かそういうことをみていたりするうちに，自分の中できちんと解決ができてないので，また同じような状況に・・・
- 6 ただ，頻度が少ないので，自分が次の段階までに時間が癒してくれるものっていうのがたくさんあったので，それの中では次の時に迎えられるような，何とか自分の精神状態っていうのがあったんだと思うんですけど，
- 7 A病棟の時にはなかったんですよ。自分を癒すだけの。
- 8 体力的な労働も，すごくこの頃はすごくいろんな意味で。
- 9 白血球を上げるお薬とかっていうのは今ありますけど，吐き気をとめるお薬とか，その頃は全然そんなのはなかったんで，1回もう抑制がきちゃえば，もうずっと熱が高熱が続いて，点滴はもうずっと何人もやっていて，なかなか白血球数が戻ってこなくて，2，3ヶ月は同じような状態が続いてとか，

- 10 その中で移植もやってて、でも、移植もやっぱりそういうふうな白血球を上げるお薬がなかったんで、やっぱり3、4ヶ月はフルにお部屋の中に入れておかなきゃいけなかったりっていうのもあったので、労働的にもすごく大変だったし、
- 11 そのなかで、やっぱり血小板とかが少なければあっちこっちで出血もするしという、
- 12 そのなかではかなり厳しい、労働的にもかなり厳しい労働だったんですよ。
- 13 ただ、毎日の繰り返しのなかで、子ども達が亡くなっていった、自分の気持ちの整理なり癒しができないうちにまた次が襲ってくるって、そういう積み重ねの中で、きっと自分の許容量を越えたんだと私は思ってるんですね。

質問 今はどうですか、今度C病棟ですけどまた内科ですよ、昔に比べれば亡くなるお子さんの数は少ないかもしれないですけど、亡くなる方は確実にいらっしゃいますよね、そういう中で働いてらして。

- 14 そうですね。だから、10年前にいたA病棟の時の気持ちと今は、結局また経験も積み重なったっていう部分もあるのと、あとまあ、がんコース（認定看護師コース）に勉強に行ったりとかした部分もあって、自分の中でうまくタイミングが掴めるようになったんだと思います。
- 15 亡くなっていく子どもの何か求めてくるものとか、あと家族と接触するときのタイミングっていうのが、うまく自分で掴めるようになったんだと思うんですよ。
- 16 だから、亡くなることは悲しいことだし寂しいですけど、でも自分の中でただ寂しいとか、何もできなかったっていうことよりも、うまく必要な時期に必要なことができたんだっていう思いの方が少し勝ってきましたね。
- 17 で、本当につい最近1人亡くなってたんですけど、亡くなったことはすごく悲しいと思うんですけど、今の自分達の中で、あの子にしてあげたいなと思うことはできたんじゃないかなっていう評価があるので、悲しいけど悔しくはないっていう部分があるんですよ。
- 18 きっと、だから、悔しい部分が昔は多かったと思うんですけど、そういう部分は少しずつ自分の中で出てきたのかなって感じがしますけど。

三大科学方法論の時代

川喜田 二郎

(川喜田研究所・東京工業大学名誉教授)

私の個人的・主観的センスからいえば、現代的な科学の出現は、漸く 17 世紀ぐらいからではないかと思う。この世紀にデカルトやニュートンの活躍が知られている。この頃にまた自然科学的な研究活動が目立っているようだ。それはまた、データを数量的に分析する実験科学的方法が目立ち始めた世紀でもあったのだろう。

けれども広く学問の発生を考慮するなら、科学の発生はおそらく西紀紀元前 3000 年の昔に遡るだろう。その頃に、われわれの祖先は、文字というものを発明したのだ。間もなく、文字の蓄積効果の蔭で、さまざまな知恵が発達し、学問が出現する。こういう知恵の貯蓄するところ、書物というものが現われ、間もなく書物や専門家の貯蓄の中から、「科学」と言える程の文化的産物が現われ初めたのだろう。少くも西紀前 2000 年紀には、その初期的な科学が知られたようである。

やがてギリシャにプラトンやアリストテレスが知られる頃ともなれば、少くも「科学」と呼んで差し支えない程の学問が、既に古代の末頃には出現していたのかもしれない。とはいえ、「実験科学的」といえる程の自然科学的な研究ともなれば、遥かに後れて、西欧ではルネッサンス期のレオナルド・ダ・ヴィンチあたりまで飛び離れてしまうだろう。

ここまで科学方法論の発生を考えてみると、当然のことながら、「西欧」という狭い視野ばかりから考えていては、大きな誤りを犯すことになる。書齋科学だけを考慮に入れても、中国・インド・イスラム教圏・チベット・日本などを逸することはできないのだ。その上に、「書齋科学」・「実験科学」以外に、もうひとつ非常に広大な開拓領域を持つ「野外科学」の時代が、現在、まさに到来しつつあるのである。それは、書齋や実験室といった閉鎖的な仕事場でなく、広大な野外で、しかもその広大な野外を取材の場所に活用している科学である。

更にそれに加えて、非常に重大な方法論上の特色があるのだ。それは、この野外科学では、書齋科学のような読書を通しての分析でなく、実験科学における計測的分析をとするのでもない、「創造的総合」を主とするデータ処理をすることである。そのデータ処理の中心的な方法こそ「K J 法」というものに他ならない。

こうして、私は次のような歴史的展望を、ひとつの試みとして提案してみたい。
すなわち

- (1) 現代は三大科学方法論の時代である。それは、歴史的順番でいえば、書齋科学→実験科学→野外科学、である。
- (2) 野外科学の出現は、新しいせいか、まだ充分認識されていない。従って、書齋科学や実験科学と対比して、相似よりも相違を、特に注目することが大切ではないか。
- (3) 書齋科学との対比では、まず読書よりも野外調査（フィールドワーク）を重視する。それは現場の観察を大切にすることと結びついている。更にそのデータの記録手段が、書齋科学よりも遥かに多種多様に探し求められるのである。
- (4) 実験科学と対比すると、実験器具よりも現場観察を重視するが、定量的データに拘泥するよりも、まず定性的な観察が大切となる。量よりも質的な取材と記録が重視され、それが、いつどこで得られたのかが大切となる。
- (5) 更に野外科学では、その多種多様のデータを、誰が、何時、どこで取材し、誰の手でまとめられたのかが、書齋科学や実験科学の場合よりも、いっそう重視されるべきであろう。それは個性的な状況が、書齋・実験両科学よりも、こみ入っているからである。
- (6) この野外科学の出現と共に、K J 法は必須の方法論のひとつとならざるを得まい。なぜなら

ば、その野外科学のデータは、まず定量的よりも定性的に確保すべきだからである。それが実行できてこそ、「総合する」という道が開ける。もつと的確には「創造的综合」の道が必要なのである。そういう段階に来たのに、実験科学に執着してきた現代の科学は、定量的データに没入しながら、K J法のような定性的なデータ処理を軽んじ続けてきたからである。

K J 法図解化の核心

川喜田二郎（川喜田研究所・東京工業大学名誉教授）
やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

やまだ（2003）は、K J 法の核心は何かを探るインタビュー論文の最後のまとめとして、G T と K J 法を比較して下記のように記した。今回のシンポジウムにおける話題提供は、その論稿のさらなる発展をめざしたものである。

K J 法は、フィールドで得られた細々とした種々雑多で具体的なデータをすべて生かしながらか、ボトムアップで順次に表札をつけながら大きなまとまりにしてい、ついには、「図解化」によって、ひと目でヴィジュアルに全体の意味のつながりを直観的に把握できる方法である。「図解化」は、G T と比較したときに K J 法の長所をきわだたて特徴づけられる重要な部分だと考えられる。それで今回は特に、「図解化」に重点をおいて、具体的にその核心となる特徴を取り上げてみたいと思う。

図解化の資料としては、1985 年に作られた川喜田二郎、自筆の K J 図解の一部「ネパール山地に技術協力するには？—R 2 細部 2（K J 法ラウンド 2 の図解。R 2 細部 1，2 図解のうちの 2 枚目）」を用いる。（添付資料参照）

シンポジウムでは、やまだの問いに応じて川喜田が解説する形で、対話的なやりとりによって、まさに生の「現場」の語りのなかで、「図解化」の特徴を浮き彫りにしていきたいと考えている。

このインタビューの成果の一つは、K J 法の原点となった認識論「ものの見方」を明確にしたことだと思う。最初の論文が「絵画におけるリアリズム」であったことは、K J 法が視覚的イメージを最大限に使用する図解化を特徴とすることからみても興味深い。K J 法は、フィールドのデータからボトムアップで理論生成に向かう方法論として、「発想法」と同年に出版されたグラウンデッド理論（Glaser, B.G. & Strauss, A.L. 1967）と共通点が多い。しかし、根本的に異なるところは、グラウンデッド理論が、概念のカテゴリーを礎石として概念的に理論構成するのに対して、K J 法では一度バラバラにしたカードの意味的エッセンスをもとに創造的に総合して、図解による新しい「意味連関」をつくりだすところである。要素となるカテゴリーからがっちりした建築物を造ろうとする方法論と、視覚的なイメージを使ったやわらかな連関図をつくる方法論の違いといったらよいだろうか。K J 法では、「イメージ」を重視した図解化と、「語り」による言語化による筋立てという質の異なる二つの表現方法が巧みに組み合わされていることも強みである。カードに記された言葉を、概念的なカテゴリーにするのではなく、ひとりひとりの人間であるかのように、その言葉が何を言おうとしているか、情念をもって耳を傾けるという考え方が、生き生きした発想と、人と人に関係づけるグループワークの思想にむすびつくのである。

<参考文献>

川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ 2003. K J 法の原点と核心を語る —川喜田二郎さんインタビュー— 質的心理学研究 第 2 号, 6-28. 新曜社

シンポジウム 1-3

対談

ワークショップ

講演と対話

他者との出会い 教育のフィールド：出会いを記録する

企画・司会：秋田喜代美（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供：鯨岡峻（京都大学大学院人間・環境学研究科）

佐藤公治（北海道大学大学院教育学研究科）

箕浦康子（お茶ノ水女子大学開発途上国女子教育協力センター）

企画要旨

1 教育のフィールド研究の魅力と困難

「育む一育つ」、「教える一学ぶ」という教育の営みが行われるフィールドやそこでの子どもたちの世界に魅かれ、研究を行おうと志す者は多い。私もその一人である。しかし、一旦その場に入れてもらって、その豊かさと混沌の中で、何に焦点を絞ってみていくと研究になるか、研究の問いはいかに立ち現れるのか、いかにしてその豊かさの中で自らの研究にしていけるのかという点に苦勞する院生も多いのではないだろうか。教育のフィールドでの研究の過程には、それぞれの過程に難しさとおもしろさが同居しているように思われる。

まずリサーチクエッションの問題である。仮説検証のためにあらかじめ準備した指標や尺度をもってその場に一時的に入ってある情報を得ていく研究のスタイルとは異なり、いわゆる場に入り関わる研究では、まず何を見るか、何が見えてくるかが問われることになる。ある出来事に関わり始めるとそれに巻き込まれて対象と距離をもって、研究者が物を見られなくなること、またある所にこだわることで全体がみえにくくなるということが生じる一方で、それだからこそ、研究者の側にもその実践の中に埋め込まれ身体化された実践知が培われ、その場に居合わせた者でしか見えないものが見えてくることも多い。場の内側や周辺にいるからこそ、フォーマルな形では聞き取れない声も聞き取れ、その声や言葉が発せられる背後の出来事や文脈も理解できることが多い。自らの思いの枠を越え出た何に研究者自身が出会い追求していくか、その場で何に出会えるかが、まず問題になるだろう。この出会いが見えないフィールド研究は、場にながら型どおりになるだろう。家庭や学校での「教育」については、皆自らの経験や多くの情報を基にして何らかの価値判断をしたり、枠組みをもっている。その枠組みだけにとらわれ閉じることなく、新たなことをそこから切り取れるかどうか、特に教育のフィールドでは問われてくるだろう。

その際に研究対象である協力者と研究者である私との関係性の中で、どのようなスタンスと視座から研究を行うのかを既定するのは、研究者がフィールド以前から持っている理論的な枠組みと興味である。特定の子どもとある養育者、教育者との関係や相互作用に焦点を当てる研究、ある集団を対象としてその関係の中で行われる行為やそこでの人々の心理に焦点を当てる研究、また個々の場や個々の集団の事例を重ね合わせていくことでそこに一つの社会がもつ文化モデルに焦点を当てる研究など、同じ場の中でも何に焦点をあてるかによりさまざまな次元や分野の教育研究が可能となる。現場に行かないとアクチュアルなものは見えないということと、場においても理論やそれを支える哲学がないと日常の素朴教育学理論にとらわれて見えないという両面から、まず出会いと問いの次元で質的な研究は面白さとむずかしさを抱える。価値中立ではありえないが、そこで価値と一線を描いて現象をまず記録し記述することがもともとめられる。

リサーチクエッションを実際に探求すると、その豊かな場の中をどのような長さや範囲で継続的に観察していくのかという観点や研究の単位の分節化、何が始まりでどこが終わりか、そしてそれを実際に「言葉」やその他の補助的道具によって出来事をいかにして記録するのか、またその記録から何を引き出し論文として記述するのかという、それぞれの過程の中に困難が待ち受けている。心理学や統計学的手法を一通り学ぶことで、データ収集と分析方法について一般的な方法ならできるようになる数量的研究法と違い、質的研究法ではここに多様な方法とわが、困難がある。研究固有の内容とは分離不可能な方法論である。

そこでこのシンポでは、この記録という点に特に焦点をあてて、「言葉で表すわざ」を先達に語り議論してもらおう中で、記録ということを考えてみたい。補助道具としてのビデオやフィールドノーツと完成原稿での事例記述、またそのノートからいかに事例を、そして概念や枠組みを抽出していくのかなど、道具の使用や記述で使われる文体、語、細かさなどの選択それ自体がすでに、研究協力者と研究者の関係を示している。シンポジスト3人の話題提供の語りの中からその関係の相違と共通性を本シンポジウムの中で検討できたらと考えている。

2 質的心理学の「質」を問うこと

「教育」に関わる質的心理学のシンポジウムの企画を依頼された時に考えたのは、ある発達や教育の場にインテンシブに関わり、フィールドでの生身の声や姿を浮き彫りにされた研究を行い、自らの研究スタイルを作り出して論文を書き、世に問うてきた研究者に、上記1で出した問いについて語っていただきたいということであった。と同時に、おそらく自分の研究法を特に質的心理学という枠組みにこだわらずに行ってきた方に登壇いただくことで、ご自分の研究を元にして質的心理学なるものへの期待とあやうさへの警鐘もふくめて、語っていただこうと考えている。いわば自分の研究を「質的なんてわざわざ思っていなかった方たち」や「質的という言葉で研究を括ることに疑念をもっている方」の眼に移る質的心理学への注文を聞いて見ることから、これからの質的心理学のあり方を展望してみたいと考える。

それはまた、質的心理学の研究の「質」を問うことでもある。質的研究の評価はいかにあるのか、質の高い質的研究をするには何がもとめられるのか、記録や記述と質は切り離せない問題であるので、この点を議論したいと考えている。いわゆる先行研究という縦系や関連分野という横系からの独自性だけではなく、そこにその事例がいかに深く考えさせる洞察を含んでいるのかという3次元目の糸があって立体的な視点から質的研究は評価されるように個人的には思われる。シンポジストのお三方は、企画者の目から見ると、現象学、社会文化的状況論、社会心理学や文化人類学をバックにされているように思われるが、取り組んだ事例の中でこの3本の糸で立体的に現象を織り込んで記録し論じることをされてきている。かつ質的研究でも社会学ではなく心理学を基盤としているという共通性を持っておられる。

質的研究法は、近代科学が立脚してきた科学性や数量的処理による一般化、命題的語り口による普遍性という発想に対して問いをなげかける形で、新たな技法として生まれてきた（フリック, 2002）。これは教育のフィールドにおいては、研究技法としてだけではなく、近代が確立してきた発達観や教育・学習観の問い直しを迫るものである。表立って語られることなく、見えなかったものの何が、質的研究によってそこにどのようにたち現れてとりあげられてきたのかを問わなければならないだろう。このシンポジウムが、この意味で、細かな技法の議論だけにとどまらないで、発達や教育への一つの視座の呈示になればと考えている。個人だけではなく個をめぐる関係性や社会、文化のシステムをいかに問い、いかに見、そして表すのか、それは個を主体としてみてきた発達や教育観をいかに超えるのか。記録について語りながらもその基底音となるのは、この問いではないかと考える。そしてこの問いをめぐる議論は、シンポジストのモノログではなく、聴き手との対話と協働の上に成立するであろう。そのような対話の時間に、このシンポジウムがなることを期待したい。

<参考文献>

ウヴェ・フリック 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子（訳）2002 質的研究法入門 春秋社

子どもの発達を表す

鯨岡 峻

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

1 はじめに

何をもって「質的」というのか、また「現場」というのか、その出発点の議論が十分でないままに、「事例研究であれば質的」「仮説構成的であれば質的」「フィールド研究であれば質的」というような荒っぽい議論のまま、質的研究が展開されている現状を私は好ましいとは思っていない。筆者はこれまで研究者自身がフィールドに出向き、ある場面を生きる子ども、子どもと養育者、あるいは子どもと保育者の関係のありようを、素朴に生き生きと描き出したいと願ってきた。それは「事象をあるがままに」という現象学的精神に則ってという意味もあったが、むしろ生きた現場の息吹のようなものが私の身体に浸透してくるのを容易には排除できず、またそれがその事象の意味を捉える（捉え直す）上に欠かせないと、次第に考えるようになったからである。

私という研究者の身体に響いてくるものに意味があるのだという確信は、それを排除すべきだとする客観的観察の公準に対する疑問を導き、おのずからサリヴェンの「関与しながらの観察」という方法論に接近することになった。以来、客観的観察（自然観察）との対質のなかで、何が「関与しながらの観察」の本質なのかを吟味しつつ、この観察方法によって子どもとそれを育てる側の大人との関係を描き出すことに取り組んできた。つまり、関与しながらの観察によって場面を描き出しながら、描き出されたものを通してさらにこの観察方法を吟味し洗練するというように、記述される事象と記述方法とのあいだの往還運動に携わってきたということである。

この私自身の研究の枠組みからすれば、最近の「質的」や「現場」という言葉の使われ方には強い違和感がある。その最大の理由は、研究者の位置づけが曖昧なままに、「質的」や「現場」という形容が安易に用いられているように見受けられることにある。これは今年、昨年の発達心理学会における幾多の研究発表を通して痛感したこともある。以下、この問題意識から、与えられたテーマである「子どもの発達を表す」に接近してみたい。

2 エピソード記述と研究者のポジション

私が子どもと出会うのは、養育の場、保育の場、療育の場など、子どもが周囲の大人と何らかの関わりを持つ場である。その場の中で子どもが生きているそのありようが、私にとって「子どもの発達」を議論するための差し当たりの「データ」である。実際のデータにするには、そこに関わり手として、あるいは居合わせた一人の人間として、その子のありようをエピソードに描き出すことがどうしても必要になってくる。一例として、ここでは軽度発達障害（自閉症）の子どもの通級指導の場面を取り上げてみたい。現行の障害児教育の枠組みでは、精確なアセスメントによって当の子どもの抱える発達上の問題がどこにあるか（たとえばコミュニケーションが難しい、他の子どもと関係を持つことが難しい、等々）が明らかにされ、その問題を解決することに通じる何らかの働きかけが「指導」の中身になり、その指導の効果が子どもの行動上の変化として示されるというかたちになる。しかし、私にとっては、その子の通級指導教室の中での存在のありようが当面の関心である。

＜エピソード：通級指導教室におけるある子どもの様子＞

教室に入ってきたその子は、私の存在に気づいていないかのように、すぐさまおもちゃに向かい、それを動かし始める。しかし、そこに居合わせている私には、その子の身体全体から、単なる不安というのでも、単なる緊張感というのでもない、しかしどこかでそれらに通じるような、ある独特の感覚が発散されているのを感じる。その傍らに指導の教員が近づいて、ときどき短いことばを差し挟みながら（子どもの緊張感や不安感を解きほぐすかのような穏やかな声で）、その子の傍らでゆったりその子の遊びを見守っている。子どもは関わっていたおもちゃをうまく操作できない局面のところ、教員の手をさっと掴んでそのおもちゃのところに持っていこうとする（いわゆるクレーン現象）。そのときその教員は、「これはねえ、こうするといいよ」と落ち着いた声で、行き詰まりの打開策を提案する。そこから急にその子の遊びが活気付き、その子の存在のありように変化が生まれ、先の不安感や緊

張感のような独特の感じがふっと薄れる。そしてその身体が生き生きとしてきて、ごく自然な子どもと教師のおもちゃを挟んだやりとりになっていく。

このエピソード（素描）をここで取り上げたのは、①場に居合わせる観察者が常に何らかのポジションを占め、その存在が子どものその場でのありように何らかの影響を及ぼしていること、②しかし同時に、観察者は自らの生きた身体を通して、子どもの存在のありよう（身体の醸し出す力動感を警戒感や不安感、緊張感などとして）間主観的に感じ取っていること、③また観察者は、関わり手である教員が子どもの思いを間主観的に掴んで対応していることを間主観的に把握することができること、この3点に注意を喚起したかったからである。そしてこの3点は、関与しながらの観察の特質を示すとともに、観察者のポジションに言及せず、観察者をなかば透明化することによってその観察の客観性を担保しようという通常の客観的観察との違いを明示するものである。裏返せば、この3点を明確に意識しない観察、つまり研究者＝観察者のポジションを問題にすることなく、また間主観性を議論する必然性もないような観察の結果は、「質的」と呼ぶ必然性はないということでもある。

上記の3点は、少なくとも私にとって、その観察研究が「質的」と言えるための必要条件の一部である。しかし、それによって描き出された先のエピソードは、そのまま「子どもの発達を表す」ものではない。では描き出されたエピソードが子どもの発達を表すといえるためには何が必要なのだろうか。

3 エピソード記述とその発達的な意味

従来の能力発達の枠組みでは、能力的完成の道程に位置づけられる変化が「発達の変化」として取り上げられてきた。変化そのものが意味をもつというより、「完成へと通じる」と意味づけられてはじめて、それが「発達の変化」の意味を纏うのである。では、先のようなエピソードはどのような点で「発達的な事象」なのだろうか。それを議論しようとすれば、大人とのかかわりの中で何が子どもの中に育つか、あるいは何が子どもの中に育って欲しいと大人が願うかという問題に行き着かざるを得ない。つまり、「発達とは何か」というより根源的な問いに向かわざるを得ない。この根源的な問いに関して研究者＝観察者自身は何らかの「暗黙の理論」をもっており、それとの関連であるエピソードが発達的な意味をもつ事象として取り上げられことになる。言い換えれば、暗黙の理論がエピソードを取り上げさせ、取り上げたエピソードが暗黙の理論をより顕在化させる。この弁証法的な往還運動が、結局はその子の存在のありようをより深く理解することに繋がり、そのエピソードの発達的な意味を拓くことになるのである。

してみると、軽度発達障碍の子どもの発達の問題を、単に健常な子どもとの能力上の落差に求めるのではなく、その子のまさに主体としての存在のありように迫り、その生活世界的な意味を追い求めようという姿勢を持つからこそ、私は関与しながらの観察を方法とせざるを得ないし、またそこでのエピソード記述に向かわざるを得ないのである。この研究姿勢は、平均的な一般的な行動法則の定立を目指す数量的研究と異なることはもちろんだが、単に取り上げる事例や事象を対象化して向こう側に位置づけ、それを超越的な立場に立って論じるだけの非数量的な研究とも異なっているのは明らかである。

4 関与しながらの観察と研究者倫理の問題

関与しながらの観察において、「私」という研究主体をも研究に組み込むということは、そこに私の思い込みや錯覚の入り込む余地から完全にはなりえないこと、まかり間違えば、そこに恣意的な面が入り込まないとも限らないことを認めざるを得ない。それゆえに、このアプローチは、そのような思い込みや錯覚、あるいは恣意性をいかに免れるかについて、従来の客観主義とは異なる手続きや配慮が求められるし、またそのような「私」の経験がどのようにして公共化の道に開かれるのかについての認識論的な議論も必要になることはいうまでもない。しかしながら、それらを議論する手前で、フィールドに出る際の研究者の姿勢、研究協力者への配慮など、単なるインフォームド・コンセントの手続きを潜ったか否かの議論を越えた、研究者自身の研究に関する厳しい自己規律という意味での研究者倫理の問題が深く関わってくることを指摘しておきたい。これもまたその研究が真に「質的」と言えるための重要な基準だと思うからである。

教室の風景を表す

佐藤 公治

(北海道大学大学院教育学研究科)

1 何故、私たちは「教室」という現場に足を運ぶのか

学校の現場で展開されている活動は実に多様である。この学校という現場に対して私たち研究者が抱く研究上の興味・関心や研究テーマも様々である。だから、上記の問いに対してもいくつかの答え方があるだろう。しかし、どのような学校であっても、複数の人間が共通の時間と空間を共有しながら相互の関わりを持ちながら活動を展開しているという共通性は見出すことが出来る。ここでは、教室を相互的な関わりが行われている「場」という視点から論じる。

2 行為論という視点とその可能性

実践と行為への着目は、近代的主知主義への問い直しの作業を意味している。それはこれまでの心理学で取られてきた認識を主体の内部に閉じ込めて扱ってしまうことへの批判でもある。その原点はヴィゴツキーに求めることができる。当時の心理学の主要な趨勢であった人間精神の普遍性や過度な抽象化へと走っていったことへの強い危機感を背景にしてヴィゴツキーの理論は生まれたと言ってよい。ヴィゴツキーの文化・歴史的アプローチの中に流れている思想を継承する時には、いまだにかつての草創期の心理学が抱えていた問題をそのまま解消することなく続いている、今日の心理学を問い直すという批判精神を持たなければならない。

行為論は、人間精神を社会・文化的な文脈の中に位置づけ、さらに行為主体は決して社会的諸関係の中に受動的に組み込まれてしまうようなものとしてではなく、対象に積極的に関わりを持っていくものとして位置づけることを可能にする。例えば、ワーチ(1991)は次のように言う。「分析に際して、行為を優先するということは、人間を、行為を通して自身はもとより、環境と接触し、創造するものとみなすということなのである。このように、行為は、人間や環境をバラバラなものとしてとらえるのではなく、それらを一つの単位としてとらえて分析をはじめていく際の入り口を与えてくれている。」このように、人間精神を行為という視点から論じるということは、環境世界の中に身を置く者としての存在であること、そしてさらにこの環境世界からの刺激を受動的に受ける存在としてだけでなく積極的に環境に関わり、環境を能動的に作りだしていく者という位置づけを与える。

教室における相互行為を問題にする場合でも、新しい意味の生成や学習成立の基本を共同的な創発の活動、社会的な構築の過程に求める。そこでは明らかに伝統的な教え込みとは異なる新しい学習観を持つことになる。学習者に求められるもの、それは「学力」と言い換えても良い、は情報の記憶・蓄積ではなく、問題を共同で解決する力と、それに関わる諸々の能力・技能であり、センスである。ヴィゴツキーの「最近接発達領域(ZPD)」も、仲間との共同的活動によって新しい意味が創発されてくることを可能にする関係とゾーンのことでありと指摘する識者が多い(例えば、Wells, John-Steiner など)。

3 相互行為分析のいくつかの陥穽

教室の共同的学习の分析方法としては微視的な相互行為の過程に注目することが多い。相互行為分析からは教師も含めた参加者間の意味と理解の協同的構築の現実の過程を明らかにすることができる。だが、主に発話を中心にした相互行為分析が抱えているアポリアも同時に自覚しておかなければならない。

(1) 書き起こせずに残るもの

私たちが教室の現場で得た相互行為の資料の多くはVTRに記録されたもので、さらにこれらを文字化することが多い。ここで一つの大きな変換が起きる。話し言葉から書き言葉への置き換えである。話し言葉は発話の状況、文脈を背景に持ち、参加者の間で共有されている。さらに、現実の話し言葉にはイントネーション、微妙なニュアンスといった情動的要素を含んだ情報も同時に共有されてくる。ところが書き言葉では表記の制約上、これらの情報が欠落されることが多い。F.エリクソンに代表されるような発話のリズム、アクセント、イントネーションといったことを考慮した表記や分析は極めて

少ない。だが、相互行為は単なる情報の交換ではなく関係する者の間の感情的な交換でもあると考えると無視することは出来ない。相互行為の前提には花崎皋平が指摘するような共感的な関係や、竹内成明の言う相互性の関係が不可欠だからである。

あるいは相互行為の中で展開される心理的時間（カイロス）や沈黙、間といったものが持っている意味をどう表現するかといったことも十分な考慮がなされていない。かつてセルトーが研究者というものは日常の実践の中で研究室に持ち帰ることができるもの（デイスクール）だけを特権化して使用してきたが、持ち運べないで残されたものにこそ本質があるのだと警告していたことを思い出したい。

（２）集団と個の間の緊張関係

ヴィゴツキーは「思想はコトバの中で遂行される」と言う。自分の考えや思想はコトバを発する過程の中で作られ、明確になるということである。だが、同時に言語によって思想は置き換えることは出来ないのであって、思考と言語とはどちらか一方だけで説明し尽くすことが出来ない弁証法的関係として捉えるべきであるとも言う。ここから教室の言語的相互行為や発話の過程と個人の思考過程との関連を考えると、両者は相互に依存しながらも完全には一致しないということになる。実際に授業中の発話と子どもの思考過程には時間的なズレがあり、発話の後に自分の中でもう一度考えとか、他者の意見を自己の中の内化の過程で取り込むといった複雑な過程がある。だから、授業中の相互行為分析だけで理解の過程を捉えることは危険である。筆者自身の経験でも、個人の思考があたかも授業中の発言から分かるような過ちや、逆に発言がなかった子どもの思考過程を短絡的に何も考えていなかったように危うく解釈してしまうようなことが何度もあった。

ウエンガー（１９９８）は、彼の実践コミュニティ論の中で協同的活動の形態として「直接的な関与」に加えて、「想像による関与」を上げている。そこでは直接相互行為し合うという現在の時間における行為展開に限定するだけでなく、想像の中での相互影響や関係の結びつきも想定しなければならない。特に、メンバー同士のつながりや教室という共同体へのアイデンティティを論じる時には不可欠である。

（３）「発話行為」では、発話と行為者のどちらに力点を置くか

J.バトラー（１９９７）は、発話行為を問題にする時、発話を行う主体に力点を置くような考え方があがあるが、そこでは主体に問題が還元されてしまい、発話が持っている本来的な問題が主体という狭い世界に閉じこめられてしまうと言う。そうではなくて、発話そのもの、発話の行為としての機能に注目していくならば、発話の背後にある権力関係や発話の歴史性といった、発話が持っている社会的意味が与えられることになる。私たちは発話や相互行為だけを完結させてしまって、その背後にある問題を等閑視してしまう時がある。教室の相互行為にも歴史性や権力関係が背後にある。それらは日常の小さな出来事として表れることが多い。教室の相互行為は多重な関係構造の中でみなければならない。いわば相互行為はミクロとマクロを繋ぐ「中間領域」として位置づけることができるだろう。

４ 研究者と現場教師が持つリアリティとの乖離

近年、学校現場を研究のフィールドにした研究は明らかに増えている。研究者の種類も多様になってきた。学校における現場実践を行いながら研究をしている人も増えている。かつて呪文のように唱えられてきた教育心理学が学校現場へのレリバンズを持ってないでいると言う、いわゆる「教育心理学の不毛性」は克服したかのようにも思える程である。しかし、それは本当であろうか。

私たちは、あくまでも研究者という視点で学校の現場の現象を捉え、また一定の理論的・研究的な関心から分析を行う。その時、研究者の常としてミクロな相互行為の現象や分析に拘る時がある。あるいは授業というものを分析しようとする時には、一つの単元の学習や理解の過程を分析の１クールとして扱うことがある。例外的に１学期や１年間を通して観察するということもあるが、多くは単元を一つの観察の区切りにすることが多い。そこでは学習は扱えても、１年間の子どもの変化、これが発達であり、あえて学力とも呼びたい、を扱うことは出来ない。教師が持っている学習像は実はこのミクロとマクロの両方である。ここに研究者と実践者の間の乖離がある。あるいは私たちは子どもたちの学力の形成の過程にどう切り込んでいくか。これは学習者の学習評価をどうするかということともつながってくる。いまだ未解決の問題であるように思う。また、かつてパリンサーとブラウンが手がけ、最近ではヘレンコールによって詳細な検討が行われているものに「相互教授法」がある。これは生徒に先生役をさせることで学習者の主体的な参加形態を促すものであるが、この研究に代表されるような教室の参加構造を変革する実践的な試みも相互行為の研究として取り組むべき課題である。

マイクロとマクロの狭間で：記録されてないことを読み解くために

箕浦 康子

(お茶の水女子大学)

フィールドワークを支えるメタレベルのオリエンテーションは、解釈的アプローチ(interpretive approach)である。フィールドで出会う人々は、「自ら紡ぎ出した意味の網の目に支えられ (Geertz, C.,1973)」ているのであり、そのような網の目が文化で、その上で、そのような網の目にとらわれた人々がどのような意味世界に生き、どのように行動するかを事例に即して理解しようとする。質的研究とは、人間は意味を求める社会的存在であることを大前提とし、人間行動を人が生きている社会的・文化的文脈のなかで理解しようと試みる。

1 フィールドワークと構築主義

解釈的アプローチでは、現実とはさまざまな相貌をみせるマルチなもの、人々が生きている現実、再構築されたもの (Reality Remade) で、人は、そうした思い込みの世界で生きていると考える。本質主義に立つ論理実証主義では、再現可能な一定の手続きで明白な証拠を得て、それを理論的に説明できたとき、その発見された事実を「客観的」とするという合意が共有されてきた。これに対して、解釈的アプローチは、客観的現実の存在そのものに懐疑的で、人々が自分が生きている社会をどう解釈しているか (どう構築するか) を知ることこそが研究の一つの目的であると考え。しかしながら、そうした理解も、社会的現実についての多様な解釈の中の一つに過ぎない。また、彼らによれば、実証主義の手法で得られた「客観的事実 (データ)」も、一連の知的操作を通して「再構成された事実」であって、事実そのものではないということになる。

発達や教育の研究者は、「子ども同士のやりとり、大人とのやりとりに耳を傾け、それを記録」してきた。そしてこのシンポジウムは、どうしたらよい記録がとれるかがテーマである。わたしは、そうして記録されたものは、一体何なのか、それを「真実」と言っているのかという観点から問題提起したい。

「現実」は、ただ一生懸命見て記録しても、その姿をあらわさない。現実が豊かなデータを提供するのは、研究者が、「問い」を立てて現実を見る時である。したがって、フィールドワークから得たデータは、研究している事象の客観的な写しというより、フィールドワーカーが「問い」を持ってフィールドと関わった結果生成されたものである。現実とは、記録されることを待って「そこに」あるのではない。したがって、私のあり方で「現実」は変わって見える。

2 記録されてないものを読み解く力

論理実証主義者は、記録されたものだけを「現実」と受け取り、それ以外のものを持ち込むことを忌避する。

マイクロ・エスノグラフィーの中心的なテーマは、文化実践に埋め込まれた「意味」で、意味は、個人に内在するのではなく、主体と環境との相互作用の過程で構成される。フィールドワークの構造を図に示したが、マイクロ・エスノグラフィーでは、マイクロな次元で展開する諸事象がどのようなマクロな諸力によって枠づけられているのかを読み解くことを試みる。なぜなら、マイクロな個々人の次元を越えた多様なマクロな要因に枠づけられて、はじめてマイクロな次元での意味が生成してい

るからである。マクロな次元とマイクロな次元の個人の心理過程の相互浸透しあっていることは目には見えない。フィールドワーク中に集積されたさまざまなデータからそうした相互浸透を推定・解釈する。フィールドノーツに記録としては現れないものを、フィールドノーツから読み解くこと、解釈する力を涵養することは必要である。

3 分析ユニットとしての関係性：個人を文脈ごと捉える

従来の心理学研究法は、方法論的個人主義と仮説検証法に大きく偏っていた。フィールドワークは、対象者と接するのはその時だけの実験研究や調査と違って、「持続性と関与性」「微視性と全体性」「柔軟性と自己修正性」の3つの特色がある(Gaskins, S, et al.1992)。学校教育や子育ての場に継続的に関与することで、文脈によって異なる個人をその文脈との関係性において把握すること、また、先述のように微細な行為や事象の意味を理解するため、それらを取りまく大きな状況へ目配りし、マクロ次元とマイクロ次元の連携を明らかにすることが教育フィールドでの質的研究の特色と考える。

仮説検証研究では、問いもデータの Kategorisierung も対象に接する前に決める。仮説生成型研究では、まずフィールドに入って、ある程度データを集めてから問いを立てる。フィールドにどこを選ぶかの段階で、おおよそ研究したい方向は決まっており、全く白紙で研究をはじめているわけではないが、フィールドに入る前に立てた問いは、フィールドの現実をみて大幅に修正され、問いを立て直すのが通例である。こうして立てた問いも、データ収集・分析の進行につれて変化し、素朴な問いからより理論的な問いへと精緻化される。こうした途中修正ができる柔軟性こそが、個人を関係性のなかで理解することをめざす質的研究法の特徴である。もちろん、いつどのような修正を加えたかもフィールドノーツにデータとして記録を残す。

4 質的研究の「質」とは？

質的研究とは、私にとっては、「人間は意味を求める存在である」という人間観が根底にある、言語化されたデータを使う研究をいう。質的「心理学」とした途端に、マイクロな心理過程とマクロな次元の相互浸透性への視角が吹っ飛びそうである。心理学にこだわっている限り、記録（データ）密着系の小さな研究はできても、新しいパラダイムを産むような洞察のきいた研究は望めないのではないかと危惧している。

Gaskins, S, Miller, P.J. & Corsaro, W.A. 1992 Theoretical and methodological perspectives in the interpretive study of children. In Corsaro, W. & Miller, P.J.(Eds.), *Interpretive approaches to children's socialization*, New Directions for Child Development, No.58, San Francisco: Jossey-Bass.

Geertz, C. 1973 *The interpretation of cultures: Selected essays*, New York: Basic Books.

質的研究はいかに「科学的」たりえるか？ —医療・看護領域の研究に学ぶ—

企 画 : 松嶋秀明 (滋賀県立大学 人間文化学部)
企 画 : 西條剛央 (国立精神・神経センター精神保健研究所)
司 会 : 荒川 歩 (立命館大学 人間科学研究所)
話題提供: 斉藤清二 (富山大学 保健管理センター)
話題提供: 西村ユミ (静岡県立大学 看護学部)
話題提供: 香川秀太 (筑波大学 人間総合科学研究科)
指定討論: 川野健治 (国立精神・神経センター精神保健研究所)
指定討論: 西條剛央 (国立精神・神経センター精神保健研究所)

企画主旨

個人がもつ「意味」や「価値」をとりあつかうことが、質的研究の魅力であることは間違いないだろう。Bruner (1986)は「論理実証モード」と「ナラティブモード」という2つの思考様式を区別している。前者は論理的にうみだされる原則や観察可能な仮説を、観察された事実によって検証する。客観的、実証的であることを重視してきた、従来の研究はこの論理実証モードにもとづいていたといえる。こうした知は、しばしば個々人がもつ固有の意味づけを十分には扱ってこなかった。これに対してナラティブ思考とは、2つの出来事間の意味連関の探究へ向かう。質的研究の中には、このナラティブモードの知に注目する潮流もある。質的研究が台頭してきた背景として、このように論理実証モードにもとづいた研究への不満・反省からうまれてきたということも可能だろう。

このことは医療・看護領域の研究においてもいえる。例えば、医療場面では、医師に対する批判として「疾病をみて患者を見ず」といわれるようになって久しい。アーサー・クラインマン(1995)が注目したように、1人ひとりの患者のもつ病の経験を十分には扱ってこなかったということへの批判である。医療・看護場面において、質的研究の重要性に対しての認識が深まっていくのと、こうした批判に対して医療の質をあげようとする取り組みに注目が集まっていくことは同期していると思われる。質的研究がもつ「意味」への注目が脚光をあびているのだ。

と同時に医療・看護領域においては、研究結果が現場の実践形態を少なからず変化させ、必然的にユーザーが受けるサービスのクオリティーにも影響を与える。医療・看護領域において近年急速に注目を集めている「エビデンス・ベースド」という考え方は、従来の権威に頼った医療を否定し、本当に効果があるものを治療者側が提供できるようにすることを狙ったものである。「エビデンス」にみられるように、医療の質を客観的な根拠とともに向上させようとするれば、より堅実な結果を導くこともまた求められることになる。例えば、「少数例の検討」「分析者の主観を通した現象の記述」といった質的研究の特徴が、「結果をどこまで信じてよいのか」、「どの程度までとりいれたら良いのか？」といったように、研究結果への信頼性に疑問を抱かせる一要因となることもあるだろう。単に実践現場の詳細な記述に終わってしまい、そこから実践の理解につながっていか

いという危険性もある。

ここで以下のような問いが浮かび上がる。すなわち、「(従来からの) 質的研究の特徴をいかしつつ、同時に社会的な評価にも耐える科学性を満たすことは可能だろうか?」、「可能であるとすれば、それはいかにして可能なのだろうか?」という問いである。今回は、質的研究の特性を維持しつつ、同時に科学的であることを志向するために必要な条件をテーマとして考えてみたい。

さて、こうした目的のために今回は、医療・看護の領域において研究をすすめてこられた3人の先生方に話題提供をお願いした。富山大学保健管理センターの齋藤清二氏は、厳密な客観性が求められる医学の世界においてエビデンスの重要性和限界を認識しており、「エビデンス」を「ナラティブ・ベイスド・メディシン」の枠組みに位置づけることにより人間(全体)としての患者に関わる「人間科学的医学」を提唱しておられる。また、静岡県立大学の西村ユミ先生は、患者と看護師との交流の可能性について、現象学的観点から記述しておられる。ここで看護師が手を差しのべようとしているのは、自然科学的な発想からは交流することが不可能とされる遷延性意識障害(植物状態)患者である。患者との閉ざされた「交流」を開く鍵が彼らと関わる看護師の経験の中にあることに気づき、それを見出すことを試みつつ、研究の方法論を模索し続けている。そこでは「何をなすか」ということもさることながら、実践者として「いかにあるか」という意味づけの重要性があらためて提起されているといえる。最後に、筑波大学大学院の香川秀太先生は、現場での実習にでむいた看護学校の学生の学びのありさまをエスノグラフィックに記述することで、学校と現場の間にあって学生たちを戸惑わせる「時間の流れ」の違いについて考察している。この研究において目指されているのは、アカデミックな世界に貢献可能であり、かつ実践へと「再企投」することにより、実践活動への有効性もたらしうる新たな理論的視点の構築といえる。

以上みてきたように、3名ともに、質的研究によって現場のリアリティをとらえようとする志向性と、学的・社会的に求められる科学性の挟間で、なんらかの葛藤をかかえておられると思われる。当日は、それぞれに実際のデータ分析にあたっての留意点や、科学性をどのように担保可能しておられるかという2点に焦点化して、自らの研究を例示しつつ述べていただく。

また、指定討論者には、川野健治氏、西條剛央氏の2人をお迎えした。川野氏は、医療・介護場面などをフィールドとして、つねに斬新な切り口からの分析を展開されており、またそこで産み出された知は、単にアカデミックな場への貢献のみならず、現場に有用な知的ツールを生みだすことが志向されている。他方、西條氏は、「構造構成主義」という新たな認識論を提唱し、その原理を質的研究法の枠組みに援用することにより、質的研究の特長を減じることなく広義の科学性を満たすことが可能な条件や方法を提起している。そこでは哲学概念を駆使し、これまで質的研究者が素朴に迷いこんでいた様々な難問を整理し、その解決の方向性を探っているといえよう。このように「科学」と「質的研究」の魅力をよく知るお2人といえるだろう。

この5人による対話を軸として、会場にお集りいただいたみなさまとともに、「科学/実証とは何か?」という問いまで遡りつつ実践活動有益な知見をいかに生み出すかという点に焦点化し、建設的に議論を重ねてゆくことにより、領域横断的であり、かつ理論と実践つなぐ「視点」をもたらすことが期待できよう。

質的研究法と臨床の知

エビデンスとナラティブをめぐって

斎藤 清二

(富山大学保健管理センター)

医学・医療における研究法の変遷

医療・医学領域において、臨床に役立つ知の体系とは何か？そのような知の体系を構築するための研究法とは、どのようなものなのか？という疑問について正面から議論されることは、これまで意外に少なかったと言える。医学領域での研究法・研究論の流れを見ると、方法論としては明確に意識されていない広義の質的な研究（単数または複数の症例や経験についての記述的な研究や、統制群をもたない実験的な研究など）が、近年までその主体をしめていた。しかし、近年、細胞病理学、分子生物学などの、いわゆる生物科学的方法論が台頭し、医学研究とは、動物や細胞、さらには遺伝子といった材料を扱う基礎科学的な研究を指すかのような風潮さえ現れてきた。一方で、いわゆる臨床医学的研究法として、臨床疫学、バイズ統計学をその基本的な認識論とする、Evidence Based Medicine (EBM)に代表される量的・確率論的な研究法の重要性が叫ばれるようになり、臨床疫学的な研究以外に臨床における実証的研究ではないとする極端な見解さえ現れてきた。このような方法論をめぐる混乱や誤解、あるいは行きすぎによる弊害なども指摘される一方、医学・医療における、相互交流的・主観的側面を研究対象とする方法論の重要性も、近年ようやく主張されることが多くなってきた。

臨床の知と科学の知

中村雄二郎(1992)は、「個々の場所や時間の中で、対象の多義性を十分に考慮に入れながら、それとの交流の中で事象を捉える方法」として「臨床の知」を定義し、自然科学の知が、「普遍主義」「論理主義」「客観主義」を原則とすることと対比させた。この「臨床の知」の概念は、種々の臨床実践における強力な理論的根拠となり、実践・研究の進展に貢献してきた。しかしながら、医学・医療領域における、一般的な臨床知の体系の構築のための研究法の開発、普及には必ずしも結びついてこなかったと言える。

臨床研究と EBM

EBM は、それまでの権威者の見解や経験に頼る経験主義的な医療実践に異を唱え、医療実践における臨床判断を、過去に行われた人間集団を対象とする臨床疫学的な研究結果（エビデンス）に基づいて行うための方法論である。EBM とは、決して普遍的、客観的な真実を医療にもたらすものではなく、むしろ、限定的で相対的で、確率論的な情報である、臨床疫学的エビデンスを、有用な道具として臨床実践に持ち込むための方法論である。また、EBM とは、エビデンス、患者の意向（patients' preference）、治療者の臨床能力（clinical expertise）の3要素を臨床実践の現場において統合するこ

と、と定義されている。研究という観点から EBM を見た場合、エビデンスを臨床疫学的方法によって作り出すための方法論は整備されているが、臨床能力とは何であって、それは如何にして高めうるのか、あるいは、患者の意向とエビデンスを統合する方策とはなにか、といった事柄についての研究という視点は不十分である。すなわち、「臨床の知」の観点からは、EBM 自体は十分な研究的方法論を持っているとは言えない。

Narrative Based Medicine (NBM) と臨床研究

Narrative Based Medicine (NBM) は、医療における相互交流、関係性、主観、解釈、意味などを重視するアプローチであり、医療を、「語り」と「対話」を通じての医療従事者と患者の相互交流という観点からとらえ、記述しようとする。NBM の研究とは、臨床実践そのものを対象とし、現場での現象体験から、医療実践に役立つ「一般的な知」を紡ぎ出すことを目的とするものである。NBM の研究はまさに、中村が提唱した臨床の知の確立、改良を目的とする研究法であるといえるだろう。

NBM における研究法の原則

下記は多分に演者の主観を含むが、NBM の研究における重要なポイントを整理する。

- 1) 体験された現象をデータとして記述する形式として、数値や概念化された単語ではなく、ある程度まとまった言語記述である「ナラティブ」を用いる。
- 2) データの分析法は色々であるが、分析によって得られる「仮説」とは複数のデータの連続比較から浮かび上がってくる「構造」の記述であり、それも「ナラティブ」の形式をとる。この仮説は反証可能性が保証されていなければならない。
- 3) 得られた仮説は、継続的に改良されていくものであり、一つの研究において完成されるものとは考えないし、最終的に「普遍的な真理」に到達するものとも考えない。
- 4) 研究とは、仮説生成、仮説検証、検証に基づく仮説の改良または新たな生成、さらなる検証といった連続した過程であると考え。なお、仮説の生成と検証は、同一の研究の中でも行われるし、時間的に異なった研究間でも行われる。仮説は、抽象的思考や実験的環境で検証されるというよりは、常に実践現場に戻されて、実際の経験との比較により検証される。

広義の科学性をもつ臨床研究としての質的研究法

上記のような原則をふまえて、演者は、現時点における NBM における有力な研究法として、対話分析法、事例研究法、狭義の質的研究法などがあげられると考えている。本発表では、このうちで、少数事例についての縦列的な研究法である、構造仮説継承型事例研究法、比較的多数事例についての狭義の質的研究法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ法（木下）の NBM 領域への応用例について触れ、考察したい。

身体論的な視点が拓く地平—看護研究の立場から

西村 ユミ

(静岡県立大学看護学部)

1 事象の特徴と研究の方法論

何かに深く関心をもったとき、あるいは何かを明らかにしたいと思ったときに、それに対してどのようにアプローチするかを考えることになる。この「どのようにアプローチするか」という疑問は、明らかにしようとする「何か」と結びついて決められることになるが、その結びつきを吟味することを、ここでは「方法論」と呼ぶことにしたい。

私が深く関心をもっていたことは、遷延性植物状態患者（以下、植物状態とする）と看護師とのはっきり見てとれない関係である。植物状態患者は、刺激に対する反応という視点からその能力を評価すると、全身の運動機能のほとんどを、あるいは意識の徴候として見てとれる表現のほとんどを失い、ただそこに横たわっている物的存在として見てとられる。それゆえ彼らは、医学診断上の定義において、一見意識が清明であるように開眼するが、外的刺激に対する反応あるいは認識などの精神活動が認められず、外界とのコミュニケーションをはかることができない、と定義されてきた。ところが、実際にこうした患者と直に接している看護師たちの多くは、この定義からは想定できないような、患者との関わりの手応えを経験しているという。しかしこの手応えは、根拠立てて説明することが困難なために、これまで「思い込み」や「主観」とされ、看護師個々人の経験の内にしまい込まれたままであった。

この関わりの手応えの根拠を見出すために、私が最初に取り組んだのは、看護師が関わった際に患者に生じる生理機能変化の測定である。つまり、目に見えない変化を患者の側に見出そうとしたのである。先行研究においても、脳代謝や脳波、心拍変動などの測定が数多く行われてきた。患者のまばたきをビデオに記録し、そのまばたきから患者の意思ある返事を識別しようとした研究もみられる。しかしいずれの方法によっても、期待される結果は得られていない。これらの研究においては、患者はつねに観察される客体とされ、探求する側の観察する眼は、患者と距離をもったところに据えられ、患者と直に接して彼らに何らかの影響を与えることを拒んできた。しかし植物状態患者は、身振りや言葉での表現ができないのだから、ビデオに画像として記録してもそこには何の変化も映し出されないように、外側から眺めたり測定機器を取りつけてそれを数値化してみても何の手がかりも見いだすことはできないのである。

植物状態患者との関わりの手応えは、看護師が患者と直に関わる中で経験されたことであり、その関係の可能性を患者の側からのみ探求しようとする方法自体が問題を孕んでいるように思われる。つまり、見る者、関わる者と見られる患者とが分離された二項対立の図式、これを基盤とした方法自体が、患者を物的な身体の中に追いこみ、彼らとの交流を遮蔽しているのである。植物状態患者の定義に縛られた見方もその一つである。それらが、私たちの目を患者の状態ばかりに向けさせてきた。その袋小路から抜け出すためにも、患者との関わりの手応えは、患者に意識があるか否かを確認することからのみ探求するのではなくて、まずは植物状態というレッテルを取り払い、それを感じとった当事者の経験から問い直す必要があると考えられる。

当事者の経験を問い直すことを推し進めてくれたのは、科学的な認識以前の「生きられた経験」へと立ち帰ること、すなわち「世界を見ることを学び直すこと」を要請した現象学である。現象学では、知覚された経験をそれ自体として存在するものではなく、それを思ったり感じたりする人間の側の志向との関係の中で現象することとしてとらえる。つまり、知覚経験は、関係が第一次的であり、関係の両項である知覚する主体と対象の存在は、関係の成立を前提としているという意味で第二次的なものである。こうした考えに立てば、植物状態患者が他者と関係をもてるか否か、あるいは看護師の経験が客観的な根拠をもっているか否かは第一次的な問題にならない。そうではなく、患者との関わり合いの中で看護師に感じられること、つまり看護師にとっての現われそれ自体が問われなければならない。

この見る者と見られる者とが分離していない両義的な次元に分け入ることを可能にしてくれるのは、私たちの

＜身体＞である。そもそも自分自身の＜身体＞は、自らの目の前に客体としてあるのに先立って、まずは世界を知覚し経験する媒体、世界が現われるための媒体としてある。例えば自分の右手で他者に触れたとき、私にとってこの右手は、見える対象物、他者の身体と接触する物体として意識される以前に、他者の体のぬくもりが伝わり、その＜身体＞との一体感が得られる経験として現われるであろう。このような自分の＜身体＞に立ち帰ることによって、私たちは主体と客体、自己と他者の区別が未分化な次元の存在、つまり主体と客体という二項対立の手前にある＜身体＞固有の存在次元に気づくことになるだろう。

上述の議論の通り、この研究においては現象学、とりわけメルロ＝ポンティの身体論が探究の視点を定めてくれた。またこの視点に導かれて、具体的な方法を定めることとなった。

2 現場に身を置くこと・対話

これまでの議論から、看護師が経験している植物状態患者との関わりの手応えは、外側から観察することによってでは見えてこないばかりか、それを言葉で表現することも困難であった。そこで選びとった方法は、探求者であり記述者でもある私自身が看護の現場に身を置き、そこで起こっていることを共に感じとりつつその経験を看護師と語り合うこと、つまり「対話」である。対話において発せられる言葉は、相手との自由な討論を通して引き出されてくる。また対話においては、互いの言葉が互いの意味に触れ、そこでの「解釈」が新たな経験として生み出されてくる。こうした対話とそこで生じる解釈は、「自分が抱えていることさえ知らなかったような考えを引き出したりもする」（メルロ＝ポンティ）のである。つまり対話を介して語り出す作業は、経験していたその時には自覚せずにはいた、あるいは言葉にならなかった事実をあるかたちへと組み換えていく可能性をもつ。そこに、はっきり見てとれない関係が、僅かながらでも語りだされる可能性があると考えた。

ここでは、看護師 A さんが語った、特徴的な表現を引いておこう。A さんは、視線をはっきり合わせることにすら困難であった植物状態患者 U さんの目を日々のぞき込み、そこに次のような感覚を覚えていた。「こうある動きの中でも瞬時で、なんかこう、やっぱり『視線がピッと絡む』みたいなところがあるような気がする。…そういう『視線が絡む』ような瞬間が、瞬間として捉えられる。…」

ここでの U さんと交わした交流が、ただ「視線が合う」と表現されるにとどまったのであれば、これは私たちが日常的に少し注意をすれば気づくことのできる意識的な経験といえる。しかしながら、この経験を伝えるために A さんは、視線が「合う」のではなく、『絡む』と表現した。そして視線を感じられなくなったときには、「私が映っていない」と自分を見失ってしまったような表現を、また「底なし沼」「真っ暗」とその目を覗くのをためらいなくなるような表現を、そして「恐る恐る」という感情が引き起こされているような表現でこの感覚を伝えようとした。これらは、A さんが自らの知覚経験を表現しようとして、言いよどみながらもようやく探し当てた言葉であるといえよう。このように A さんの「視線が絡む」という表現が、さまざまな感覚を孕んでようやくそれとして表現されるような知覚経験であるとすれば、この経験は私たちの意識にのぼってくる手前の、認識以前の次元におけるいとなみと考えてもよいのではないか。つまりそれは、そこで起こっていることを反省的に捉えようとする以前に、すでに働きだしている感覚であり、それ故ははっきりと言葉によっては言い表すことができなかったのである。

関わりの手応えは、こうした知覚経験を手がかりに、それがいかに経験として生成されてくるのかを探究する中で、それとして紡ぎ出されてくることとなった。

3 現象学的実証主義

既存の「科学的」と称された研究は、私たちが知覚しているものの背後に、定まったかたちや大きさ、法則が実在していると仮定し、関与している変数をコントロールすることによってそれを発見してきた。しかしながら私たちは、人が関与しない、コントロールされた客観的な事実と出会っているわけではない。私たちが出会うのは、生きた、関与によってそれとして現われる世界なのである。このように考えると、現象学的な眼差しは、事象の特徴に即しつつ事実には忠実であるということ、科学的な認識以前の知覚経験へと深く分け入ろうとすることから、科学的な研究よりも実証的に探究を進めているともいえる。メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の序文に「現象学的実証主義」という言葉を記している。鷺田は、この言葉に、「経験のただなかで、そこから経験の基層へ、現実の最深部へと測鉛を下ろそうとする決意」を読み取る。こうした決意によって推し進められる現象学的な研究は、まさに、科学的な研究よりも科学的たり得ると言えるであろう。

看護学校のエスノグラフィーから実践の時間論の構築へ

—現場から理論生成の試み—

香川 秀太

(筑波大学人間総合科学研究科)

■はじめに

本発表では、校内学習から臨地での周手術期看護実習へと移動する看護学生の学習の問題を扱い、そこで得られた知見を時間論に絡めてより抽象的に理論化させる。このような理論生成が志向されれば、少なくとも、質的研究に付きまとう、エピソード的な話題との批判は回避可能になる。また、より積極的な意味において、理論化は、研究上の重要な創造的実践と考えられる。ここでは、フィールド研究一般における理論化の問題について触れ、具体的には、発表者によって構築された「実践の時間」という理論的概念について述べていきたい。

■フィールド研究の方向性

フィールド研究で得られた知見を発展させる方向性は、次の二つに分類できるだろう。一つは、得られた知見をより現場に根付く具体的な形で精緻化させていく具体化の道筋であり、もう一つは、より高度な理論構築を目指す抽象化の道筋である（前者は、現場デザインの方向を想像すると理解しやすい）。さらには、一旦高度な抽象化を果たした後、それを現場理解・改編のリソースとして利用しつつ、精緻な具体化を目指す方向、あるいはその逆、それから、両者が複雑な螺旋的、相互発展的關係を描く方向も考えられる。いずれも重要な議題であることに変わりないが、今回は、特に、抽象化・理論化の方向性に焦点化して議論したい。勿論、このことは、後の具体化の方向にもつながりうるものとする。

■フィールドからの理論生成

現場でのイベントをより抽象的に洗練させた特殊な言葉としての理論は、特定の領域での知見を、多種の他領域へと横断可能にし、異領域間の関心を結びつけ、そして、新しい土壌を切り開く、創造的な生成物と考えられる。それらの意味で、理論の生成は、異領域間をコミュニケーションな関係に導く、境界を横断するオブジェクト化（Engeström, 1997）の試みともいえるだろう。

本研究で、看護学校という特定の領域から抽出された「実践の時間」という概念は、これらを可能にする理論と考えられる。これは、看護学校とは別の異なるフィールドを見る視点（西條, 2004）としてや、時間論という別の領域における議論を生起させるものとして機能する。勿論、どの文脈に横断するかで、この概念は種々の異なる意味内容を伴うものとして吟味されるだろう。したがって、理論は、転用可能な内に閉じた内容物であるというより、交通の過程で常に変形可能性を伴う柔軟なオブジェクトと考えるべきだろう（あるいは、道具としてより、それ自体が一つの特異な土壌になりえる）。つまり、理論が扱われるとき、そのコンテキストの考慮が必要になる。これらの意味で、理論の発展は、単線的に上昇していく垂直的な構図で描かれるより、多文脈間の横断の中で水平的に変化していくものとしても見なされうる。

■校内学習から臨地実習への横断的学習に関する分析

さて、本研究における時間概念は、看護学生に見られる以下の現象から抽出された。

看護学生たちは、校内学習から臨地実習へ移動したとき、それまでの校内実践への参加の仕方を持ち込み、自らの行為の理論的な意味について理解することができず、根拠立てながら看護行為を産出することに難しさを覚える（あるいは、根拠立て実践の重要性の認識を移動に伴って変化させる）。これは、移動に伴い経験される複数の困難のうちの一つである。

この困難は、校内から臨地へ移動する看護学生が、各状況において異なる時間性を体験していることとして分析される。それは、校内と臨地とで流れる時間が異なり、それが根拠立てに対する取り組み方の相違を導く、あるいは学生の行為の中で、そのような時間の流れの見えが構成されるという内容である。根拠立てという実践は、(プラクティカルな意味での)本来、容態が継続的に変化していく患者に対して、その未来の容態改善を志向して実施するような社会的営為である。容態の継続的な変化は、過去の更新と、未来の変化を意味し、患者の容態改善という目的は、他者の未来の変化した姿を意味する。学生は、臨地では、他者の未来のポジティブな変化を志向して、更新される過去と、変化する未来と、(現在実施する根拠立てという形で)現在に関わる。しかし、校内では、逆に、学生は、自分の行為と相即するわけでも、継続的に変化するわけでもない、アーティファクトとしてのペーパーペイシエント等の看護対象に向かって、自分の行為に対して与えられる合格点の獲得を志向する。相即的、継続的に変化しない看護対象は、過去の非更新と、変化の感じられない未来を意味し、自己の合格点の獲得という目的は、自己の未来の姿を意味する。ここでは学生は、未来の自己のために、非更新な過去と、変化の感じられない未来と、現在に関わる。したがって、校内では、臨地で見られるような、本来の時間関係が結ばれていない。

これらは、現在に埋め込まれた過去性と未来性という、現在における多重時間性が、両状況で異なっていることを示す。以上から、校内から臨地へ移動した学生は、各状況において異なる時間の流れを構成する社会的実践に参加し、そのような時間性の違いから、根拠立てに関する困難を経験したとすることができる。

■「実践の時間」と「異時間性」

以上は、病院や学校という共同体における時間の流れが、主体、他者、そしてアーティファクトが、局所的に関係しあう中で構成されることを示している。また、そのことが、主体の現在の思考や学習などの認知活動を、特定の形で組織化することに関連することを示している。つまり、臨地や校内という状況間では、異なる時間が流れており、それが主体の現在の認知活動を異なる形で組織化しているといえる。このような、他者やアーティファクトと局所的な関係を結ぶ中で生成される関係的、社会的な時間、もしくは、そのような局所的な時間と主体の認知・学習との間の関係のことを、「実践の時間」と呼ぶことにしたい。この視点は、特定の文脈、あるいは共同体ごとに異なる形で流れうる時間性に、主体が現在、いかに関わるかを問うことを含むものである。ただし、これは、同じ共同体に所属することが同じ時間の流れを経験することを意味するものではない。そうではなく、参加の仕方によって、それが異なりうることを主張する。例えば、患者が経験する時間の流れと、学生が経験する時間の流れは違う可能性がある。つまり、同じ共同体内でも、いかなる実践を振舞うかによって、異なる時間性が生起しうると考えるべきである。そういう意味で、周囲の環境は客観的な刺激特性ではない。このような、文脈ごと(より厳密に言えば実践ごと)に異なる時間性を、特に「異時間性」と呼ぶことにしたい。

ここで議論された、「実践の時間」は、個体主義を基盤とする時間評価、時間知覚、そして時間的展望など、これまでの代表的な時間論とは異なる概念であり、社会的関係性と、ローカリティ(局所性)の注目を必須とする。それは、過去から未来へかけて一定の間隔で物理的に流れる時間の存在を所与とするのではなく、各実践の中で過去・現在・未来が特殊な現れ方をすることを認め、その具体的な有様を記述することを目指すものである。ただし、そのような、物理的に時間が進行するという一つの思想が、その場の人々の行為を組織化しているとき、それを一つの重要な実践のリソースと見なし、それによりいかなるインタラクションが生起しているかを見る。つまり、分析者の文脈内で、実践者の視点から時間を記述することを目指す。

このような、実践への着目に常に立ち返って時間を議論していくやり方は、難解な哲学的議論の混乱を避けさせ、我々の社会における振舞いの中で組織化される多様な時間性を記述することを可能にするように思われる。

記念日と記念碑

企画・司会：矢守克也（京都大学防災研究所・京都大学大学院情報学研究科）

話題提供：寺田匡宏（国立歴史民俗博物館）

今井信雄（神戸大学大学院自然科学研究科）

渥美公秀（大阪大学大学院人間科学研究科）

本シンポジウムは、もちろん、「今日」が、「9・11」であることを一つの根拠として企画したものである。記念日と記念碑は時間と場所に照応し、ここで今、この会合に臨んでいるわれわれ研究者も、時間と場所の特定がもたらす独特の効果から自由ではないから、——ここはWTCではないが——今日、日本質的心理学会の、この記念すべき第1回大会の場で、記念日と記念碑について討議することも、それ自体、独特の時空間的意義を帯びることになる。

さて、時間と場所の特定は、一つの現場＝フィールドの特定、である。言い換えれば、時間と場所の特定は、特定の現場に〈わたし〉が臨場したことの「かけがえのなさ」と一体化している——かけがえのない幸運や幸せを噛みしめる場合も、ごく小さな確率がもたらした不幸や不条理を嘆く場合も。「かけがえのなさ」の渦中にある当事者〈わたし〉にとっては、均質に刻まれ不可逆に流れる時間、規則的に秩序づけられ一様に広がる空間は存在しない。「その時＝そこ」だけが、孤絶している。その日だけは特別、その場所だけは特別である。質的に、特別である。しかし、他方で、「かけがえのなさ」とは無縁の第三者は、カレンダーや時計が刻む時間と地図が示すような空間によって特徴づけられる日常生活を送っている。そして、当事者も、——「かけがえのなさ」の強度や種類によるが——一般的には、「その時＝そこ」への鋭敏性を次第に剥落させていく。その時から時が経過するとともに、そして、その場所から離れるとともに、日常的な時空間が回帰してくる。

記念日と記念碑とは、このような様な時空間に走った亀裂である。たしかに、まったく同じ「その時＝そこ」は戻ってこない。だからこそ「かけがえのなさ」である。しかし、同じ時は戻ってこなくても、同じ期日は帰ってくる。同じ空間は再生せずとも、同じ場所に降り立つことはできる。こうして、記念日や記念碑を通して、当事者はもちろん、第三者も、その時空間が当事者にとっても「かけがえのなさ」の一端に触れることになる。

ところで、第三者が、「かけがえのなさ」を感受できるのはなぜだろうか。少なくとも、われわれは、経験的に、このことが可能であることを知っているが、それは、いかなる根拠にもとづくのであろうか。「かけがえのなさ」は、特定の現場へ〈わたし〉が臨場したことの効果である以上、それを第三者が共有すること、つまり、まったく同じ現場に〈あなた〉が臨場することは、原理的に不可能に見える。大澤（2000）は、阪神大震災で夫を失った女性の語りや戦場の体験を語る男性（富山、1995）について分析しつつ、この謎を解く鍵が、体験がもつ「偶有性」にあると推論している。すなわち、戦場、災害現場などにおける極限的な体験は、特定の時空間を占めることができる身体は唯一無二であるという単純明快な事実をあらためてわれわれに教えてくれる。「なぜ、銃弾は数10センチ横にいた自分ではなく戦友の身体を貫いたか」、「なぜ、あの日、わたしだけがいつもより10分早く目覚めたのか」——生き残った者を苛むこうした問いは、それが極めて微小な時間と場所のズレに由来するものだけに、考えれば考えるほど納得のいく因果的説明が遠のいてしまう種類のなぜ、である。こうしたとき、当事者を苦しめているのは、『悲しい』とか『夫がかわいそう』だとかいったタイプの感情ではない。彼女は、言ってみれば、具体的な感情を抱く主体になる以前のところで、躓いているのである」（大澤、2000;p.185）。

しかし、ここに、個別的な「かけがえのなさ」が、逆説的に、公共へと開かれる可能性が潜んでいる。すなわち、それほど小さなズレであれば、「その時＝そこ」に臨場したのは、〈あなた〉ではなくこの〈わたし〉でもよかったのではないか。あるいは、逆に、「その時＝そこ」にいたのが、〈わたし〉

ではなく〈あなた〉であったということも、十分にありえたはずではないか。言いかえれば、それが〈わたし〉（あるいは、〈あなた〉）であったことは、現にそれが〈わたし〉（あるいは、〈あなた〉）であった以上、不可能ではないが、けっして必然ではない。つまり、体験は、「偶有性」を帯びているというわけである。

理論的にも実践的にも重要なことは、記念日と記念碑は、日常生活においては潜在化している、体験のこうした「偶有性」を賦活し表面化させる機能を有しているという点である。「そのとき、つまりまた1月17日がやってきたとき、われわれは、地震直前のあの立場に、もう一度、立たされることになるだろう。〈同一〉と見なしうる日付が回帰することによって、人は、地震直前の、他でもありえたはずだ（偶有性）と見なしうる立場を想起せざるをえず、そうした立場に投げ返される」（大澤, 2000; p. 191）。すなわち、個別的な〈わたし〉の体験の「かけがえのなさ」が極大化すると思われる場面——記念日において記念碑の前で——、かえって、それが互換可能でありえたこと（偶有的であったこと）が露呈する。それが起こったのは、〈わたし〉ではなく〈あなた〉であった可能性、あるいは、〈あなた〉ではなく〈わたし〉であった可能性が浮上するである。〈わたし〉と〈あなた〉との互換的な感応が、記念日や記念碑がもたらす公共性の基盤となっている。

もっとも、記念日や記念碑のとりあつかいは、しばしば困難を伴う。それは、体験の「かけがえのなさ」、あるいは、そこから醸成されるはずの公共性を、大文字の物語（歴史）で被覆してしまう作用である。しかし、この危険は、ある意味で、不可避である。なぜなら、述べてきたように、「かけがえのなさ」（個別性）を極限にまで突きつめた先には、かえって公共性（社会性）が浮上するからである。ただ、問題は、記念日や記念碑に付随する公共性が、こうした、「かげかえのなさ」という回路を経てもたらされているかどうか、である。陥穽は、頭から、公共的なものとしてわれわれの前に現れる記念日や記念碑に潜んでいる。

本シンポジウムには、それぞれ、歴史学、社会学、社会心理学を専門とする3人のスピーカーをお招きした。

寺田氏は、「震災・まちのアーカイブ」などで、市民の立場から阪神大震災の記録の作業に従事されてきたほか、2003年には、国立歴史民俗博物館において、「ドキュメント災害史 1703-2003」の展示に中核メンバーとして参加された。また、2002年からは、トヨタ財団の助成を得た共同研究グループ「記憶・歴史・表現」フォーラムの代表者としても活躍されている。

今井氏は、1995年以降、阪神・淡路の被災地に多数建てられた「震災モニュメント」について非常に精力的に調査されてきた。さらに、「野島断層記念館」、「神戸の壁」など、震災に関わる記念碑的施設に関するリサーチを加えて、近代社会における集合的記憶の編成、記念行為の機能一般をテーマに、多くの著作を世に問うておられる。

渥美氏は、1995年の震災後、日本災害救援ボランティアネットワークのメンバーとして、被災地の知恵を発信する活動、国内外の被災地に対する救援活動に従事されてきた。最近、展覧会『小さな絵描きたち～被災地バムの子供たちが見た風景』も開催されている。また、COEプログラム「21世紀の人文科学：臨床と対話」のメンバーとして、集合的記憶に関する研究にも従事されている。

3人とも、それぞれ異なった形ではあるが、記念日と記念碑の現場と密着して仕事を展開されてきた方ばかりである。現場に密着して、という表現すら不十分かもしれない。むしろ、それぞれの現場を形成してきた当事者として活躍されていると言った方が適切かも知れない。当日は、質的心理学にとって重要な隣接領域から、研究者として多くの提言を頂けるのはもちろん、記念日と記念碑に関わる実践家あるいはクリエイターとしての立場からの話題提供も頂戴できると考えている。

引用文献

- 大澤真幸 2000 責任論——自由な社会の倫理的根拠として 論座, 57, 158-199.
富山一郎 1995 戦場の記憶 日本経済評論社

9. 1 1

ーアメリカ同時多発テロはいかに記憶されているのか、記憶されようとしているのかー

寺田 匡宏

(国立歴史民俗博物館 外来研究員)

「新しいこの状況のもとで歴史博物館には何ができるのだろうか。国家は反テロで団結しているが、しかし無批判に愛国主義を唱道することを回避することができるだろうか。主戦論やそのプロパガンダに陥らない方法はあるのだろうか。歴史家として、教育者として、必要なパースペクティブとバランスを保つことができるだろうか。新しい何かを展示することはできるだろうか。収集したものを最低限のキャプションをつけて展示するだけにとどめるべきだろうか。歴史上のテロのアナロジーと、テロに類似した出来事を示すべきだろうか。この危機の状況において、歴史のパースペクティブを提供することはできるのだろうか。『9. 1 1』については語ることを禁欲し、むしろ異文化を尊重し寛容であることを語るべきなのだろうか。あえて戦争へのオルタナティブを示し、反アメリカを正当化すべきだろうか。」

これは、「9. 1 1」を展示することを求められたアメリカのスミソニアン博物館のスタッフの、ほぼ全部が疑問文でつづられた自問である。

「9. 1 1」に関しては、現在も、テロ調査委員会による調査がつづいており、その原因や背景についてはさまざまな解釈が存在する。カンヌ映画祭でパルムドールを受賞し話題になったマイケル・ムーア監督の「華氏 911」などは、ブッシュ一家とビンラディンの密接な関わりを追求しており、事件の背景には一筋縄ではいかない経緯がひそんでいることを示唆している。そもそも、アフガン攻撃、イラク戦争などが、「9. 1 1」をきっかけに起こったことを考えると、そのような予測もあながちゆえなしとしないものであるのは当然のことであろう。

本報告で考えたいのは、しかし、「9. 1 1」のそのような原因追及ではなく、「9. 1 1」が現代の「記憶」に与えた影響である。いうまでもなく、「9. 1 1」は、2機の航空機がツインタワーに突入し、超高層ビルが崩れ落ちるといった衝撃的な映像によって記憶されているが、それは、同時代の人々（われわれ）に心的外傷ともいえるべき重大な心理的影響を与え、出来事の直後から、大事件である、歴史的イベントであるという意識が人々の中に自然に醸成された。そして同時に、それを大事件であり、歴史的イベントであるとする意識自体が問われた。

近年、歴史学においては、他の人文社会科学同様、自らの学問分野そのものの認識論的な問い直しが行われている。なかでも、歴史とは何かという本質的な問題が提起されている。歴史と出来事はどう違うのか、出来事はいかに記憶されるのか、などの問題が、学としての歴史学が問い直されるに際して先鋭的に提起されてきているが、これは同時に、いま現在、歴史を語り叙述し描くとすればどのような方法が適切なのか、記憶を伝えるにはどのようにすればよいのかという実践的な問いとも直結してさまざまな波紋を広げている。「9. 1 1」もこのような問いとは無関係ではない。たしかに「9. 1 1」は、アメリカ国内の文脈で捉えられる出来事ではある。だが、しかし、それは同時代の出来事として、グローバル化した現代を生きている私たちとつながっている。

本報告では三つの事例の検討を通じて、それらの点にいかなる解答が与えられようとしているのか、あるいは与えようとするところみが続けられているのかにせまりたい。まず、第一はミュージアムにおける資料の収集と展示である。先ほど引用したように、アメリカのミュージアムは、発生直後から、「9. 1 1」

そのものをいかにあつかうのかという問いに直面した。アメリカ博物館協会では、緊急対応としてその機関誌 *MUSEUM News* が特集を組んでいるし、スミソニアン博物館は事件の直後から、関連する資料を収集しはじめていた。いったい何を集めればよいのか、どこからどこまでを事件の歴史的資料として位置づければよいのかという問題がその中では惹起されていたが、それは「9. 11」発生から1年目にあたる2002年9月11日から約1年間、スミソニアン博物館で開催された「9. 11—歴史の証人になるということ—」で、展示というかたちで表現された。この展示は、文字どおり歴史博物館が「9. 11」を歴史にいかに位置づけるのかに関して行った試みであるが、ノースタワーに突入した消防士のかぶっていた消防帽やタワーに勤務していた職員の制服といった直接的な物資料から、テレビの録画面面、ジャーナリストの報道写真にいたるあらゆるものが展示され、それらの資料について、その来歴を語ったエピソードや個々の資料に即した小さな物語が用意され、それを語ることが推奨された。いうまでもなく、スミソニアン博物館とは、ナショナルな歴史を体現した博物館であるが、しかしここでは、出来事を一挙にナショナルな記憶に結びつけることに対しては慎重に保留が重ねられた。これらの動きを検討することを通じて、まずは第一に、出来事を歴史として記述する上での問題について考えたい。

第二に、建築家たちによる都市の再建計画である。ツインタワーの崩壊という出来事は、建築家たちにも大きな衝撃を与えた。ニューヨークの建築家たちのアソシエーションである、ヴァン・アレン協会では、事件直後から都市の再生という文脈の中で、「9. 11」をとらえた。2002年2月から7月には「再生、再建、記憶」という展示会も開催されている。この展示ではニューヨークだけでなく、バイルート、ベルリン、神戸、マンチェスター、オクラホマシティ、サンフランシスコ、サラエボなどの都市の経験が取り上げられたが、いずれの都市も、戦争や災害によって大きな打撃を受けた都市であり、そこからの再生が問題となった。建築家たちは、建築の構築、都市の構築という責任を持つが、彼らはその職責が破壊されたと考えた。それに対する彼らの対応を見ることで、都市という場の中での記憶の問題について考えたい。

第三は、タワーの再建の問題である。WTCビル跡地再開発に際しては、国際コンペティションが行われたが、最終的に選ばれたのは、ポーランド生まれのユダヤ系の建築家ダニエル・リベスキントであった。リベスキントはいうまでもなく、ドイツ・ベルリンにおいてユダヤ博物館を設計したことで知られる建築家である。ユダヤ博物館は、その空間構成において、ジグザグの外観、傷のように引きつれた窓、水平でない床面、誰も到達できないヴォイド（空白）などが設けられ、そのことによって、ナチスによるユダヤ人絶滅計画という出来事の途方もなさ、あるいは表現の不可能性などが表現されており、建築だけでなくあらゆる人文社会科学に多大な衝撃を与えた作品である。そのリベスキントが、超高層タワー案によってコンペに勝利した。不可能性ではなく共同体への希望を語るというリベスキントの戦略であったといわれ、その転換はさまざまな議論を呼んでいるが、いずれにせよ彼がコンペに選ばれることで、タワーの崩壊と再建という出来事がホロコーストという出来事と平行して語られることになった。20世紀の記憶に関わる議論が、いかに「9. 11」に際して想起されたのかを考えたい。

はじめにも述べたように、「9. 11」はアメリカの都市が狙われた事件であり、基本的にはアメリカのナショナルな文脈で語られると想定される出来事ではある。だがしかし、それは、出来事の歴史化という動きにおいては、日本の文脈とも通底する問題を提起しているし、さらにいえば、このグローバル化する世界の中で、なぜ、「9. 11」にわれわれは反応してしまうのか、いかなる立場で「9. 11」を語りうるのかという問題も問われるであろう。今回の報告では、それらすべてにふれることはできないが、問題を考える一つのきっかけを提供したい。

なお、関連する拙稿として、「記憶の比較史—震災後／テロ後、加速する「歴史」の時間論」（『国立歴史民俗博物館研究報告』109、2004年3月）がある。

1月17日～社会学の立場から

今井 信雄

(神戸大学自然科学研究科 COE 研究員・愛知県立大学ほか非常勤講師)

私が震災の記憶研究をはじめたのは、阪神・淡路大震災を経験したわれわれが、どのように記憶し、忘却し、人生の一部とし、社会の一部としていくのかという問題関心からであった(今井 2001、2002a、2002b、2003 など)。震災をめぐる慰霊碑や祈念碑など 116 の「モニュメント」⁽¹⁾を対象とした調査では、誰に向けてつくったものなのか(生者か死者か/対面的か非対面的か)という視点から分析を行った。そこで明らかになったのは、まず設立集団(学校/地域組織/宗教組織/行政など)ごとに震災の記憶(の現れ方)が異なっているということである。

社会学の古典的な記憶研究としてM・アルバックス(Halbwachs, M.)の「集合的記憶」研究がある。この研究の中で、人はある集団に属する限りにおいてその「集団の記憶」を維持し、その集団から離脱すると「集団の記憶」を忘却する、というテーゼがある。そのテーゼに従えば、所属集団ごとに震災の記憶の現れ方が異なるのは、妥当なことであった。にもかかわらず、注目すべきは、集団ごとの記憶形態を超えて、3つの「しくみ」に沿って碑がつくられていたことである。それは、前近代から、近代初期以降から、近代後期以降から、現代へとつづく、生者が死者との関係をつくりあげるための社会的な「しくみ」である。

まず、身近な故人に向けたモニュメントでは、「やすらかに」とのみ記される場合はあったが、それ以外の「言葉」はほとんどみられなかった。私はこの形式を、身近な故人に向けてモニュメントをつくるひとつの「しくみ」と捉え、それぞれの「思い出」が結びつきを示すのであるから碑に「言葉」は不要なのだと考えた(関西学院大学の荻野昌弘はこれを「追憶の秩序」と呼んでいる)(図1)。

それに対し、身近な人の死に向けられない場合のモニュメントの特徴は、言葉が多く、しばしば「私たち」という言い方で震災に対する言葉が刻まれていた。ここにみられるのは震災を経験した「当事者」としての「私たち」であり、「自分」の根拠を「私たち」と示される枠(共同体)の内側におく行為である。つまり、「震災」は「共同体」の一員であることを事後的に示す。私はこのような震災の表し方を、非対面的な「特別な死者」を社会的共同体(たとえば「国家」)の象徴とする近代初期からみられる儀礼的行為の延長にあると考えた(図2)。

おなじ「私たち」という言葉づかいでも、さらに特徴的なのは、たとえば、ある学校でつくられた次のような言葉である。「1月17日の地震の日から ぼくたち わたしたちは いろいろなことを経験しました(中略)これからは ぼくたち わたしたちを支えてくださった人たちへの感謝の気持ちを忘れずに…(略)」というように、震災を経験した「過去」の「私たち」が、「現在」から「未来」へ続く「私たち」の根拠となっていることである。私はこれをひとつの「大きな物語」に根拠をおくことができず、たえずその根拠を絶えず探し続けなければならない近代後期としての「再帰的近代」(Giddens, A.)の現れ方であると考えた(図3)。

この3つのしくみはモニュメントの分析から導きだしたものではあるが、災害であれ大きな事件であれ、死者との関係性のなかで自己準拠を求めるしくみを考察するとき、妥当性を持つと考えている。

「再帰性」が、「記憶」や「特定の日時・場所」を考える上で重要なのは、今後ますます震災の記憶を形成する役割を果たすであろう「人と防災未来センター」にみられる構成原理をみてもわかる。ここでは「1・17シアター」(身体性)での感覚が「地震のしくみ」(自然科学的知)の根拠となっている。これはまさにS・ラッシュが認めるイメージや感覚の獲得による「審美的再帰性」にもとづく記憶と意味の与えられ方である(そして、1・17シアターで「再現」される国道の壊れる瞬間の様子は、実際には誰も見ていないだろう)。

それらの現状を踏まえ、話題提供者として①特定の日時、場所へのこだわりがもつ(実践的、理論的、方法論的)意義について、②定量的なデータのみならず、定性的なデータ(質的なデータ)をいかに

有効に生かしていくか、という2点について社会学の立場から簡単に触れておきたい。

まず①は、おそらく「現場」へのこだわり、フィールドへのこだわりと言いかえることができる。再帰的な関係性の中で根拠を問われるときに、現場での感覚は研究者に確かな根拠を与えてくれる。社会学では、現場（調査対象）と調査者との関係について1970年代に2人の社会学者の間で論争が交わされていた。それは、調査者が特権的に一方的に調査対象者を調べる時代は終わり「調査者と非調査者」が「一緒」になって「共同行為」を行っていくべきだと主張する似田貝香門と、そもそも異質な立場にある「調査者」と「非調査者」が「共同行為」などできるはずもなく、それぞれの異質性を認めた上で協力し合うべきと主張する中野卓とのあいだでの交わされた「論争」だとされている（松田素二「フィールド調査法の窮状を超えて」『社会学評論』212号、2003年、p503-505、など）。社会学にせよ心理学にせよ、「現場」と接点をもっている研究者は、現場内での「立ち位置」について悩みを持たないひとはおそらくいないであろう。

そしてそれは次の②の問題へとつながる。言いかえると、研究者は特定の日時・場所へのこだわりとしての「現場」にどのようなデータを見るのか、という問題である。東京大学の佐藤健二は「多数の分布／1ケースの凝視」「固定した問い／自由な問い」「フォーマル／インフォーマル」「数値的／言語的」などは、現場に何を見るのかという調査分析に関する戦術としての2項対立であるのだが、前者をすべて「量的」とし後者をすべて「質的」とするようなかたちで「一覧表の形式の両端」に位置してはならないとする（佐藤健二「『社会調査ハンドブック』の方法史的解説」『社会学評論』212号2003年、p517-518）。

質的心理学会が、学会名称にあえて「質的」の連辞符を冠する理由は、おそらく心理学における「量的研究」の隆盛に対するアンチテーゼである、と推察する（間違いかもしれないが）。ならばその「連辞符」は「心理学」の研究領域を広げる「戦略」としてあるべきもので、社会学がいまなお「質的／量的」の大文字化（二分法）から脱しきれない状況を見ると、その二の舞を踏まないように願いたいと思う（これは杞憂に過ぎないだろう）。私自身の考えとしては、研究者はやはり「現場」での「感覚」や「手触り」を大切にしなければならないと思う。その「感覚」や「手触り」を明らかにするのにどちらが妥当なのか／可能なのかという問いかけからはじめれば、質的データ／量的データの生かし方はそれほど難しい問題ではないかもしれない。

【注】

（1）当時被災地につくられていた震災のモニュメントのほとんどは、ボランティア団体「がんばろう!!神戸（現在はNPO法人HANDSとして活動）」と毎日新聞社の尽力により判明したものである。

【文献】（スペースの都合上、邦訳のみ）

Beck, U., Giddens, A., and Lash, S. (1997). 『再帰的近代化：近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文他訳、而立書房。

Giddens, A. (1993) 『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』松尾精文・小幡正敏訳、而立書房。）

Halbwachs, M. (1989) 『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社。

今井信雄、(2001)「死と近代と記念行為：阪神・淡路大震災の『モニュメント』にみるリアリティ」日本社会学会（編）『社会学評論』204号。

———、(2002a)「阪神大震災の『記憶』に関する社会学的考察：被災地につくられたモニュメントを事例として」、ソシオロジ編集委員会（編）『ソシオロジ』第145号。

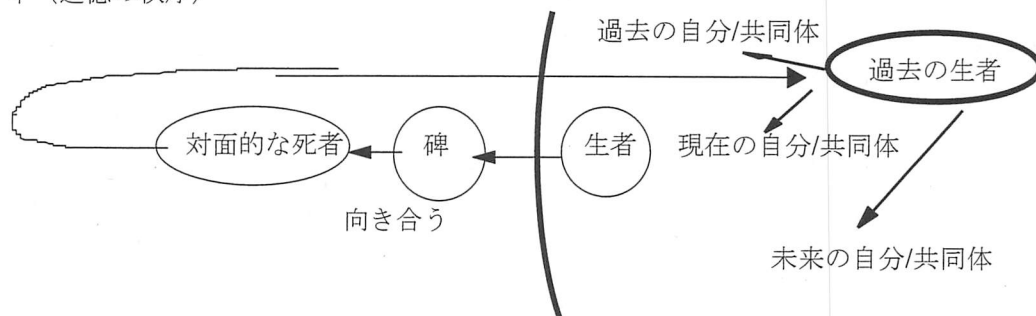
———、(2002b)「震災の記憶と被災跡：その『永遠』と『うつろいやすさ』について」、現代社会理論研究会（編）『現代社会理論研究』第12号。

———、(2003)「震災と自己：ミード自我論の視点から」、現代社会理論研究会（編）『現代社会理論研究』第13号。

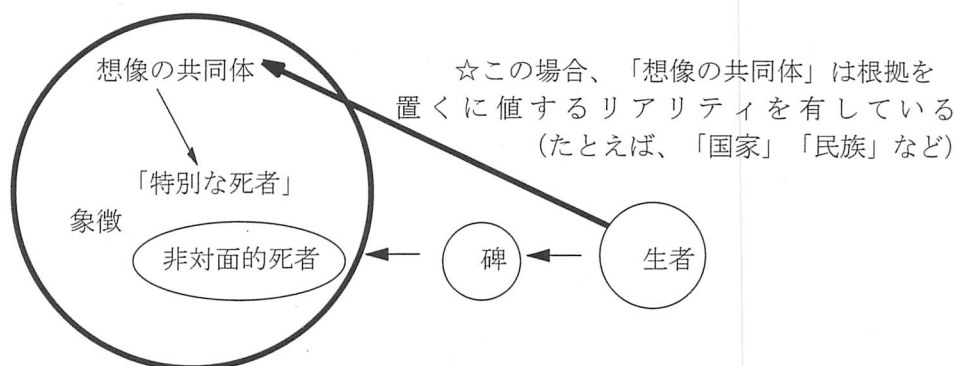
日本社会学会編、(2003)、『社会学評論 特集・社会調査：その困難を超えて』212号。

荻野昌弘、(1998)『資本主義と他者』関西学院大学出版会。

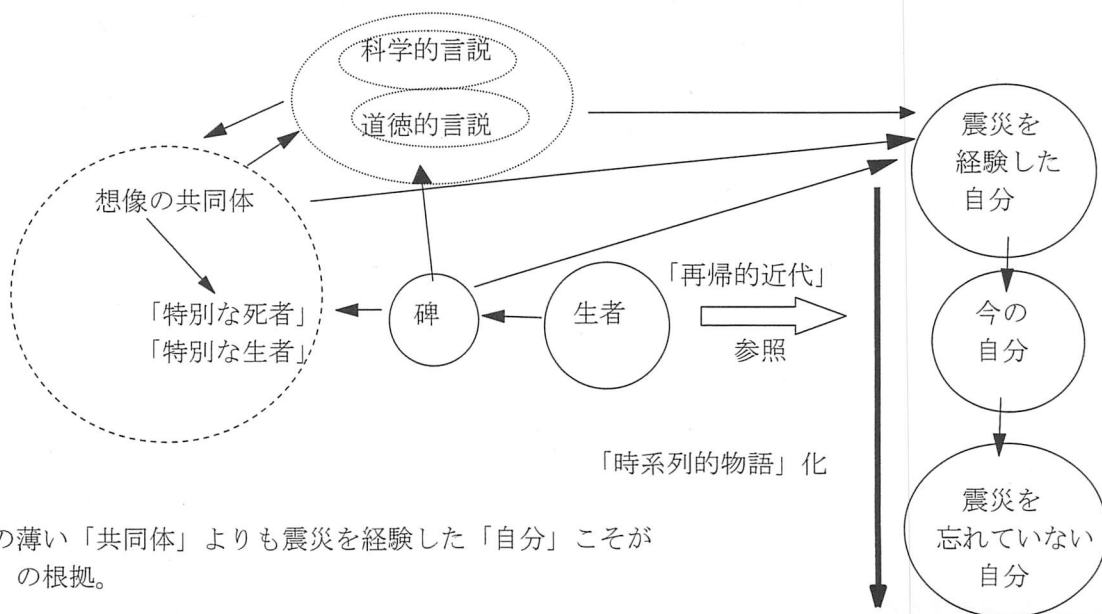
【図1】 前近代からつづく「しくみ」—— 過去/現在/未来/生者/死者の混在のなかから立ち上がるアイデンティティ（追憶の秩序）



【図2】 近代初期からつづく「しくみ」—— 「共同体」の強調から立ち上がるアイデンティティ



【図3】 近代後期（再帰的近代）における「しくみ」—— 根拠を省察しあう「しくみ」（ひとつの大きな「言説」は社会全体としては無効）



☆根拠の薄い「共同体」よりも震災を経験した「自分」こそが「自分」の根拠。

12. 26 イラン南東部地震

協働想起のツールとしての絵画展

渥美 公秀

(大阪大学大学院人間科学研究科)

2003年12月26日早朝、イラン南東部でマグニチュード6.5の大地震が発生した。震源地ケルマン州バム市では、建物の8割が倒壊し、人口の3分の1(約4万人)を失う大惨事となった。筆者は、研究者として、また、災害NPOの一員として、救援活動に参加し、その後も復興支援活動に関わっている。研究者としては、現場に深く入りこみ、理論的言説を試しながら、積極的に変化を起こしていくことがフィールドワークの醍醐味である。実は、質的だとか、量的だとか、社会心理学だとかそうでないとか、そういう分類は筆者の関心リストでは、最下位に近いところにある。「肝腎の所で逃げない」ことこそが大切だと感じている。そしてそれが難しい。

本稿では、イランといういわば“遠い国”での災害救援が、阪神・淡路大震災の被災地を訪れる人々に変化を起こしていく可能性を検討する。具体的には、2004年6月から2ヶ月間、「人と防災未来センター」(神戸市)で開催されている絵画展「小さな絵描きたち～被災地バムの子どもたちがみた風景」の取り組みを紹介する。原稿の執筆時点では、絵画展が進行中であり、来館者に関する観察や調査もまだ途上のため、なんら結果は示すことができない。当日は、できるだけ観察の概要を示すよう努めたい。なお、絵画展が、現場から一步離れたところに立って、当事者に思いを馳せる場となるという点では、シンポジウムのテーマである「記念日や記念碑」に関係した話題提供となっていることを願っている。

1 イラン南東部地震への救援活動

イラン南東部地震の被災地には、国連と連動して各国政府、NGOが救援活動に参加した。神戸からも2つのNGO(CODE 海外災害救助市民センター、NVNAD 日本災害救援ボランティアネットワーク)が大阪大学の我々の講座とも連携し、Message From Kobe (MFK) というチームを作って現地での救援活動を展開し、現在も地元NGOとともに復興活動を継続している。筆者自身、3回にわたり現地を訪れ、地元NGOの皆さんと中長期的な復興に向けて協力関係を築くことに努めてきた。救援活動を展開する中で、被災者・被災地に思いを馳せる人々との交流が始まった。一例を挙げると、猪名川町のある小学校では、2年生児童が被災者救援の募金を募るポスターを作成し、手作りの貯金箱で、募金活動を行った。次に、児童らは、イランの「おともだち」に向けて、絵を描いた。NVNADは、子ども達の絵を現地のNGOが開設している学校に届けた。今度は、バムの子ども達が描いた絵を借りることができた。そこで、兵庫県、神戸市、県国際交流協会、JICA 兵庫、人と防災未来センター、そして、NVNADとCODEで構成した実行委員会が絵画展の企画を立て、現在の展示に至っている。MFKの目的¹は、(1)阪神・淡路大震災から10年近くの経験をイランの人々に伝えること、および、(2)日本から“遠い国の”被災者・被災地に思いを馳せ、ひいては、日本の防災について考えていく機会を作ること、である。

2 被災者・被災地に思いを馳せる：記憶から協働想起へ

被災者や被災地に思いを馳せるというとき、人々の間に漂う記憶が始動する。通常、記憶(memory)は、脳や身体内部に貯蔵された情報の総体だと素朴に考えられている。従って、被災者・被災地に思いを馳せる時には、皮膚界面内の情報(例えば、阪神・淡路大震災の記憶)を、外界の媒体を通じて、相手の皮膚界面内に投影するという図式が思い浮かぶ。しかし、筆者は、対話を軸とした記憶研究の沃野を前にして、理論的にも、実感としても、この立場は採らない。そこで、記憶とは、想起(remembering)として織りなされる集合的な活動＝集合想起(collective remembering)であると考え。記憶をもとに思いを馳せることとは、想起の場に居合わせることによって、新たな集合性に包まれることである。具体的には、被災者・被災地と、あるいは、被災者・被災地を巡って、対話を進めることである。ここで、集合想起は行為概念であること、さらに、暗黙であれ、何らかの目標

¹ MFKの活動経緯、および、目的(1)に関する考察は別稿(Atsumi & Okano, in press)に譲り、今回は、目的(2)に限定する。

を伴っていることを強調しておきたい。従って、その行為のあり方を問い、何のために集合的に想起するのかということに注意を払いたい。さらには、何らかの目的のために集合的な想起を誘発する実践をも視野に入れておきたい。そこで、渥美(2003)では、協働想起(collaborative remembering)という語を導入した。被災者・被災地に思いを馳せるとは、犠牲者の追悼や我が身の防災といった目標に向かって、被災者や被災地を(と)協働で想起=対話し続ける行為のことである。

3 対話を促進するプログラムに向けて

協働想起は、対話²を通して行われる。通常、対話は、規則や話題を共有しているからこそ可能になると考えられている。ましてや、協働想起となれば、何らかの過去の事件に関する共通の記憶(memory)を個々人が(脳の中に)共有しているからこそ想起が可能になると考えてしまう。しかし、柄谷(1992)が「対話は、言語ゲームを共有しない者との間にのみある」と指摘するように、通じないところから対話が生成する。以下、柄谷のこの言明に依拠して論じている佐藤(1999)も参考にしながら述べる。対話が可能になる瞬間には、「命がけの飛躍」が行われ、対話が可能になることから規則や話題が一やりながらでっちあげるといって一生まれるのであって、その逆ではない。共通の記憶があるから協働想起できるのではなく、協働想起をするから記憶が生まれ、被災者・被災地への思いが馳せられるのである。他者との対話に可能性が開かれるのは、柄谷のいう「教える一学ぶ」関係として、両者が対峙したときである。柄谷は、「他者が“他者性”としてあるような『向かい合わせ』の関係を『対関係』とよび、相手が一人であろうと複数であろうと『隣り合わせ』の関係を『一般的関係』(p. 231)」とよんでいる。無論、原理的には、対話は、命がけの飛躍を経て究極の他者性を前に生じる。ただ、対話を微細に見れば、他者のいわば“綻び”につけこんで対話が成立していると言えないだろうか。実践的には、他者との間に(幻想ではあっても)無理矢理に架橋し、その橋を視野におさめつつも、結局は、目を閉じて跳躍を試みるときに対話が発生すると考えたい。例えば、他者からの問い(なるもの)が立ち上がり、(支離滅裂であっても)応答(なるもの)を行う場面から対話が生じると考えてみたい。佐藤(1999)が、柄谷の原理的な議論を踏まえて、隣り合わせの関係(例えば、遊び)を経た「向かい合わせ」の関係の中から対話が可能になってくことに着目しているのも参考になる。そこで、本稿でも、まず、向かい合わせの関係に対話を発生させる仕掛けを導入し、対話から隣り合わせの関係を導いていくことに注目する。

4 絵画展「小さな絵描きたち」

絵画展「小さな絵描きたち」³は、バムの子供たちの描いた絵を媒介として、バムの被災者と向き合い、対関係の中で命がけの飛躍を行って対話を成立させ、被災者・被災地について協働想起を行う場を作ろうとしている。まず来館中に協働想起としての対話が生まれるような仕掛けを導入することが先決である。今回の絵画展では、博物館・美術館をめぐる研究(例えば、三木, 2004; 上野, 2001)や実地調査をもとに、来館者へ文脈を形成し、問いかけを仕掛けとして導入して、被災者・被災地との対話の発生を検討している。協働想起としての対話が成立して被災者・被災地への思いを馳せることを習得(mastery: すらすらと実施するための方法を知ること; Wertsch, 2002)すれば、そこに短時間であれ、「一般的関係」が発生する。これは文字通り、イランの子供たちの描いた絵と隣り合わせにあることでもある。同時に、心理的には被災したイランの子供たちの傍にることになる。筆者が、災害ボランティアの原点として指摘しておいた事柄―「ただ傍にすること」(渥美, 2001)―の発生でもある。理想的には、ここからイランの被災者に向けた救援活動に参加するという動きも期待したい。続いて、今度は教える側として、誰かに向き合う関係に注目する。グループで来館して絵画展を見る場合、短期的には、特定の絵画を見た経験を、その絵画を見ていないメンバーに話す場面などが想定されるだろう。絵画展における自らの経験に、自分なりに具体例を追加したり、抽象化(例えば、防災力の向上)するなど専有(appropriation: 自分のものとする; Wertsch, 2002)が生じ、最終的には、地域の防災に役立つような行動が喚起されるならば理想的である。

² ここで言う対話は、広義の発話であって、いわゆる会話(音声言語を伴った目の前の他人とのやりとり)とは限らない。

³ なお、絵画展は、人と防災未来センターの一部で開催されているため、本来は、センターへの来館という文脈を踏まえて考察すべきであることは承知しているが、ここでは、絵画展だけを独立に取りだして話題提供としたことを断っておく。

先日、バムの子ども達から猪名川町の小学校へ返事の手紙が届いた。絵や手紙を通じて、思いを馳せ、重ねる。12月26日にイラン南東部で地震があったこと、人々がまだ苦しんでいることへと子ども達やその周辺の人々の関心が維持される。そして、このことを関心のなかった人々にも広げていく。ささやかではあるが、変化をもたらすフィールドワークの1事例としたい。

引用文献

- 渥美公秀 2001 ボランティアの知～実践としてのボランティア研究 大阪大学出版会
- 渥美公秀 2003 記憶の伝承に関するグループ・ダイナミックス 大阪大学 21 世紀 COE プログラム 146-160.
- Atsumi, T. & Okano, .K. in press Relief from Kobe and its Significance to the Bam Earthquake. *Bulletin of the Earthquake Research Institute*, University of Tokyo
- 柄谷行人 1992 探究 I 講談社学術文庫
- 三木美裕 2004 キュレーターからの手紙 アメリカ・ミュージアム事情 UM Books
- 佐藤公治 1999 対話の中の学びと成長 金子書房
- 上野行一 2001 まなざしの共有 アメリア・アレナスの観賞教育に学ぶ 淡交社
- Wertsch, J. V. 2002 *Voices of Collective Remembering* Cambridge University Press.

倫理実践としてのフィールド研究

企画：日本質的心理学会研究交流委員会

対談：樫田美雄（徳島大学総合科学部）

杉万俊夫（京都大学大学院人間・環境学研究科）

進行：抱井尚子（青山学院大学国際政治経済学部）

1 研究交流委員会の企画方針

企画趣旨に先立ち、「研究交流委員会」による企画の基本方針を述べておきたい。

人文・社会科学の領域では、1960-1970年代に、それまで主流であった仮説検証による量的研究法に対する限界の認識から、仮説生成を主たる目的とする帰納的な質的研究法への関心が高まっていった。この間に、GlaserとStraussによるグラウンデッド・セオリーや、Garfinkelによるエスノメソドロジーなど、様々な質的研究手法が紹介されている。科学的調査法としての質的研究アプローチが注目されるようになると、次第に「質」対「量」という方法論的議論が研究者の関心の的となり、質的・量的のそれぞれのキャンプに分断された研究者たちが、互いの手法の問題点を攻撃し合い、科学的研究手法という観点から互いのアプローチに優劣をつけるような論争を展開していった。しかしながら、このような議論も、少なくとも方法論的プラグマティストとも呼べる研究者の間では、研究目的や研究対象による「住み分け」の方向に落ち着きつつあるといえる。例えば、米国において広く使用されている研究法のテキストにEarl BabbieによるThe Practice of Social Researchがあるが、1998年に出版された第8版以来、質的・量的方法論の両方が取り上げられるようになった。Babbie自身も、第8版での改訂の特徴として、質的・量的研究手法の双方を相互補完的なものとして紹介している点を挙げている。同時に彼は、このテキストの読者に対し、質的・量的研究手法の両方を抵抗なく使いこなすことを奨励している。

長年にわたって展開されてきた「質」対「量」の方法論的論争が、とりあえずは収束に向いつつある中で、むしろ今後注目すべきことは、質的研究として同一カテゴリーに括られがちであった複数の手法が持つ存在論的・認識論的立場の多様性であろう。たとえば、近年Charmaz(2000)により社会構築主義的グラウンデッド・セオリーが紹介されているが、これに対し、实在論的立場を固持するGlaser(2002)は強い反発を示している。データ解釈の結果を、調査者と調査対象者の相互作用から構築された「物語」として捉えることで、グラウンデッド・セオリーにstory makingという概念を取り入れたCharmazの構築主義的スタンスは、もはや「グラウンデッド・セオリー」と呼ぶべきものではないというのがGlaserの主張である。このように、一見同一カテゴリーで括られるかのように見える質的研究手法も、決して単一のパラダイムに属しているわけではないということがわかる。研究者が現実を捉える枠組みは、研究目的、研究対象者との関係、データ収集・分析方法、報告書のまとめ方や使用する語彙、研究の評価、研究倫理など、研究実践のあらゆる側面に深くかかわってくる。したがって、質的研究を行う研究者は、自分がどのような認識論的立場に立って研究を行うのかを、明確に意識する必要があるだろう。

質的研究方法内にある存在論的・認識論的立場の多様性は、質的研究者間のパラダイムを越えたコミュニケーションを困難にしているという側面もある。しかしながら、今後の質的研究のさらなる発展のためには、異なる専門的トレーニング、研究パラダイム、研究フィールドを持つ、多分野で活躍する質的研究実践者が、活発に対話の場を広げていくことが有意義であると思われる。バックグラウンドの異なる質的研究者同士の交流は、研究

実践においてこれまで意識することがなかった自分自身の先入観やバイアスに気づく機会を提供し、同時に新たな視点の発見や視野の拡大に貢献してくれるものであると思われる。研究交流委員会によって計画される企画は、そのような多分野交流の意義を念頭においている。

2 本企画の趣旨

以上のように、方法論議に終始せず、多分野間での対話に基づき、学問として新たな概念や問題群を提出するという本委員会の役割を象徴する課題として、今回は「倫理的実践」に着目した。

フィールド研究において、研究者の「正義」をいかなる視点からいかなるかたちで問い、遂行するのか。これが、本企画を支える問いである。

フィールド研究は、目前の協力者と調査者の二者関係で単純に成り立っているのではない。フィールドをコアにして、フィールド研究の実質的な支持基盤である学界や、研究成果の直接的間接的な還元先としての「市民社会」など同心円的なネットワークの広がりの中で成立している。したがって、フィールドにおける倫理的実践とは、フィールドでどうふるまうべきか、とか、インフォームド・コンセントをどうとるかといった技術的方法だけではなく、市民社会に対して研究者は責任をどのように負い、果たすのか、という「配慮」の実践でもあるだろう。

例えば、フィールド研究の過程において、調査者は次のような問題に直面することが考えられる。状況に応じて調査者は何をケア(関心、注視、焦点化を含む)するのか、矛盾や葛藤がある中で何を優先させるのか、選択せざるを得ないことがある。さらに、その選択に「正しさ」の確信がもてなくても進まざるを得ない場合もある。調査者は、しばしばこのように即応的に解決をしなければならない問題に直面する。また、研究協力者の権利の保護を優先するのか、研究成果を公表することによって社会にもたらされる公共的利益を優先するのか、権利の充足をめぐる葛藤に対処するという課題を直視することもある。となると、「倫理」とは、守るべき規範や道はずさないための工夫・指針というより、研究営為に組み込まれた葛藤と問題解決の実践と考えられるだろうし、フィールド研究は倫理的実践としての側面をそもそも備えているとも考えられるだろう。

そこで、本企画では、倫理的実践としてフィールド研究の営為を捉え直すことの可能性と課題を取りあげる。今回、学問的背景を異にしながら「医療」という点では共通する現場に関わりのある2名に対談者としてご登壇願った。お一人は社会学者の榎田美雄氏であり、もうお一人は心理学者の杉万俊夫氏である。榎田氏は主に医療コミュニケーションの分野でエスノメソドロロジー・会話分析を手法とした質的研究に取り組み、Douglas Maynardの著書『医療現場の会話分析』の翻訳出版や、エスノメソドロロジー研究の具体的な活用方法についての論述(山崎敬一(編)『実践エスノメソドロロジー入門』所収)などで精力的に活動されている。榎田氏は研究パラダイムとして、人々の日常生活の中に研究の対象を見出し、ふつうの人々が日常において行うふつうの行為を達成するために使用する、さまざまな方法や手続きの分析に研究の目的を見出すアプローチをとる。かたや杉万氏は、グループ・ダイナミクスの立場から、人間科学としてのフィールド研究を志向し、当事者と研究者によるローカルな共同実践を生成し、実践記録と理論の抽象化によってインター・ローカルな共同実践への拡大を目指す(杉万俊夫(編)『フィールドワーク人間科学：よみがえるコミュニティ』参照)。

お二方にはフィールド研究の理念や志向性、ご経験に基づき率直な意見交換を賜ると共に、対談を通して質的研究における新たな問題群の提示と視野の拡大が参加者にもたらされることを期待する。<文責：抱井尚子(青山学院大学) 本山方子(奈良女子大学)>

市民社会に支えられたアカデミック・コミュニティへの忠誠としての倫理実践

梶田 美雄
(徳島大学総合科学部)

I. はじめに

フィールド研究の倫理は、現在2重に混乱している。この混乱した状況に説明を与えつつ、新しい倫理実践への構想をすすめることができたならば、この対談は成功した、といえるだろう。杉万先生の追求に対して一貫性を維持したまま話し続けることができるかどうかは不安ではある。しかし、なんとか以下の諸テーマに関して、インパクトある発言を重ねていきたいと願っている。

II. 倫理実践の機能主義的理解—ギルドと倫理—

機能主義的理解は、(社会科学理論としての評判は悪いものの)今でも「理解」というもののほとんどすべてである。もし、ある専門職ギルドに、ある特別な倫理の実践が要求されており、それが社会的に承認されながら運用されている、としたならば、それは、その倫理実践が、そのギルドの特権の維持存続に対して機能的であるからだろう。たとえ、その倫理的規範の適正な実践を「被調査者」や「調査員」が「望み」かつ、そのことから「利益」を得ていたとしても、それが倫理の問題であるのなら、主体は、「ギルド」の側であるはずだ。つまり、「倫理は、専門職ギルドが自らの特権を守るために、設定・運用しているものである」という機能主義的理解からスタートしたい、ということだ。この立場に立って考えるのなら、標準的には、専門職の倫理は、ギルドによって設定され、個別事例が逸脱しているかどうかの判別もギルド内の委員会等によってなされ、(追放等の)処罰もギルドによってなされることとなろう。研究者ギルドという古風な考え方をとりあえずは承認して以下の議論につきあって頂きたい(ギルドの問題だから、学会で倫理が真剣に扱われるのだと思う)。

III. 2つの混乱—業務と調査、ラポールと倫理—

フィールド研究には、現在2つの(倫理関連の)混乱が生じているように見える。それぞれについて、順番に説明していこう。

■混乱1……対人サービス専門職としての業務上の倫理と調査の倫理の混交に関わる混乱

心理専門職や社会学専門職が、現場で対人サービス業務をするときに必要とされる倫理というものがある。すなわち、対人サービスの相手としてのクライアントに対して、その秘密を守り、利益を計ることに最善を尽くす、という倫理である。

しかしこれとは別のものとして、調査の倫理がある(可能性がある)。臨床に専心しているひとには想像しにくい話かも知れないが、上記の「ギルドの特権確保が倫理実践の機能である」説にしたがえば、業務の倫理と調査の倫理が別様に存在することは理解に難くないはずだ。

たとえば、「政治家のインタビュー調査」をするとして、「政治家の利益を計ることに最善を尽くすこと」が社会学研究者の倫理である、と言うことは主張しにくいだろう。つまり、社会学調査の目的は対人サービス業務の目的とはしばしば異なっているのである。もちろん、調査の倫理が調査対象者の利益や人格の尊重を無視して構成可能だ、というつもりはない。後述の混乱2(ラポールと倫理)とも関係するが、調査の目的を告げること、調査結果を被調査者にできるかぎりフィードバックすることなどは、現在では、調査設計時にまず考慮しなければならない作業項目になってきている。とはいえこれらは、調査の必要条件ではない。ガーフィングルの違背実験のほとんどは「調査の意図」を偽ってのものだったし、治験の結果開発される新薬が、もとの治験者の生存中に間に合わないからといって、そのような治験は不当だ、ということにはならないであろう(医学研究の公益性を訴えたものとしては、[日本学術会議、2001]等を参照せよ)。社会調査には社会調査独自の公益性があるのである。

調査には、調査対象の利益増進とは別の公益的な目的がある場合があり、その組み合わせの様相によって倫理的配慮はおのずと違ったものになる、という点をここまで確認してきた。すると、われわれの課題は、調査場面に同一の倫理基準を適用することではなく、調査場面毎の特徴にみあった倫理規定を考える、ということに転換されることになるだろう。場合によっては、業務の倫理と調査の倫理の両方を、ともに実践しなければならないことも起きるだろう。しかし、それはすべての調査において起きる事態ではないのである。(参考:日本社会学会には倫理要綱はない。家族社会学会には、理念的規定があるが、個別の行為を拘束する具体的なものではない。アメリカ社会学会、アメリカ心理学会には倫理コードがある。けれども、アメリカ社会学会倫理規約で重要なのは、それが「調査を可能にする倫理コード」の側面をもっていることだ。たとえば、調査目的を偽るなどの「虚偽的な行為の使用」も、必要な場合には、委員会の審査をへた上で許容されるとされてい

る[早崎ほか 1999: 152]実際にどの程度この規定が活用されているのかは不明だが、規定としては良くできているように見えた)。

■混乱 2調査の困難性の増大に伴うラポール形成策と対象者に対する倫理の混交

人類学において先行的に問題となったことが、いまや社会学や心理学にも当てはまってくる。知の大衆化状況下では、調査するものとされるものの間には、かつて存在した圧倒的な知識量の差もないし、権威の差もない。いまや、一般的な調査紙法調査を郵送でおこなった場合の回収率は、40%あれば高い方だし、面接法調査の場合なら、オートロックス式マンションが、我々をそもそも「調査の諾否を問う」ことからすら疎外する。ドアの前にたどり着くことすらできないのだ。そういう調査大困難時代のもとで、なおも調査というものをなすために「調査対象者」に対してできる限りの配慮を示すことは、ラポール(関係)形成問題として大変に重要なことからである。

しかし、調査対象者とのラポールの形成は、調査の倫理とは別物だ。このことを考える際には、武藤香織氏(信州大学)が今年の保健医療社会学会のラウンドテーブルA「保健医療分野の調査研究水準アップのための格闘と工夫」で発言していた事例が有用だ(東洋大学、2004年5月16日)。すなわち、調査対象者同士の意志や利害が対立する場合に(武藤氏の場合は医師对患者あるいは医師対公益、といえようか)、そのどちら側の意向を重んずるかという問題は、調査の戦略の問題であって、調査の倫理の問題ではないだろう。むしろ、調査は公表されなければならない、という調査者倫理こそが重要なのではないだろうか(公表することが「倫理的要請」である、ということとは是非とも強調しておきたい。学生の調査実習の成果があまり公表されていないのはなぜなのか?。アカデミック・コミュニティあつての調査なのだから、コミュニティへの還元は必須要件だとおもう)。

IV. 私の調査経験から

実践者として呼ばれたのだから、私の調査のことを話さなければいけないだろう。しかし紙幅が尽きかけている。ここではポイントとなる項目を挙げるだけにとどめておきたい。

①1991「精神科デイケアの研究」.....調査をしていることの提示義務、という公開の原則に(今となつては)違反の可能性。ゴッマンの真似。介入のない、観察系の調査。侵襲性はない。匿名。観察されない権利? 私小説と同じと言えるか否か。学問のための学問。

②1995「119 通信司令室研究」.....目的外利用?、サックスの命の電話研究は今可能か? 公衆衛生と同様の公益がフィールド調査にあると言えるか?。匿名。

③1998「障害者スポーツ研究」.....対象者・仲介者(福祉系専門職、競技団体役職者)の一部からの厳しい批判(攻撃)。観察が行為に。

④2000「解剖実習研究」.....現場の秩序(教員は学生に敬語を使うな)と、(同意を非権威的に獲得する)の衝突。神話の暴露に公益性はあるか?

⑤2001「術前説明研究」.....白衣を着ることの是非。(医療関係者である、という)誤解の放置(未必の故意)は不正義か? 共同研究の単著発表問題も同形?

⑥2004「授産施設の撮影調査」.....施設長の権威による暗黙の強制?。水準選択で解決。

V. おわりに(ここも箇条書きで)

最後に以下の5点を主張したい。(1)「市民社会に支えられたアカデミック・コミュニティへの忠誠」が、「調査の倫理」の基盤であるべきではないか。(2)そのためには、「調査の倫理」に、「業務の倫理」が混じることや「ラポールの形成戦略」が混じることの問題点には敏感であるべきである。「対象者の利益」への過剰な配慮は、無償で調査に応じてくれる「市民」に対して失礼ではないか。(3)日本の現状は良くない。いろんなものの混同が進む中で、倫理審査委員会が存在しない弊害も存在する(社会学会というギルドの利益が結局蝕まれている)。(4)トラブル防止が最優先にされる結果、もめた経験が十分に教訓化されていない。たとえば、調査実習のサポート体制の脆弱さが放置されている(C大調査実習事件については正確な知識を持たないが、私は学生が自己防衛してウソをつくことはしばしばあたりまえに起きることだと思う)。(5)これらの社会学界での教訓は、質的心理学にも参考になるのではないだろうか。(kashida@ias.tokushima-u.ac.jp)

【文献表】

※詳しい檉田の著作目録等は <http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/> から入手できる。ガーフィンケルほか著、好井裕明・山田富秋・山崎敬一訳 1989『エスノメソドロジー』せりか書房。

早崎一修・高橋孝枝・阿波三奈加・市原初美・根矢三千代・岡田叔子 1999「コメンタールアメリカ社会学会倫理規約 1997」、檉田美雄編『エスノメソドロジーと福祉・医療・性—平成10年度徳島大学総合科学部檉田ゼミナールゼミ論集』(徳島大学中央図書館ほか蔵) <http://www.asanet.org/members/ecointro.html#intro> (アメリカ社会学会倫理規約)

檉田美雄 1991「施設内文化の研究」『母子研究』11号: 12-27頁。

水嶋春朔 2002「個人情報保護法と医学・医療研究」『からだの科学増刊(21世紀の大学病院)』157-161。

文部科学省・厚生労働省 2002『疫学研究に関する倫理指針』(平成14年6月17日)

日本学術会議 2001『医学研究からみた個人情報の保護に関する法制の在り方について』

倫理はあとからついてくる

杉万 俊夫

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

危険なタイトルと知りつつ、あえて、このようなタイトルをつけた。既存の倫理を尊重しつつ、かつ、問い直しつつフィールドに臨まねばならないのは当然だ。しかし、新しい倫理の創出についても語るためには、「倫理はあとからついてくる」ことを認めないわけにはいかない。

フィールドの当事者との共同実践を旨とするフィールドワークにとって、価値中立性も、倫理中立性もありえない。何らかの価値に、何らかの倫理に加担しない共同実践などありえない。

かつて倫理的に許されないと白眼視された行為が、倫理的に正しい行為となる場合がある。かつて価値判断の対象にもならなかった意味不明の行為が、価値ある行為となる場合がある。そのような倫理創造、価値創造は、共同実践の醍醐味でもある。新しい倫理や価値ができてしまえば、初期の強引なねじ込みは「熱意」という言葉で、頑強な抵抗と不承不承の受け入れは「理解」という言葉で語られる ---- 一部の人の熱意が、多くの人々の理解を得て、新しい倫理が確立された、と美しく語られる。しかし、このようなことが言えるのは、共同実践が一段落してからだ。では、共同実践の渦中ではどうか。

今、私は、10年以上その地の活性化運動に関わってきた過疎地域（鳥取県智頭町）において、町の存亡（合併か単独か）をかけたうねりの中に身を置いている。それは、まさに筋書きのないドラマそのもの。しかも、まだ、誰の目にもエンディングが見えてこない(2004年7月、本稿執筆時現在)。以下に、その経緯の概略を、私自身の関わりを交えながら紹介し、本セッションの材料としたい。

1 平成の大合併（合併特例法）

1995年、政府は、2005年3月を期限に、現在の約3,200市町村を1,000に再編成する政策を決定した。その根拠は、地方分権の受け皿づくりのための行財政基盤の強化と、広域化する生活経済圏などへの対応。合併後10年間は、合併しなかった場合の地方交付税を保障する、新自治体の公共施設整備などに合併特例債（経費の95%）を認め、元利償還の70%に交付税を充当するなどの財政支援がアメとして用意されるとともに、人口3万人未満の小規模市町村への交付金は減額するというムチも用意された。そのプロセスについても、極力、合併に誘導するよう定められている。すなわち、合併協議会（合併しようとする市町村が合併後の行政体制を協議する組織）については、協議会設置が議会で否決されても、有権者の6分の1の署名による請求があれば住民投票が実施され、過半数の支持があれば協議会を設置すべきことが定められている。

2 智頭町がたどった道

智頭町は、20万都市をめざす鳥取市の周辺9町村吸収合併をめぐって、ここ1年半、合併特例法に盛り込まれたパスのフルコースを体験した（図1）。そして、今や、合併特例法に想定されていなかったフェーズに突入した（図2）。

私は、八頭市構想崩壊の一報が町役場を駆けめぐった日、町長に、単独路線を訴えるメールを送った。そして、協議会参加（設置）を決める住民投票に向かって、合併・単独両陣営が選挙運動を繰り広げる中、単独路線を支持する文章を書いた---それは、両陣営が、

倫理はあとからついてくる

杉万 俊夫

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

危険なタイトルと知りつつ、あえて、このようなタイトルをつけた。既存の倫理を尊重しつつ、かつ、問い直しつつフィールドに臨まねばならないのは当然だ。しかし、新しい倫理の創出についても語るためには、「倫理はあとからついてくる」ことを認めないわけにはいかない。

フィールドの当事者との共同実践を旨とするフィールドワークにとって、価値中立性も、倫理中立性もありえない。何らかの価値に、何らかの倫理に加担しない共同実践などありえない。

かつて倫理的に許されないと白眼視された行為が、倫理的に正しい行為となる場合がある。かつて価値判断の対象にもならなかった意味不明の行為が、価値ある行為となる場合がある。そのような倫理創造、価値創造は、共同実践の醍醐味でもある。新しい倫理や価値ができてしまえば、初期の強引なねじ込みは「熱意」という言葉で、頑強な抵抗と不承不承の受け入れは「理解」という言葉で語られる。---- 一部の人の熱意が、多くの人々の理解を得て、新しい倫理が確立された、と美しく語られる。しかし、このようなことが言えるのは、共同実践が一段落してからだ。では、共同実践の渦中ではどうか。

今、私は、10年以上その地の活性化運動に関わってきた過疎地域（鳥取県智頭町）において、町の存亡（合併か単独か）をかけたうねりの中に身を置いている。それは、まさに筋書きのないドラマそのもの。しかも、まだ、誰の目にもエンディングが見えてこない(2004年7月、本稿執筆時現在)。以下に、その経緯の概略を、私自身の関わりを交えながら紹介し、本セッションの材料としたい。

1 平成の大合併（合併特例法）

1995年、政府は、2005年3月を期限に、現在の約3,200市町村を1,000に再編成する政策を決定した。その根拠は、地方分権の受け皿づくりのための行財政基盤の強化と、広域化する生活経済圏などへの対応。合併後10年間は、合併しなかった場合の地方交付税を保障する、新自治体の公共施設整備などに合併特例債（経費の95%）を認め、元利償還の70%に交付税を充当するなどの財政支援がアメとして用意されるとともに、人口3万人未満の小規模市町村への交付金は減額するというムチも用意された。そのプロセスについても、極力、合併に誘導するよう定められている。すなわち、合併協議会（合併しようとする市町村が合併後の行政体制を協議する組織）については、協議会設置が議会で否決されても、有権者の6分の1の署名による請求があれば住民投票が実施され、過半数の支持があれば協議会を設置すべきことが定められている。

2 智頭町がたどった道

智頭町は、20万都市をめざす鳥取市の周辺9町村吸収合併をめぐって、ここ1年半、合併特例法に盛り込まれたパスのフルコースを体験した（図1）。そして、今や、合併特例法に想定されていなかったフェーズに突入した（図2）。

私は、八頭市構想崩壊の一報が町役場を駆けめぐった日、町長に、単独路線を訴えるメールを送った。そして、協議会参加（設置）を決める住民投票に向かって、合併・単独両陣営が選挙運動を繰り広げる中、単独路線を支持する文章を書いた---それは、両陣営が、

倫理はあとからついてくる

杉万 俊夫

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

危険なタイトルと知りつつ、あえて、このようなタイトルをつけた。既存の倫理を尊重しつつ、かつ、問い直しつつフィールドに臨まねばならないのは当然だ。しかし、新しい倫理の創出についても語るためには、「倫理はあとからついてくる」ことを認めないわけにはいかない。

フィールドの当事者との共同実践を旨とするフィールドワークにとって、価値中立性も、倫理中立性もありえない。何らかの価値に、何らかの倫理に加担しない共同実践などありえない。

かつて倫理的に許されないと白眼視された行為が、倫理的に正しい行為となる場合がある。かつて価値判断の対象にもならなかった意味不明の行為が、価値ある行為となる場合がある。そのような倫理創造、価値創造は、共同実践の醍醐味でもある。新しい倫理や価値ができてしまえば、初期の強引なねじ込みは「熱意」という言葉で、頑強な抵抗と不承不承の受け入れは「理解」という言葉で語られる。---- 一部の人の熱意が、多くの人々の理解を得て、新しい倫理が確立された、と美しく語られる。しかし、このようなことが言えるのは、共同実践が一段落してからだ。では、共同実践の渦中ではどうか。

今、私は、10年以上その地の活性化運動に関わってきた過疎地域（鳥取県智頭町）において、町の存亡（合併か単独か）をかけたうねりの中に身を置いている。それは、まさに筋書きのないドラマそのもの。しかも、まだ、誰の目にもエンディングが見えてこない（2004年7月、本稿執筆時現在）。以下に、その経緯の概略を、私自身の関わりを交えながら紹介し、本セッションの材料としたい。

1 平成の大合併（合併特例法）

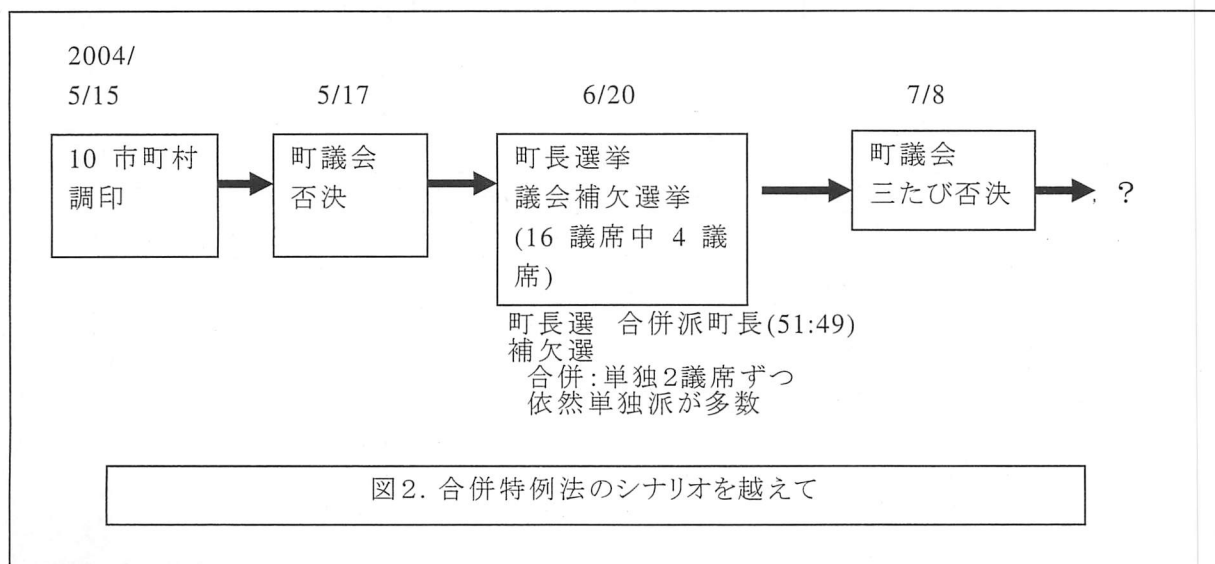
1995年、政府は、2005年3月を期限に、現在の約3,200市町村を1,000に再編成する政策を決定した。その根拠は、地方分権の受け皿づくりのための行財政基盤の強化と、広域化する生活経済圏などへの対応。合併後10年間は、合併しなかった場合の地方交付税を保障する、新自治体の公共施設整備などに合併特例債（経費の95%）を認め、元利償還の70%に交付税を充当するなどの財政支援がアメとして用意されるとともに、人口3万人未満の小規模市町村への交付金は減額するというムチも用意された。そのプロセスについても、極力、合併に誘導するよう定められている。すなわち、合併協議会（合併しようとする市町村が合併後の行政体制を協議する組織）については、協議会設置が議会で否決されても、有権者の6分の1の署名による請求があれば住民投票が実施され、過半数の支持があれば協議会を設置すべきことが定められている。

2 智頭町がたどった道

智頭町は、20万都市をめざす鳥取市の周辺9町村吸収合併をめぐって、ここ1年半、合併特例法に盛り込まれたパスのフルコースを体験した（図1）。そして、今や、合併特例法に想定されていなかったフェーズに突入した（図2）。

私は、八頭市構想崩壊の一報が町役場を駆けめぐった日、町長に、単独路線を訴えるメールを送った。そして、協議会参加（設置）を決める住民投票に向かって、合併・単独両陣営が選挙運動を繰り広げる中、単独路線を支持する文章を書いた---それは、両陣営が、

もちろん、単独路線を支持する私なりの根拠はある----しかし、その根拠に深入りすることは、この対談の趣旨ではないだろう。いかなる論理に基づくいかなる根拠が「倫理」としての地位を獲得するのか。新しい倫理に、産みの苦しみは避けられない。



若手研究者が語る質的研究の生成プロセス

企画：田垣正晋（大阪府立大学社会福祉学部）・山崎浩司（京都大学医学研究科）

司会：田垣正晋（大阪府立大学社会福祉学部）

話題提供：田垣正晋（大阪府立大学社会福祉学部）・山崎浩司（京都大学医学研究科）

指定討論：無籐隆（白梅学園短期大学）

1 はじめに

質的研究をしていると、データを収集し分析をし終えたものの、どのような提示するかに苦勞する。ここでいう「提示」には2つの意味がある。1つ目は、修士論文といった学位論文から紀要や学会誌を書く場合、データをどのように切り取り、1つの論文にしていけるのかである。2つ目は、各々の論文において、膨大な言語データをリアリティを維持しながら、どのようにまとめていくかである。学位論文ならば恐らく字数制限が緩やかで、自分のスタンスや執筆のスタイルもかなり尊重されるので、この点の苦勞は少ないだろう。だが、紀要や学会誌の場合、字数制限が厳しく、査読者が求めるスタイルに多かれ少なかれ準じなければならないため、豊かな質的データを十分に活かすきれないことがある。また、共同研究の場合、誰が第一著者になるとか、どこを分担するのかといった問題や、場合によっては専門分野や認識論的立場の違いの問題も絡んでくるので、その苦勞は一層大きくなる。

以上のような問題意識から、本研究では、福祉と保健医療分野で活動している2人の若手研究者が、データ収集から投稿論文掲載までに至る、自らの論文執筆のプロセスをメタ化する。特に、投稿原稿作成に際して、論文の中でのデータの表現、また査読コメントに対する応答や共同研究者との対話などに焦点を当てる。特に福祉や保健医療の分野で質的研究を始めようとしている、あるいはすでにデータ収集を終えたような大学院生等の初学者が、今後の研究の道筋をたてる参考になることを願っている。

語りから論文への生成プロセス

田垣正晋（大阪府立大学社会福祉学部）

1 研究概要

報告者は、修士論文のとき以来、中途肢体障害者へのインタビューによるライフストーリー研究を行ってきた。17人の脊髄損傷者を対象にしている。その後、修士論文全体を扱った論文、関係する理論論文を表のように書いてきた。「スタンダード」な手順として、データ全体を使った論文の後に特定事例をあつかった研究をし、並行しながら理論論文を書くという流れがあり、表もそれに従って作成した。だが、実際には、刊行年からわかるように、特定事例や理論論文の方が先になり、最初に刊行されるはずのデータ全体をあつかった論文（田垣、2004a）は、再投稿を繰り返したので刊行がかなり遅れた。

論文	タイトル	掲載誌	概要等
田 垣 (1999)	生涯軸から見る「障害」経験：身体障害者のライフストーリーより	修士論文	17人全員
田 垣 (2004a)	中途重度肢体障害者は障害をどのように意味づけるか：脊髄損傷者のライフストーリーより	社会心理学研究 19(3)	修論のダイジェスト。ただし、10人全体を提示したうえで3人の代表事例を詳細に検討
田 垣 (2001)	ソーシャルワークにおける中途障害者のストーリー構成の意義—脊髄損傷者の事例から—	ソーシャルワーク研究 106	上記代表事例の1人を社会福祉学の観点から分析
田 垣	中途障害者が語る障害の意味—「元	京大紀要 46	上記10人の中から2人を特集。

保健医療分野における質的研究の生成プロセス

山崎 浩司

(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野)

1 これまでの研究

報告者は、これまでに以下のような社会医学関連の質的研究を実施してきた。

- ① 首都圏のエイズ関連民間団体におけるエスノグラフィー研究
- ② 西日本 C 県男子高校生のセクシュアリティに関するフォーカス・グループ・インタビュー研究
- ③ 西日本 A 県 B 女子高等学校におけるエイズ予防教育に対する感想文の内容分析研究
- ④ 西日本 A 県男女高校生のセクシュアリティに関するフォーカス・グループ・インタビュー研究

①は研究助成団体の報告論集に、②と③は厚生労働科研の報告書に掲載され、査読のプロセスを経ていない。また、②と③は共同研究の体裁をとっているが、基本的に報告者が単独で分析・執筆を行った。

そこで本報告では、日本エイズ学会誌に投稿中である実際的な共同研究、「地方 A 県女子高校生のコンドーム不使用に関する相互作用プロセスに関する研究」に照準し、保健医療分野における質的研究の生成プロセスの一例を報告する。

2 研究の背景

フォーカス・グループ・インタビュー（以下、フォーカス・グループ）を使った本研究は、西日本 A 県における高校生を対象にした、大規模なエイズ予防介入プロジェクトの一環として実施された。このプロジェクトは、介入の前後に質問紙調査を行い、その結果得られる点数差から介入の効果を評価する準実験的研究デザインで、フォーカス・グループは、この質問紙の質問項目の改善のヒント、実施した予防教育の改善に資する情報、そして対象者のセクシュアリティにまつわる情報を得るという、複数の目的をもって実施された。

データ収集は男女別に実施され、本報告でとりあげる女子高校生 8 グループ 41 名は、共同研究者でプロジェクトの責任者である女性研究者が行ない、データ分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを使って、報告者が実施した。

3 共同研究にまつわる問題と利点

データ収集者と分析者が異なる点からして、最終論文のオーサiershipの問題が発生する。この問題を研究の手続きを通して解消したのは、データ分析の過程で頻繁かつ綿密に行った、共同研究者間のミーティングである。毎週 1 回、オープン・コーディング、軸足／選択的コー

ディング、結果図生成、ストーリーライン生成、考察、そして最終的な論文全体の執筆のあらゆる段階で議論を重ねた。このプロセスは、結果的に分析者トライアングレーションとなり、データ解釈（＝分析）の飽和を促進し、質的研究に必要とされる厳密性の向上につながった。

4 オリジナリティをとどめつつ、分野や雑誌別の要求に順ずる

グラウンデッド・セオリー系の研究では、概念とカテゴリーの名称や、それらの関係性の提示においてオリジナリティが問われる。そして、このオリジナリティを表現するスタイルは、どのような学問分野の訓練を受けてきたか、つまり基盤としてもっている認識論的立場に大きく左右される。報告者は社会人類学者であるが、共同研究者2名はともに疫学者（うち1名は医師）であり、報告者と共同研究者との間の学問分野や認識論的立場の違いが、概念名、カテゴリー名、結果図、ストーリーラインなどに著しい影響を与えた。

人類学的研究のように、複雑な現実の現象特性を複雑なまま捉えようとするのか。それとも、伝統的な医学研究のように、複雑さをかなり捨象してもできる限り簡略化して捉えようとするのか。動きのある現実の現象特性を表現するために、研究参加者の語りをそのまま概念名にしたり（in-vivo 概念）比喻を使ったりするのか。それとも、簡潔かつ説明的な概念名で統一するのか。一般的には、主たる分析者が最終的な分析結果の責任を負うので、最終決定権は主たる分析者にある。ただ、実際には共同研究者間の話し合いや力関係などにより、上記の両極の間を揺れ動くことになる。

しかし、最終的な形態は、およそ投稿先の学術雑誌の分野とスタイルによって規定される。報告者の場合、社会医学系（但し質的研究はほとんどない）も掲載される医学系雑誌ではあったが、現実事象の複雑さを犠牲にし、概念名を基本的に直接的で短いものに統一し、結果図を簡略化した。これは、質的研究がいまだ十分に受け入れられていない分野におけるデータプレゼンテーションの、戦略的な側面である。（報告当日は、具体的な事例をとりあげ、データ分析とプレゼンテーションの変更の様子を説明する）

5 まとめ

保健医療分野における質的研究では、共同研究者自身も論文の投稿先の学術雑誌も、量的研究の認識論とスタイルを要請してくる可能性がある。それらの制約の中で、いかに自分なりのオリジナリティを失わずに済むのか。このジレンマを乗り切るうえで、本報告が微力ながらも参考になればと願う。（なお、当日の報告では、査読者とのやりとりによるデータプレゼンテーションの更なる工夫についても、できれば報告したいと考えている。）

工学と質的心理学の弁証法

——質的研究にかかる期待と不安、そして展望——

企画：塩瀬隆之（京都大学大学院情報学研究科・ATRネットワーク情報学研究所）

話題提供：塩瀬隆之（京都大学大学院情報学研究科・ATRネットワーク情報学研究所）

指定討論：佐伯胖（青山学院大学文学部）・大谷尚（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

企画要旨

ヒューマンインタフェースシステムのように人間を系に含む工学研究では、効率性・経済性といった従来のモノサシではとらえきれないジレンマを抱えている。そこで「質的研究」へと期待するものの、その方法論について未だ工学研究者にとって晴れない疑問も残る。本企画では、工学研究と質的研究との対話から、属人的な研究対象の本質にいかに向かっているのかについてパネル討論し、質的研究にかかる期待と不安、そしてさらなる発展に向けて何が必要か、その項目を整理する。

1 数量化できない人間への関心

昨年度末で全国の公立学校におけるインターネットの接続率はほぼ100%、コンピュータを操作できる公立学校の教員数も全体（約90万人）の87.6%にのぼる。この量的評価が教育におけるIT事情の全貌を映しているなどとは誰も思わない。しかし、いつしかこの見かけの数値目標が一人歩きを始め、対象の本質からわたしたちの目をそらせてしまう。どのようなデータを学問的な証拠として認めるかは、当該分野の研究共同体の約束事であるが、心理学や社会学の共同体においてさえ、数量化したデータのみが客観性を担保すると長い間信じられてきた。文化人類学や看護学、社会科学など、人間や人間関係と真正面から向き合うことを要求される分野において、数量化や統計的な処理では明らかにすることが極めて困難な個人の生活、行動、組織の機能、相互行為といったデータに内在する質を抽出する質的研究が注目を集めたことはきわめて自然な流れである[Flick02]。

2 質的研究への期待

複雑大規模なコンピュータシステムは、もはやヒューマンインタフェースを媒介せずには操作不可能であるが、そのシステムの有効性は主にタスク達成のパフォーマンス評価が主体であり、システム全体のユーザビリティや心象、使用経験がもたらす学習効果などを可視化する評価手法が切望されている。効率性や経済性の追求を合理とする工学研究においては、系に含まれる人間の活動評価の真正性よりもむしろ、標準化と数量化を基本とする実証主義的で統計的なハードアプローチに依拠してしまう傾向からアンケート結果の統計処理に終始する嫌いがある。これに対する反省から、エスノメソドロジーをはじめとする質的研究がヒューマンインタフェース分野をはじめとする工学研究の中でも注目を集め始めている。

質的研究の立場からすれば、標準化されたインタビューや質問紙のように、予め決められた質問・回答を与え、どんな順番でどのように回答するかまで限定するやり方はインタビューの視点に立つことを妨げてしまうことが指摘されている。その反省から、より回答の自由度が高いオープンなインタビューが求められ、焦点化インタビューやエスノグラフィック・インタビューに代表される半構造化インタビューと呼ばれるものから、ほぼ完全にインタビューに自由な回答を要請するナラティブ・インタビューまで多様に挙げられる。これらの一部は、実際に学習環境のデザイン実験の評価手法などに用いられはじめている[Kupperman02]。

しかしナラティブ・インタビューには、日常的にライフヒストリーに関して説明慣れしている西洋文化に根付いたデータ収集法であり、他言を尊ばず、わびさびに価値を置く日本的な文化では不向きだと指摘する声もある。また半構造化インタビューも含め、ナラティブやインフォーマントの回答の中で作られる構造や形態（ゲシュタルト）をどのように抽出するか、また語られたナラティブや発話の中のどこに社会的な文脈に影響を受けた構造が生成しつつあるのか、そのゲシュタルトを見抜けなくてはならないがその基準がいまだ明確に示されていない。

3 質的研究にかかる期待と疑問

質的研究には方法論上の疑問として晴れない側面がある。たとえば、質的研究におけるデータ収集では大量のテキストが得られる。このすべてを分析対象とするわけにはいかないため、たとえばグラウンデッドセオリーでは理論的サンプリングと呼ばれる手法が用いられている[Glaser67]。これは量的研究で採用される統計的サンプリングと対比され、基礎的な母集団の範囲やサンプリング数を事前に決定せず、データとの対話から発見されつつある理論に沿って新たなデータ収集の指針を得るというものである。この操作は、理論的飽和という基準に達するまで持続される。しかしこの膨大なデータの中から現象に対して概念やカテゴリーを名づけていく圧縮の作業は、一種の名人芸的な要素と言われ、方法論の信頼性、普遍性に疑念を抱かれる一要因となっている。このようにデータ収集のプロセスで創造性が要求されるという事態が実証主義的な研究解釈にはなじまない。仮に職人のもつ熟練技能の研究を行おうとする場合に、そのデータ分析を行う者もまた質的研究の熟練者であることが要求される。

質的研究は量的研究をある一面では否定し、たとえば妥当性や信頼性といった量的研究で培われた古典的な基準では、質的研究を正当に説明できないために新しい基準が必要だとする主張がある[Glaser67]。しかし、その一方で質的研究と量的研究とは対象から抽出したい理論や仮説がそもそも異なっており、相補的な関係にあるべきだとする主張もある。いずれにせよ質的研究に対してまだ方法論上の疑問を残していることは事実で、その一方、質的研究についての理解を深め、高い水準の方法論が確立されれば、ヒューマンインタフェース研究をはじめとする工学分野からのシステム開発や評価に重要な貢献を果たすことも期待できる。たとえば質的研究のより工学的な評価手法の開発や、量的研究のより質的な拡大を図る評価手法の開発などが、漸近的な接近法としては自然な類推で得られるが、果たしてこれが求める答えであるのか。

本企画においては、ものづくり現場や伝統産業における熟練技能継承というきわめて属人的な研究対象に対して工学研究が果たしてきた役割と挫折、そして新展開について話題提供し、いかに質的研究が必要とされているか、またこれを実現する上でいまだに満足を得られない未整備な部分について対話者とともに真理に迫りたいと考える。

[Flick02] U.Flick: 質的研究入門<人間の科学>のための方法論, (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子訳), 春秋社, (2002).

[Glaser67] B.G.グレイザー, A.L.ストラウス (訳: 後藤隆他): データ対話型理論の発見, 新曜社, (1996).

[Kupperman02] Jeff Kupperman, Gary Weisserman, and Fred Goodman: The Secret Lives of Students and Politicians: Students As Co-designers of Their Own Learning Cognitive Studies, Vol.9, No.3, 362-384, (2002).

職人のものづくり技能をめぐる工学の視点と質的研究の視点

塩瀬 隆之

(京都大学大学院情報学研究科・ATR ネットワーク情報学研究所)

1 はじめに

結婚式の引き出物などに贈呈される小さなイガイガに囲まれた甘いお菓子、金平糖は江戸時代に南蛮渡来で我が国に定着した。蒸して乾かされた0.5mmほどのイラ粉と呼ばれるもち米に、およそ14日間かけて幾重にもグラニュー糖をとかした蜜の層を重ねてできる美しい結晶である。グラニュー糖をとかした蜜をかけるタイミングは慎重に選ばれ、その粒の一つ一つに突起がでてくる瞬間がその‘時’だそうである。しかしその瞬間を目視することはできず、コテで掻き混ぜられ、又ザザーッ、ザザーッという音を頼りにする他ない。この音を聞き分けて砂糖をかけられるようになるまでには10年以上の歳月を要すると言われ、その日の気候や温度、湿度によっても適切にタイミングを計らなくてはならない。職人にあわせて作られたという大きな釜は、それぞれ回転数も角度も温度も異なり、クーラーもかけられない熱い釜の傍で、かたときも離れずにただ金平糖が釜の中で揺れる音に耳を傾ける。機械やコンピュータには置き換えられない職人の‘技’がそこにある*1。

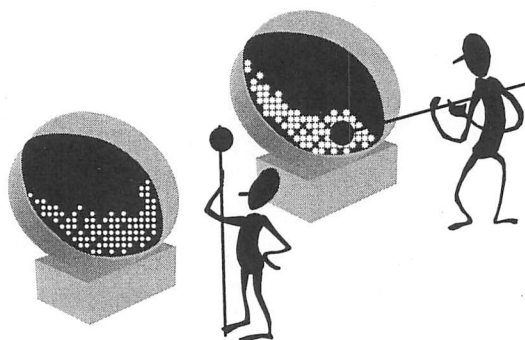


図1. 金平糖づくりにみる職人の‘技’

2 熟練技能をめぐる工学の挑戦

従来、工学研究で熟練技能を扱ったものと言えば、エキスパートシステムが広く知られている。当時の目論見としては、熟練者から知識を抽出し、これをコンピュータに蓄積して誰もがいつでも引き出せる大規模知識データベースを整備することを目指した。当時は人工知能研究が隆盛で、ある特定の領域に限定した膨大な知識ベースを持つことが高度な知性の現れ、すなわち熟練技能の一つであると考えられていた。しかし熟練者の技能すべてをルール形式で抽出し尽くすことは到底不可能であり、その目論見は一部の成功にとどまっていた。

近年、2007年問題と呼ばれる1947年前後に生まれた団塊の世代が一斉に定年退職し、ものづくりの現場から熟練技能が失われてしまうことが危惧されており、社会問題として深刻化している。代表的な対策としては、知識工学におけるナレッジマネジメントや情報工学におけるデジタルアーカイブなど、可能な限り暗黙知を形式知へと転換する技能のデジタル技術化が知られる。金型のデジタル変換によるデータベース化や、伝統文化の屏風絵や彫刻を高解像度カメラでデジタル保存するなどが典型的な取り組みである。これらの取り組みは、1980年代に隆盛であったエキスパートシステム開発の研究思想と何ら異なるものではなく、圧倒的なコンピュータ技術革新を背景に熟練者が語ったもの、あるいは計測した経験則を可能な限り数量化・定式化する方法であることには変わりない。

他方、形式化困難な熟練技能への取り組みも少なからず存在する。熟練技能のデジタル技術化をあ

るところであきらめ、「これについては〇〇さんに聞けばよい」といったメタ知識の集合体としての know-who データベースなど、メディア技術によりアナログ情報のまま知識流通の仕組みをつくる方法がある。筆者はこれまで従来の技能の技術化の限界を指摘し、1) 可能な限りのデジタル技術化を〈人から機械への継承〉、2) アナログ情報の知識流通を支援する〈人から人への継承〉と呼び、これらに3) 技能継承を支える評価・教育体制の充実を促す〈組織の中での継承〉を加え、3つの取り組みを生態心理学の視点から統一的にとりまとめた技能継承の技術化スキームを提案してきた[塩瀬, 2004]。図2に概念図を示す。

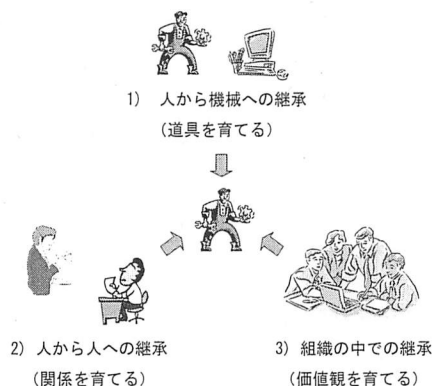


図2. 技能継承の技術化スキーム

第3の視点、〈組織の中での継承〉の例としては、“マイスター制度”のような全社的な評価制度の導入により、技能継承そのものを組織として高く評価するなどが考えられる。熟練者には“技能を教える立場”に在ることの誇りと責任を、継承者には“自社にとって重要な技能を継承する立場”に在ることの誇りと責任を同時に養うなど、組織における相対的なアイデンティティの獲得そのものが、技能にまつわる価値を組織の中に規範化する。しかし、このような仕組みを工学研究の対象とすることは非常に難しく、ソフトシステムズアプローチのようなシステム工学的な視点が最も漸近的な手法と考えられるが、数値化・定量化し得ない熟練者一見習い関係をとらえるには十分とは言えず、この師弟関係をより深く、より質的にとらえるような研究手法が切望される。

3 技能をめぐる新たな視点を求めて

技能継承の技術化スキームは、形式化可能な知識や技能のみならず、暗黙的な師匠－弟子関係や、これをとりまく組織風土そのものを研究対象とすることを目指す。これは効率性重視の観点からは不要な悪習と切り捨てられてしまいがちな潜在的に重要な仕組み、たとえば徒弟制度において弟子が師匠の賄い方を務める慣わしなどに技能継承における重要な足がかりを見出そうとするものである。すなわち、著者らの観点からすれば、たとえば食事の準備の早い遅い、茶の熱い温い、など日常経験する形容詞的表現に含まれる感性的な規範や価値観が長時間に渡って類型化される貴重な装置として賄い方が機能していたのではないかと推察される。このような価値観の類型化を背景に、技能が直接に複写されるというよりはむしろ弟子（見習い）において行為が再組織化される、すなわち“生成の場”としての技能継承が実現されるものとする。これを実現するためにも、工学研究と質的研究とが互いに歩み寄った新たな研究の視点が求められる。

取材協力*1 京都金平糖 榎緑寿庵清水 京都市左京区吉田泉殿町38番地の2

参考文献

[塩瀬, 2004] 塩瀬 隆之, 榎木哲夫, 川上浩司, 片井修: 生態心理学的アプローチからみた技能継承の技術化スキーム, 生態心理学研究第1巻1号, pp. 11-18, 2004.

工学における質的研究の可能性と意義

佐伯 胖

(青山学院大学文学部)

企画者、塩瀬氏の企画趣旨の説明では、「職人さんのものづくりというきわめて『語りえぬわざ』」に対して、これまでの工学研究が無力で、かといって手をこまねいているわけにもいけないので、いろいろ模索しながら新しい手がかりを求める・・・というようなことで話し合いたいということであった。

そこで筆者がすぐに思い当たったのは、筆者が大学で専攻した「管理工学（「人・モノ・オカネのシステム全体を最適化するための工学」というのが公式の定義）」についてであった。筆者が入学した当時（1959 年頃）、管理工学には、なんとなく「上位」に位置する研究領域と、若干「下位」に見られている研究領域があるという印象をもった。「上位」に位置するのは、オペレーションズ・リサーチやシステムズ・エンジニアリングなどであり、それらは、理論面では数学（いわゆる「有限数学」）を駆使し、方法としては、コンピュータ・プログラミングによるモデル化、数値解析、シミュレーションなどを用いる研究領域である。比較的「下位」に見られていたのが、「品質管理」、「生産管理」、「工程管理」、「インダストリアル・エンジニアリング」などであり、それらは、企業の製造や製品企画の「現場」に入り込んで、そこでの問題解決のために、あらゆる学問や過去の経験知を生かすというものであり、どういう理論、どういう方法論を用いるかについて、あらかじめきまった「専門的知識体系」があるわけではなかった。この学問状況は、D. A. Schön が “*The Reflective Practitioner*” でいうところの “technical rationality”（技術的合理性）が支配している状況であり、「実証的かつ論理的に展開できることのみを科学的知とする」という考え方にもとづいたものであった。

この実証主義の強固な伝統を覆すのがいかに困難をきわめたものであるかは、行動主義心理学、それ以後の「実験」認知心理学研究の伝統に対して、「質的心理学」を立ち上げることの困難さを見ればわかるであろう。同じことは、「教育工学」に質的研究の意義をみとめさせることの困難さにもある。

筆者が考えるには、このような技術的合理主義を打破するためには、技術的合理主義の中心である大学の工学部で、産学連携の名の下に、作業現場の熟練職人が教鞭をとるとか、学生の「実習」を指導することである。このような試みは、産学連携の運動として、最近、あちこちで見られるようになってきた。まさに、「象牙の塔」をこわして、大学に「現場の知」を入れることになる。しかし、筆者が考えるには、それだけでは足りないだろう。なぜなら、それはたんに、従来の「机上の」研究を実体験で「補う」という以上のものにはならないからである。そこで必要になるのが、質的研究のプロともいえる、専門の人類学者（Lucy Suchman を見よ）や社会学者（山崎敬一を見よ）が、職人技の意味・意義を工学系の専門家にいかに重要であるかを具体的に示し、訴える「媒介者」が加わることであろう。

テクノロジーの社会・文化的文脈での検討のための質的アプローチの必要性

大谷 尚

(名古屋大学 大学院教育発達科学研究科)

筆者は塩瀬氏、佐伯氏とは異なり、工学をバックグラウンドとする者ではないが、教育工学の世界で働いてきた。そのため、教育における「工学と技術」（以下、テクノロジーと総称する）の問題に触れてきた。そこで筆者を捉えたのは、一見優れたシステムや米国で成功したシステムも、日本の現場では普及せず、一見つまらないシステムでも現場に普及するという多くの例で、これらのことから、テクノロジーをそれがおかれる社会・文化的文脈(socio-cultural context)を含めて検討する必要性を痛感してきた（大谷 2001）。

実際にテクノロジーは、すぐれて社会的な存在である。たとえば、石谷(1982)によれば、技術における方式の転換は、要約すれば「ある方式が、その実績が尊重されて利用されているが、社会の変化によってより単位機能（速度、輸送量、大きさ、倍率等）の大きなものが求められる。しかし実践尊重のために、過渡的には旧来の方式（人力、畜力、蒸気機関、内燃機関等）のまま単位機能を大きくし、ゆきづまりが生じ、新方式の探求が始まる。新方式が誕生し、欠点をさらけ出しながら特殊用途で使用されて実績を獲得し、急速に発達し、在来方式を圧倒して優位に立つ。」と説明される。つまり、技術発展は、ニーズの点でも、実績の形成と受け入れの点でも、社会と密接なつながりを有している。つまりヒューマン・インターフェースは、テクノロジーの多様な側面のうちの「設計」という点における重要な人間的要因であるが、このように、テクノロジーはそのような人間的要因をはるかに超える、多様な社会・文化的諸要因を含みこんで社会の中で成立している。したがって、単にヒューマン・インターフェースや設計のみではなく、テクノロジーのどのような検討の際にも、問題の社会・文化的側面を扱う質的アプローチが必要となるはずである。

このことは、テクノロジーを対象とした研究には、それを使用する人間の研究が重要であることを意味している。たとえば、Cuban(1986)は、学校で教師が gatekeeper の役割を果たし、学校へのテクノロジーの侵入を防いでしまうことがあると述べるが、これこそ、テクノロジー普及における人間的要因である。そうであれば、教育テクノロジーとは、教師にとってどのようなものであるのかを明らかにしていく必要がある。

これを実現するためには、2つのアプローチが考えられる。まず、テクノロジーが使用される現場の研究である。これについては、現在ではエスノグラフィックなもの、エスノメソドロジカルなもの、グラウンデッドセオリー・アプローチ的なものなど、教育工学の世界に多様に存在する。もうひとつは、教師に対するナラティブ・アプローチあるいはライフ・ヒストリー・アプローチである。とくに、学校には公務分掌で、視聴覚教育や教育工学、あるいはコンピュータ利用などを担当する教師がいる。またそのような領域の指導員、指導主事も存在する。彼ら／彼女らの専門とするものは、とくに、国語、数学、理科、社会のような、教科、つまり教育内容ではない。それだけに彼らは、学校で周辺化される可能性があり実際に教科の専門へ戻っていく教師があるにもかかわらず、彼らはなぜ、教育テクノロジーを専門とし続けてきたのか、このような問いは、テクノロジー専門家だけでなく、一般の教員にとっても、教育テクノロジーがどのようなものであるのかを解明する糸口になると考えている。

Cuban, Larry(1986) Teachers and Machines: Classroom Use of Technology Since 1920, Teachers College Press, New York

石谷清幹(1982)工学概論（増補版）、コロナ社

大谷 尚(2001) インターネットの教室利用をさまたげるものは何かー テクノロジー vs. 教授・学習文化ー 『日本教育工学会第17回大会講演論文集』17-18

招待講演

TRANSFORMATIONS AND FLEXIBLE FORMS: WHERE QUALITATIVE PSYCHOLOGY BEGINS

Valsiner, J (USA・クラーク大学)

司会・紹介：サトウタツヤ・やまだようこ

日本語解説：眞賀千賀子

記念講演はクラーク大学教授＝ヤーン・ヴァルシナー氏にお願いしました。氏はエストニアに生まれ大学教育までうけますが、その後アメリカに活躍の地をもとめて移動。1997 年以来クラーク大学心理学科のチェアとしてその運営指導にあたり、同時に、「Culture and Psychology」誌 (Sage 社) の主幹、オンラインジャーナル「FQS: Forum Qualitative Sozialforschung」の編集者として、文化心理学、質的研究法の分野で活躍しています。心理学史にも関心があり「From Past to Future」という雑誌も編集・刊行しています。

日本には 2004 年度・立命館大学客員教授として来日。同大での講義の他、奈良・京都・札幌でも講演し、「お茶目で気さくなヤーン」として親しまれました。大の和食党。

主要著作

Valsiner, J., & Connolly, K. J. (Eds) (2003). Handbook of Developmental Psychology. London: Sage.

Valsiner, J. (2001). Comparative study of human cultural development. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.

Valsiner, J., & van der Veer, R. (2000). The social mind: Construction of the idea. New York: Cambridge University Press.

Valsiner, J. (2000). Culture and human development. London: Sage.

関連サイト

『Studia Iagellonica Humani Cultus Prograssus』4 巻 (1998) 掲載のインタビュー

<http://www.tu-berlin.de/fb7/ifs/psychologie/reports/docs/ber199801.htm>

「FQS: Forum Qualitative Socialresearch」

<http://qualitative-research.net/fqs/fqs-eng.htm>

2004 年度・立命館大学客員教授として来日した際の活動日記

<http://www.psy.ritsumeimei.ac.jp/~satot/diarybox/Val/VAL04/Index.html>

TRANSFORMATIONS AND FLEXIBLE FORMS: WHERE QUALITATIVE PSYCHOLOGY BEGINS

Jaan Valsiner
Department of Psychology
Clark University
Worcester, Ma. 01610, USA
jvalsiner@clarku.edu

Abstract.

Qualitative psychology builds its understanding of psychological phenomena on the basis of phenomenologically oriented approaches in psychology (Brentano, Meinong, Ehrensfield, Külpe, Piaget, Vygotski). Its ontological starting point is unambiguous: **the world consists of different flexible structural forms**, and their corresponding **specifiable sets of conditions under which these forms become other forms**. This perspective is shared between chemistry, biology, and other natural sciences in which the structural nature of the object of investigation is an axiomatic given. Qualitative investigation is primary in all basic sciences, where quantification is used selectively as a technical tool, rather than a symbolic means for public demonstrations of being “scientific.” Qualitative psychology branches off from the common ground it shares with its quantitative counterpart-- the basic notion of the nominal scale—on a different trajectory of systemic analyses of single cases. Qualitative psychology can be productive if it reverses the tradition of methods-dominated psychology in favor of an epistemological inquiry where all parts of methodology are mutually related

*Every window must at all times hold its own against
the ressure of the material*
Heinrich Wölfflin (1886/1994, p. 177)

Our world consists of objects that exist on their own. Psychology begins from our perception of the world, and continues with our construction of meanings that become intimately tied to these forms in our human reflection. Hence all psychology as science is dependent upon the reflection upon the whole myriad of forms—immediately perceivable or imaginable. In the case of at least the human species these forms become enmeshed in potentially infinite semiogenesis—meaning construction through signs. Such ever-fluid creation of meaningful forms sets the focus in psychology on qualitative grounds. Quantity becomes one—narrowly circumscribed aspect of quality (Mally, 1904, chapter 2). My focus in this paper is to suggest some ways in which that unity can further our understanding of psychological phenomena, rather than take sides in the disputes about the adequacy of one or another kinds of methods.

Disuniting psychology: two opposing perspectives

Due to its own historical reasons (Benetka, 2002) our contemporary psychology is not deeply involved in the

philosophical nuances of what quality and quantity mean, and how they are related. Instead, psychology creates oppositions between groups of researchers on the basis of allegiance to different kinds of methods—labeled quantitative and qualitative. As the wider repercussions of methodology (Branco & Valsiner, 1997) are downplayed, psychology’s epistemological perspective becomes phrased increasingly in terms of consensually established methods and operations with the data. For instance, a major presentation on qualitative methodology explains the focus of qualitative psychology through such operations:

Qualitative and quantitative approaches are clearly different in the principal forms of data employed in analysis. Quantitative research depends on the ability to reduce phenomena to numerical values in order to carry out statistical analyses. Thus while much quantitative research begins with verbal data (e.g., in the form of questionnaire responses), this verbal material must be transformed into numbers for a quantitative analysis to be performed. By contrast qualitative research involves collecting data in the form of verbal reports—e.g. written accounts, interview transcripts—and the analysis then conducted on these is linguistic and textual. Thus the concern is with interpreting what a piece of text means rather than finding a way of capturing it numerically. (Smith, 2003, p. 603, added emphases)

This very realistic account of the research practices of contemporary psychology is symptomatic in its immediate acceptance of the operationalist mindset—what matters are what kinds of operations are performed with “the data”, rather than—what are the data and why are they produced? No theoretical goals are mentioned—the phenomena are either “*captured* numerically” or *interpreted* as to “what they mean.”

The dispute between qualitative and quantitative perspectives in psychology is an artifact of the discipline’s moving away from the phenomena it attempts to study (Cairns, 1986), as well as of turning existing methods into *de facto* theories (Gigerenzer, 1991). If these phenomena become restored in the discipline it becomes obvious that the forms of the phenomena have spatial and temporal spread that cannot be represented by numerical signs in most of the cases. This axiomatic premise resolves the opposition between numerical and interpretational data derivation as it views different kinds of data as differently fitting to represent different phenomena.

The data as signs

All data are signs (Valsiner, 1995, 2000a)—in the semiotic sense of that concept. These signs (data signs) stand in to both re-present theoretically relevant facets of the phenomena, and to present these aspects for further theoretical elaboration. The data are not “given” entities that exist independently of the conceptual framework that led to their construction. Instead, **the data are signs constructed out of the phenomena** on the basis of theoretical and meta-theoretical abstract constructs (Valsiner, 2000b, chapter 5). The data function in a double relationship to our knowing—on the one hand, they are subdominant to the theoretical creativity in a science, but simultaneously they dominate over that theoretical world because they establish the crucial link of that world with the empirical reality. Hence the data are a crucial part of the ever-alive process of making sense of the World—but in relation to the different stories that scientists want to create

Implications of the data-as-signs view

The semiotic view of data as signs makes it possible to address a number of issues that are crucial for construction of new ways of knowing. First, the data-as-signs view introduces the theme of relative distancing of the data from their underlying phenomena into our discourse. Such

Recent work in the area of sociology of science practices has revealed most crucial differences between disciplines in their ways of linking the making of the data with the knowledge advancement enterprise (see Knorr Cetina, 1999, for elaborate accounts). All scientific discourse about the role of the data is filled with a tension that emanates from its abductive nature—aside from breakthroughs in our thinking we also get fights between deductively-based and inductively-oriented researchers (see Brush, 1996 on accusations against Mendeleev for bringing alchemy to chemistry under the label of theory)

relative distancing allows the researcher to accept one’s limits—no data can ever fully represent the phenomena. They do not need to, either—it is the inductively over-determined view of science as progressing through data accumulation that idealizes the massive collection of data. In contemporary qualitative orientation in psychology this may have its equivalent in the idealization of “rich descriptions” of the phenomena through ethnographic methods, creation of qualitative “data banks”, and the like. A qualitative turn in the social sciences that merely replaces a quantified form of empiricism by its qualitative (ethnographic, narrative, or any other) counterpart may change a fashion in the social sciences. Yet it can not advance the knowledge of these sciences.

Secondly, issues of validity of the data become resolved in the analysis of whether the sign adequately represents those aspects of the phenomena that the researcher’s theoretical orientation has highlighted. As signs, **the data are qualitative in their normal form**—quantification is but one of the possible operations for the making of data when it is theoretically substantiated (Valsiner & Diriwächter, 2004).

Different forms of data signs

Data signs are of different quality—points and fields. The latter can be structured, semi-structured, or random. All of these are abstract signs that stand in for richness of original phenomena that are rich, fluid, and constantly transforming as a flow of experience. As signs, our point or field terms create a relative abstracted stability of our depiction of fuzzy real phenomena. Such signs can be constructed in terms of homogeneous point-type signs—be those graphic points, alphabetic designations, or numbers—of the nominal scale. (Figure 1)

Each of the choices preserves some selected aspect of the original phenomena—and creates a potential for further abstracted manipulation with the knowledge captured by the signs. Thus, the field-signs (A, B, and C in Figure 1) preserve the spatial extension of the original phenomena (while losing the temporal one). The field nature of the signs allows for abstract depiction of the holistic nature of the phenomena (C). In contrast to the field-like data signs, the point-like signs lose both the spatial and temporal features of the original phenomena while allowing for algebraic (“X”) or quantitative (“5”) transformations of the data. The use of quantifications as signs—e.g. attributing number “5” to some segment of the flow of experience (e.g. in a rating task—see further Wagoner & Valsiner, in press)—is at first step similar to its graphic or alphabetic (categorical—“X”) depiction. The adequacy of either depends upon which aspects of the phenomena are highlighted for further knowledge construction. Some categorical signs (“This is X” kind) are used as a shorthand for field-like signs (e.g., “the person *is in grief*”, “*sorrow* has overtaken him”)

It is also easy to see how the point-like signs are a special case of field-like signs. They can be viewed as abbreviated forms of the latter (see Figure 2). Processes of abbreviation are of central importance in human psychological functioning (Lyra, 1999), and signs are semiotic vehicles for human *psyche*—including that of the

This very realistic account of the research practices of contemporary psychology is symptomatic in its immediate acceptance of the operationalist mindset—what matters are what kinds of operations are performed with “the data”, rather than—what are the data and why are they produced? No theoretical goals are mentioned—the phenomena are either “*captured* numerically” or *interpreted* as to “what they mean.”

The dispute between qualitative and quantitative perspectives in psychology is an artifact of the discipline’s moving away from the phenomena it attempts to study (Cairns, 1986), as well as of turning existing methods into *de facto* theories (Gigerenzer, 1991). If these phenomena become restored in the discipline it becomes obvious that the forms of the phenomena have spatial and temporal spread that cannot be represented by numerical signs in most of the cases. This axiomatic premise resolves the opposition between numerical and interpretational data derivation as it views different kinds of data as differently fitting to represent different phenomena.

The data as signs

All data are signs (Valsiner, 1995, 2000a)—in the semiotic sense of that concept. These signs (data signs) stand in to both re-present theoretically relevant facets of the phenomena, and to present these aspects for further theoretical elaboration. The data are not “given” entities that exist independently of the conceptual framework that led to their construction. Instead, **the data are signs constructed out of the phenomena** on the basis of theoretical and meta-theoretical abstract constructs (Valsiner, 2000b, chapter 5). The data function in a double relationship to our knowing—on the one hand, they are subdominant to the theoretical creativity in a science, but simultaneously they dominate over that theoretical world because they establish the crucial link of that world with the empirical reality. Hence the data are a crucial part of the ever-alive process of making sense of the World—but in relation to the different stories that scientists want to create¹.

Implications of the data-as-signs view

The semiotic view of data as signs makes it possible to address a number of issues that are crucial for construction of new ways of knowing. First, the data-as-signs view introduces the theme of relative distancing of the data from their underlying phenomena into our discourse. Such

relative distancing allows the researcher to accept one’s limits—no data can ever fully represent the phenomena. They do not need to, either—it is the inductively over-determined view of science as progressing through data accumulation that idealizes the massive collection of data. In contemporary qualitative orientation in psychology this may have its equivalent in the idealization of “rich descriptions” of the phenomena through ethnographic methods, creation of qualitative “data banks”, and the like. A qualitative turn in the social sciences that merely replaces a quantified form of empiricism by its qualitative (ethnographic, narrative, or any other) counterpart may change a fashion in the social sciences. Yet it can not advance the knowledge of these sciences.

Secondly, issues of validity of the data become resolved in the analysis of whether the sign adequately represents those aspects of the phenomena that the researcher’s theoretical orientation has highlighted. As signs, **the data are qualitative in their normal form**—quantification is but one of the possible operations for the making of data when it is theoretically substantiated (Valsiner & Diriwächter, 2004).

Different forms of data signs

Data signs are of different quality—points and fields. The latter can be structured, semi-structured, or random. All of these are abstract signs that stand in for richness of original phenomena that are rich, fluid, and constantly transforming as a flow of experience. As signs, our point or field terms create a relative abstracted stability of our depiction of fuzzy real phenomena. Such signs can be constructed in terms of homogeneous point-type signs—be those graphic points, alphabetic designations, or numbers—of the nominal scale. (Figure 1)

Each of the choices preserves some selected aspect of the original phenomena—and creates a potential for further abstracted manipulation with the knowledge captured by the signs. Thus, the field-signs (A B, and C in Figure 1) preserve the spatial extension of the original phenomena (while losing the temporal one). The field nature of the signs allows for abstract depiction of the holistic nature of the phenomena (C). In contrast to the field-like data signs, the point-like signs lose both the spatial and temporal features of the original phenomena—while allowing for algebraic (“X”) or quantitative (“5”) transformations of the data. The use of quantifications as signs – e.g. attributing number “5” to some segment of the flow of experience (e.g. in a rating task—see further Wagoner & Valsiner, in press)—is at first step similar to its graphic or alphabetic (categorical—“X”) depiction. The adequacy of either depends upon which aspects of the phenomena are highlighted for further knowledge construction. Some categorical signs (“This is X” kind) are used as a shorthand for field-like signs (e.g., “the person *is in grief*”, “*sorrow* has overtaken him”)

It is also easy to see how the point-like signs are a special case of field-like signs. They can be viewed as abbreviated forms of the latter (see Figure 2). Processes of abbreviation are of central importance in human psychological functioning (Lyra, 1999), and signs are semiotic vehicles for human *psyche*—including that of the

¹ Recent work in the area of sociology of science practices has revealed most crucial differences between disciplines in their ways of linking the making of the data with the knowledge advancement enterprise (see Knorr Cetina, 1999, for elaborate accounts). All scientific discourse about the role of the data is filled with a tension that emanates from its abductive nature—aside from breakthroughs in our thinking we also get fights between deductively-based and inductively-oriented researchers (see Brush, 1996 on accusations against Mendeleev for bringing alchemy to chemistry under the label of theory)

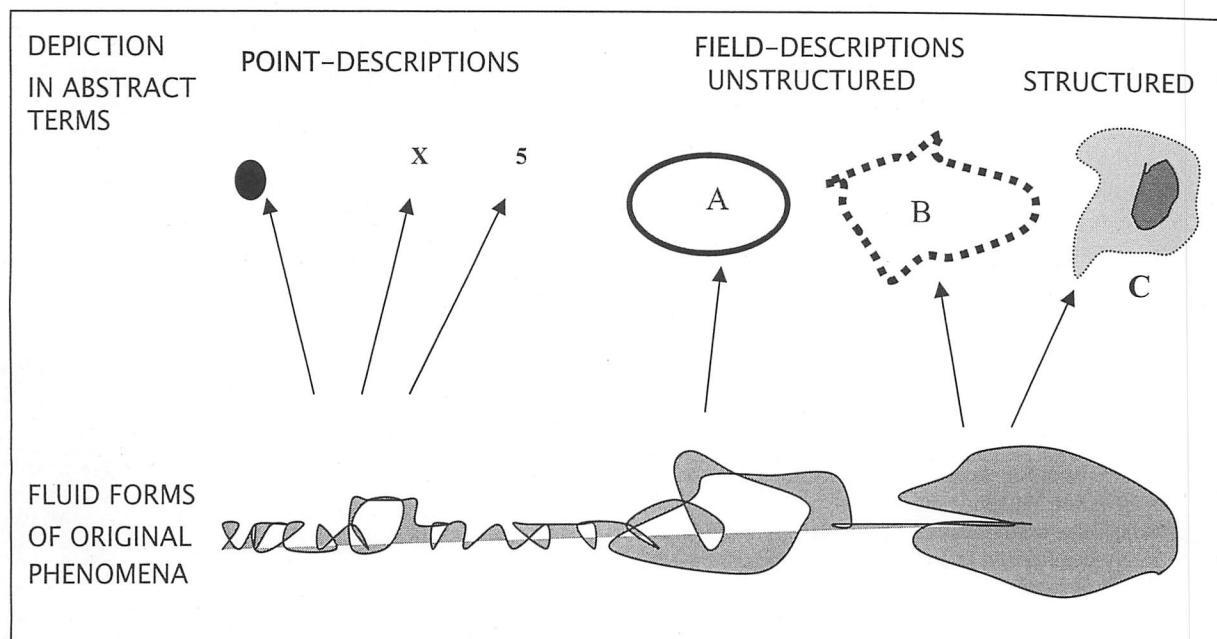


Figure 1. Theoretical terms (data signs)— point or field kind—used to represent the fluidity of phenomena (modified from Valsiner & Diriwächter, 2004)

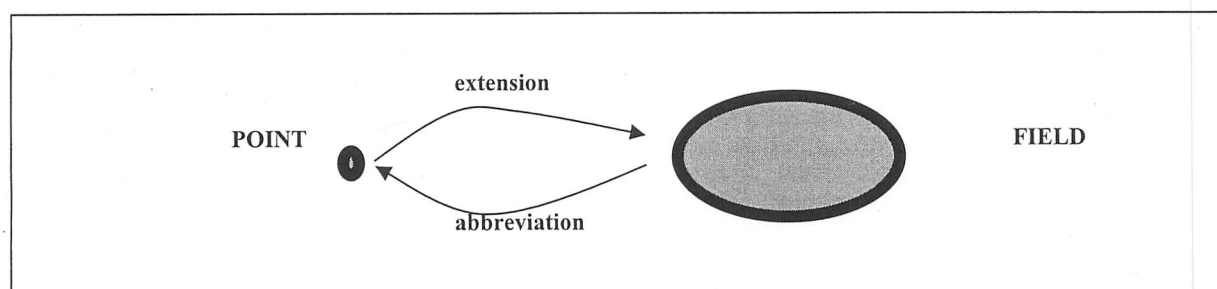


Figure 2. Transformation between point- and field-type signs

thinking social scientists.

As is obvious, each of the routes taken for abstractive extraction of data from the phenomena entails selective retention of some features of the original together with the loss of others. Making of data as signs entails abstractive generalization—some features of the phenomena become lost in that process, while others become highlighted through the abstraction process. What is being gained by abstraction is the set of possible further operations with the data—which can be of epistemological value if the theoretical system they are in give them meaning. Thus, the data of any kind—qualitative or quantitative alike—are selective, abstracted representations of those sides of the phenomena that is of interest for the particular researcher.

Historical roots: psychology as qualitative science

For anybody well versed in the history of psychology it is only natural that the target phenomena of the discipline

are axiomatically viewed as qualitative, and quantification might be acceptable as an elective operation of purely technical nature. Both intra-psychological phenomena (feelings, thinking, etc.) and extra-personally observable parts of human life (behavior, conduct) are best described by reference to their forms. Early psychology as it became established in the European context recognized that well (Benetka, 2002).

It has become customary to date the emergence of psychology by an administrative event—the 1879 opening of Wundt's laboratory in Leipzig. That conventional description shows the crucial overlook of much of actual history of psychology—both in administrative terms (the very first psychology-name-bearing professorship was established in Bern in 1860—Diriwächter, 2004), and in terms of substance. In the latter case, the year 1874 could be a more appropriate milestone.

In 1874, two major books that framed much of the later development of the discipline. The one that has been better known is Wilhelm Wundt's *Grundzüge der*

physiologischen Psychologie. Yet the other—Franz Brentano's *Psychology from an empirical standpoint* was of similar importance. From Brentano the historical links of ideas led to Alexius Meinong at Graz, Edmund Husserl, and Carl Stumpf. Christian von Ehrenfels led the formulation of Gestalt perspectives in the 1890s, influentially both in the Northern German (Kant-dominated) and Austrian contexts.

The Graz tradition of production of psychological configurations entailed the active role of the agent (Albertazzi, 2001)—similarly to *Ganzheitspsychologie* in Leipzig (Diriwächter, 2003). That active role entailed the act of production—the subjective mental activities that create the presentation (*Vorstellung*). This creativity leads to the creation objects (*Gegenstände*) of higher-order. The substantive focus on the content of human psychological activity was another feature characteristic of the “Graz School” (Marek, 2001).

Although the relevance of the Meinong tradition has been rarely emphasized in later re-writing of the history of psychology, it has had its branching influence through the role of the “Würzburg School” of Oswald Külpe and Karl Bühler (Kusch, 1999; Lindenfeld, 1972; Valsiner 1998a) and the latter's colleague Heinz Werner (Valsiner, 2004) with focus on thinking processes and the role of language. The “Graz tradition” has had also a direct impact on the psychology of second half of the 20th century through the work of Fritz Heider (Baumgarten, 2001). The crucial impetus of the “Graz tradition” for psychology is its profoundly qualitative orientation—which of course is not surprising in the case of phenomenological and philosophical—yet empirically extended—tradition. Quantification was used in Graz (cf. Benussi, 1904, 1913) as a means for demonstration of qualitatively relevant experimental interventions (Mally, 1904). It remained equally secondary to qualitative (structural) analysis of psychological functions in other prominent directions of science in the 20th century—that of the efforts to construct a “genetic logic” (Baldwin, 1906) and fill it with relevant empirical work on the development of human mental processes (Piaget, 1922, 1970). Most crucially, building upon the quick development of psychology in the 1920s, Lev Vygotski's cultural-historical perspective was decidedly qualitative in its focus (van der Veer & Valsiner, 1991, Vygotsky, 1971).

All of these historical predecessors to our contemporary renewed interest in qualitative psychology had one major common feature—they all accepted the multi-level hierarchies of qualitatively different organizational forms of psychological functions. They emphasized the need to consider the organization of the whole—through the relations of the parts that make up such wholes. Hierarchical organization is a form of heterogeneity of phenomena of various levels of regulation.

In the beginning of the 21st century, the re-invention of qualitative psychology has to face the impacts of the ideology of “naïve equality” that has come to prominence in the social sciences. Hierarchies of social order are shunned upon, and eliminated. The structure of real social and psychological structures is emulated into formal models of immersion of the person in the socio-cultural environments. As a result, psychology as a discipline may

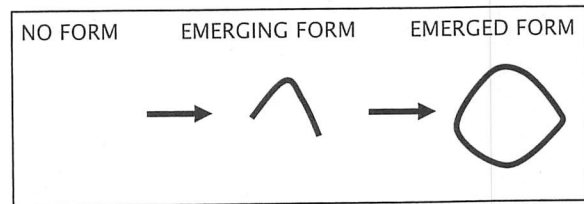


Figure 3. The emergence of a form

lose the centrality of the person—the agent in any action, and the one who creates the interpretations of the world.

Flexible structural forms: The key to qualitative theorizing

All of our experiences as human beings are with forms—spatial and spatio-temporal configurations. First and foremost—the bearers of our experiencing—that is, ourselves—are capable of them because of our own species-specific bodily configurations. The specific forms of our sensory systems afford our experiences.

The forms are guaranteed by the co-genetic nature of the work of our psychological processes (Herbst, 1995). A perceived form emerges as a result of making a distinction (Figure 3)

Together with the drawing of a line its context (non-line) creates the form of the given line, and the form is emerging. A finished contour—emerged form—creates the triplet {<inside> <boundary> <outside>}.

The co-emergence of parts as the whole is created operates similarly within the domain of meanings:

For suppose we say “I am hungry.” Can we separate the “I” from the “hungry” and then put them together again? Or, if we have a wife and a husband, do we first and independently have a wife and a husband, and then link them together by marriage? (Herbst, 1995, p. 69)

Form emerges also without the actual contours being drawn or detected, as in the following classic case (Figure 4). The various ways in which the dots in the figure can be connected leads to emergence of forms—some of which are visual illusions (e.g., the Müller-Lyer illusion).

Our psychological systems can generate many perceptual forms in the relating with the world. Some of the forms we create by our mental synthesis provide us with conceptual puzzles—like the impossibility of the “round square” or the metaphoric irreality of “the golden mountain” (Meinong, 1907, pp. 14-16).

All human psychological adaptation takes place in irreversible time that sets up constraints upon the making of forms. All forms—both static and dynamic—are forms in motion. The human psychological system integrates different events encountered at any present moment into a form that transcends that moment, and unites the past and the future (Benussi, 1913). Hence, forms are time-gestalts—and the most fitting everyday example of forms is that of a melody—be this in the form of rhythmically moving bodies (dance), illusions of movement

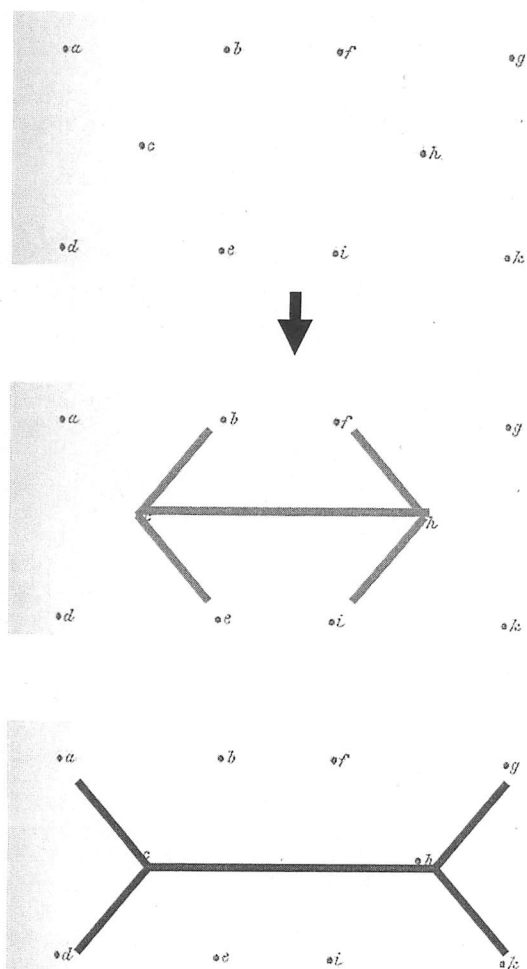


Figure 4. Gestalt formation base
(from Benussi, 1904, p. 305, with added in-drawings)

of stationary dots (the Phi-phenomenon), classical or rap music (Abbey & Davis, 2003), or language (Wildgen, 2004).

Musical forms have been the core phenomenon for developing psychology at the end of the 19th and beginning of 20th century (Ash, 1995). They served as the basis phenomenon for the development of the idea of transposable wholes—configurations of various orders of generality (Ehrenfels, 1988a, 1988b, 1988c; Smith, 1988). A melody is possible only if it becomes unified across the irreversible time—thus requiring configurational memory:

...in order to apprehend a melody, it is not sufficient to have in one's consciousness at each stage the impression of the note that is then sounding. Rather—leaving aside the initial tone—the impression of at least some of the preceding tones must also be given in memory. Otherwise the concluding impression of all melodies having an identical final note would be the same. (Ehrenfels, 1988a, p. 84)

That configurational temporal memory is a generalizing one—allowing for “filling in” missing notes and

transposing the melody across keys. Thus human psychological functioning takes place at the level of generalized Gestalt qualities—flexible configurations of intermediate abstractness that may change their location, exchange particular elements within the whole, and be only partially available in perception.

As patterns of generalized kind, Gestalt qualities are the basis for innovation. The process of completion of the Gestalt is always open-ended (as the person faces the uncertainty of the impending future) and hence calls for “free generation by the creative activity of imagination” (Ehrenfels, 1988a, p. 109)². The result of such creativity was the recognition of emergence of Gestalt qualities of “higher order”—new qualities that may defy description in verbal terms, yet operate precisely in our relations with our environments. Thus, we may recognize the composer of a melody we hear for the first time—obviously by way of some generalized image of the similarity of the new tunes with others we have heard before. Yet we cannot explain how we succeeded in doing it.

Together with the emergence of qualitatively higher forms of Gestalten comes the question of their maintenance, and dissipation. The hierarchy of Gestalt qualities could be tested by how they preserve interventions that might eliminate them—how enduring are the particular level of Gestalt qualities:

A rose is a Gestalt of higher level than a heap of sand: this we recognize just as immediately as that red is fuller, more lively color than grey. ... For a fixed degree of multiplicity of parts, those Gestalten are the higher which embrace a greater multiplicity of parts.... One imagines the given Gestalten (a rose, a heap of sand) to be subject to gradual, accidental and irregular interventions. Whichever of the two Gestalten thereby survives the wider spectrum of changes of the higher level. (Ehrenfels, 1988b, p. 118)

The resistance to dissipation is thus the proof of the higher order nature of Gestalt qualities. This idea is in line with the notion of **flexible nature of forms**—all organismic forms exist as inherently transforming themselves, or as adaptable to external demands. Both the flexibility of forms and the hierarchical nature of Gestalt qualities set up the basis for qualitative methodology in psychology.

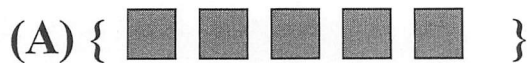
² Aside from leading to different holistic perspectives in psychology of the 20th century, Ehrenfels' notion of Gestalt quality set the stage for considering the processes of development in the psychological domain:

“Psychic combinations never repeat themselves with complete exactness. Every temporal instant of every one of the numberless unities of consciousness therefore possesses its own peculiar quality, its individuality, which sinks, unrepeatable and irreplaceable, into the bosom of the past, while at the same time the new creations of the present step in to take its place.” (Ehrenfels, 1988a, p. 116)

Thinking of forms and their relationships

We have established by now that any object of investigation in the biological, social, and psychological sciences is qualitative at its detection (or inception), and may become quantifiable only under strictly set limits. This focus on the operation of quantification as a special case of qualitative-psychological analysis needs further specification.

Let us consider a set of abstract forms (A):



All of these forms in series A are specimens of a homogeneous class, and are rigid in their ontological state. It is not difficult to assign a category label ("square") to them. The number of such specimens can be counted, their height and width can be compared to some length standard—"measured" in some units. Each square has quantifiable properties (Mally, 1904)—dimensions of "width" and "height". Yet note that their quality attributed by way of class membership ("squares" → each square entails "squareness" in it), nor their quantitative measurement of "each square is X mm wide and X mm high") tells us anything about

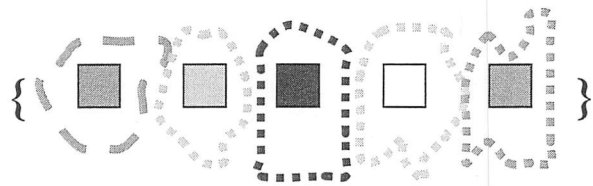
- (a) how these squares were generated,
- (b) how they function in their environment (in fact they are abstracted from any form of environment); and
- (c) how they may be related with one another (that possibility is also ruled out from the act of class formation).

Since (a) is unknown, we need to assume that these squares resulted from some version of sampling from some "population" of squares, by the criterion of their form-quality ("squares" rather than "triangles"). In any sampling of this kind there is no trace of the history of the contact of the researcher and the past history of the objects (Sato, Yasuda & Kido, 2004). This limitation may be sufficient for our research on these squares only if the crucial features of their existence are strictly limited to the sampled internal character of the objects.

The rigid forms in (A) are also freed from their immediate environmental contexts (b). Since psychological phenomena are—by axiomatic acceptance of them as open systems (Valsiner, 1997, 1998b)—the elimination of the environmental information of the phenomena in the data set (A) eliminates from the outset the possibility of studying the relations of each specimen with its environment. It is at this junction of our analysis where we need to agree with Wittgenstein's (1958, p. 232) sharp remark, made half a century ago, that in psychology "problem and method pass one another by."

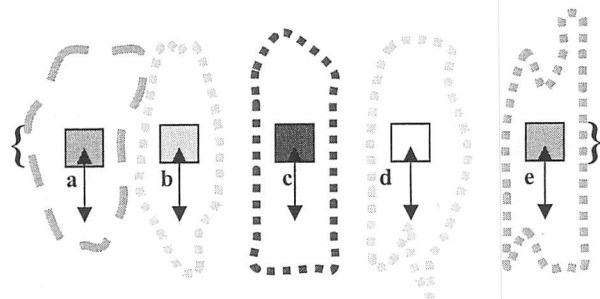
Yet these problems can be fixed—by sampling the specimens together with their contextual surroundings as in Sample (B):

(B)



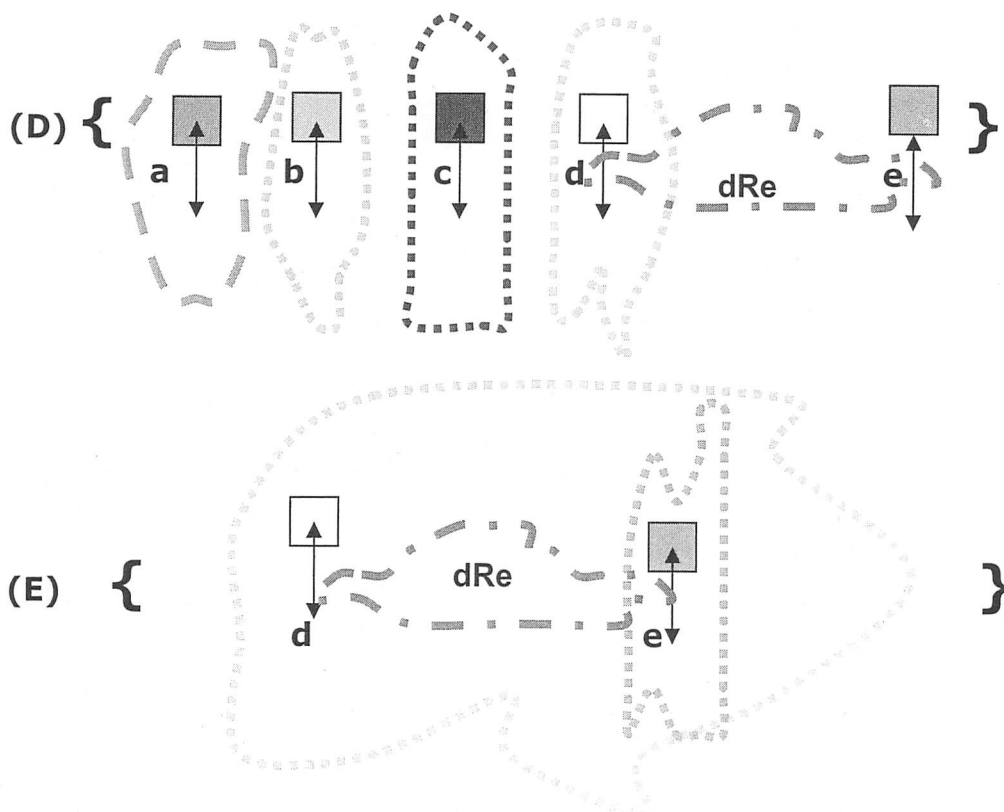
While the environmental links have been preserved in this set, these are not specified in the description. If we needed that relation, we need to re-draw the set in the way (C).

(C)



Even in C, where the focus is on particular relationships (a,b,c,d,e), the information about how the different specimens may be related with one another is not available. Different specimens are assumed not to be related in the first place (i.e., the assumption that makes the notion of sampling—of specimens, or of individual relations specimen<RELATED WITH> environment—possible). So, if we do assume that at least one of the specimens is linked with at least one another, we need to know that as a crucial part of our — pointedly non-random—sampling. Scheme D gives the picture of such case.

Picture (D) depicts merely the interwoven relation between the relations with our environments between two systems (d, e). So what we depict here is **relationship of the relations**. In human psychological phenomena such interwoven nature of person-environment relations is a given— the very moment we accept the assumption of the sociogenetic nature of human psychological functions (Valsiner & van der Veer, 2000). Parents relate with the same home conditions that their children do—and each person is simultaneously an active agent in such relation, and a part of the environment for the others. The relations of the powerful to their environments are dependent upon those of the powerless—or, more precisely, the power of either depends upon that relationship (Meigs, 1990 on male/female power circularity). And—human beings make up an imaginary "social other" who is projected into one's environment—and treated as an agent whose environment the creator of the "social other" inhabits. The person invents a deity to whom omnipotence is projected—and hence the person becomes the "servant" to



the deity—yet the deity is but the person's mental construction (Valsiner, 1999). Our example of the relation of the relations (dRe in C) obtains a new structural form (E):

In case E we see a **unilateral takeover** by the environment of one of the specimens of **all** of the environment of the other. The result is the “framing” of the relationship **dRe** by that unilaterally set-up encompassing of the environments. The relationship is set up in ways that is guided by meta-communicative framing (Branco & Valsiner, 2004). Whatever (e) does—in one's “life space” (Lewin, 1943)—is guided and provided meaning for by (d) by the mere fact of unilateral take-over of the environment.

Examples of such relations abound in human societies. Any ideology, religion, fashion, or political creed is oriented towards “capturing” the full “life space” of persons, hoping to make them **dependently independent** (Valsiner, 1984). Dependent independence is a form of independence (in the façade) behind which the social world of the persons guides their independence into a socially acceptable **range** (=dependency). Since it is a range of possible independent actions – even to be seen as fiercely opposed to one another—the illusion of their independence is the first observable feature for an external observer (Figure 5). The contrast between the two forms given in Figure 5 is an elaboration of the general example of transformation of forms given in Figure 2 above. It also elaborates the ways in which selection of research participants proceeds in cultural psychology (Valsiner, 2003, especially Figure 2) where the interdependence of the person with multiple social institutions is valued.

A careful consideration of Figure 5 renders many of our usual opposites that seem to be observational givens (“individualism” versus “collectivism”, “restrictive parenting” versus “Laissez-faire parenting”) to be but versions the same—albeit flexible- form. What matters for making sense of that generic form is the set of conditions under which the two opposite specimens are examples of the same system. The **social forms we can observe are flexible**—they can transform into one another, adjust to new conditions within the system that generates those (and others—that have not yet been observed—van Geert, 1998).

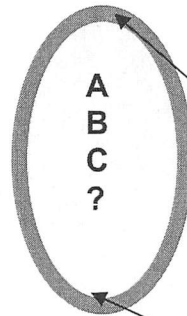
Psychological phenomena form heterogeneous classes (Valsiner, 2000b) because of the constant needs for pre-adaptation to new circumstances. The result is reliance upon flexibility of the means for such adaptation—quick change of the meaning complexes, flexibility of action schemes, and speedy re-alignments in social coalitions. Rituals that seem well established become constantly re-constituted (Köpping, 1999), and communicative messages re-interpreted. What we seem to take as irreconcilable opposites may become two extreme states of a mutually transforming form.

Such mutual transformability of psychological structures makes it rather difficult to “capture” by way of any fixed sign—be it a number, a category label, or a graphic node (see Figure 1, above). Field-like signs afford the description of the plasticity of the structures. Yet the crucial feature that psychology is to understand is the **emergence of new qualitative order** out of the dynamics of the existing ones.

A. The "Democratic form"

Person:

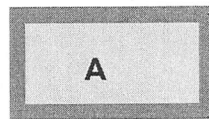
"I am free, I have
choice of A, B, C
or whatever new(?)
that may become
available"



B. The "Authoritarian form"

Person:

"I deeply believe
that A is THE way
to think and act"



**SOCIAL
CONSTR-
AINING
AGENT**

Figure 5. Two forms of dependent independence

Hierarchical structures: The question of synthesis

The whole issue of investigation of qualitative kind is that of the study of various versions of structural transpositions—from one context to another, and from one form of a structure to an altered (developed—progressed or regressed) form. The unit of analysis is systemic—in ways that allows for emergence of new quality under specifiable circumstances.

Lev Vygotsky formulated the dialectical systemic unit of analysis:

Psychology, as it desires to study complex wholes... needs to change the methods of analysis into elements by the analytic method that reveals the parts of the unit [literally: breaks the whole into linked units—metod... analiza,...razchleniyushogo na edinitsy]. It has to find the further undividable, surviving features that are characteristic of the given whole as a unity—units within which in mutually opposing ways these features are represented [Russian: edinitsy, v kotorykh v protivopolozhnom vide predstavleny eti svoistva]³ (Vygotsky, 1982, p. 16)

³ It is important to note that the intricate link with the dialectical dynamics of the units—which is present in the Russian original—is lost in English translation, which briefly stated the main point: "Psychology, which aims at a study of complex holistic systems, must replace the method

Since the 1870s the leading metaphor used to explain the need to consider different qualities at different analytic levels has been the contrast between water (H₂O) and its components (oxygen and hydrogen)⁴. As Kenji Imanishi (2002, p. 22) remarked, "...it is nonsense to explain why birds fly and fish swim in terms of cells which cannot fly or swim." The explanation can come from an organizational level that synthesizes the work of cells—some form of network of cells in the nervous system, catering for the swimming and flying. Yet such network includes cells as parts.

The focus on synthesis makes the qualitative investigation operate at the level of single cases—any specific episode where a new—previously unencountered—form is observed to come into existence is by definition a single case. It is the **systemic re-composing** operation that allows qualitative psychology to study the single case. The quantitative direction—by its axiomatic dependence upon recurrence of similar cases and their homogenization (as similar cases, "specimens of X") is conceptually blind to the study of single episodes of psychological phenomena.

of analysis into elements with the method of analysis into units" (Vygotsky, 1986, p. 5).

⁴ This metaphor has been used in scientific discourse at least since 1872—when J. S. Mill used it in his *Logic* (p. 371): "Not a trace of the properties of hydrogen or of oxygen is observable in those of their compound, water." —R. Keith Sawyer, personal communication, February, 20, 2002.

Two pathways to generalized knowledge

It can be argued that there are two trajectories to generalized knowledge in the social sciences. One is built on the assumption of repetition of the same classes of events—even if these classes comprise fuzzy sets—and allows therefore quantification as an operation of turning phenomena into data. The other builds on the assumption of uniqueness of events—hence the principles by which the unique events occur may be universal, but the events themselves are not. This perspective leads to the systemic analysis of the events.

These two trajectories have the same goal—knowledge about the phenomena. That generalized knowledge is itself qualitative—and systemic. The results of quantification of the data that begin from some qualitative description (nominal scale) end up—after one or another kind of quantitative operations—making sense of the phenomena in terms of **qualitative** generalizations. Thus—our knowing may move through quantificational operations in order to arrive at a qualitative abstraction about the issues we want to understand.

Recently, Laird (2004) has pointed out that all four measurement scales in the social sciences—nominal, ordinal, interval, and ratio scales—can be ordered into one ascending developmental sequence that raises from the one with least axiomatic restrictions—the nominal scale. He also points out that the weakness of the qualitative perspectives in psychology is the underdevelopment of the formal inference techniques—while the quantitative perspective has varied ways of analyzing data at the ordinal, interval, and ratio scale levels.

In Figure 6 the two trajectories to knowledge construction are provided. The upper trajectory is the ascending “developmental staircase” model that Laird has posited. Its internal logic requires the detection of categories, treating them as represented by quanta, and accumulating them before the data can be analyzed. The lower trajectory is that of qualitative analogs of the others. It operates as a step-wise elaboration of the systemic organization of the nominal scale (detected) representation of the phenomena. Its operation follows the rule of “first analyze—then aggregate” (Thorngate, 1986). First the systemic operation of each individual data sign needs to be elaborated, and only later does it become relevant to accumulate the data.

Both of the two trajectories are supposed to end in the same result—new qualitative abstract knowledge of the phenomena. Both trajectories involve analysis and synthesis of knowledge—albeit in different ways. These differences cannot—and need not—be reconciled in the middle stages of the two trajectories—only in the beginning (agreement upon the nominal scale data) and at the end (abstract generalization).

How do researches in their practice elect to proceed to the same outcome (general knowledge) through these different trajectories? Their choices are – in the ideal version of “vertical consistency” in their methodological thinking (Branco & Valsiner, 1997) guided by the estimation of fit between theoretical perspectives they take, and the nature of the phenomena.

Dependent independence of sciences. A science—like any other area of social life—is open to social guidance by prevailing social representations. As a social interest group (scientific community) it negotiates its role and conditions of work within the given social context—be it a time of war, or peace, a time of economic expansion or constriction, or a time for joining in with corporations in their “gold rushes”.

The social negotiations involved are based on meta-signs—meanings that frame the values of science. For example, the superimposition of the **OBJECTIVE** (“hard”, “precise”) <versus> **SUBJECTIVE** (“soft”, “anecdotal”) oppositional social representation over the quantitative <> qualitative psychologies (as two trajectories to the same end) sets up the field of social values for creating new research perspectives in ways that prioritize the quantitative perspective as “objective”, “precise”, and “hard”. Nothing can be further from reality⁵—but in the social construction of the role of a science within the socio-historical context of a society that does not matter. In the social discourse about science we can see the process of canalization of what kind of knowledge is socially legitimate to create and how it is expected to be usable by the social institutions. In the Middle Ages, that social legitimization of different kinds of knowledge was the privilege of the rulers—and needed little if any public discussion. In our time of proliferation of the public discourse about what science can do “for the society” the openness of this social canalization to overwhelming field-like evaluative signs⁶ is enhanced. The result might not be greater “social accountability” of the sciences (which, by their nature of working on the forefront of knowledge, necessarily include perspectives and directions of little usefulness), but rather—mass media-amplified pre-emptive selection of the research directions that are in the interests of the given social institution (government agency or corporation). The ritualistic form of announcing new scientific discoveries at press conferences to the media **before** these results have been published in scientific communication media⁷ indicates that the emergence of

⁵ The belief in the “objectivity of numbers” in ways separate from what the numbers mean (their sign function) has been disputed long before psychology emerged as a separate discipline in the 1870s. That dispute was an outgrowth of social disputes about the role of individuals in society, and of society’s administrative control of individuals (cf. Porter, 1986, chapter 6). Quantitative data are as “objective” as public accounting records (Porter, 1992), and their presumed “precision” is an example of social construction of value out of consensual images (see Kuiken & Miall, 2001, paragraph 6).

⁶ Examples of such vulnerability of sciences to such hyper-complexes of value-laden meanings used in the discourse abound: current disputes in the US about evolution, stem cell research, and the wide use of social regulation of what social scientists can do through the “human ethics committees” (“internal review boards” carry function similar in former USSR in the 1930s in stigmatizing “bourgeois science” and getting rid of genetics and psychology through that for a number of decades,

⁷ or—the pre-view of what will be published next week in a medical journal can be known to wide readers on the web, or in a local newspaper, this week.

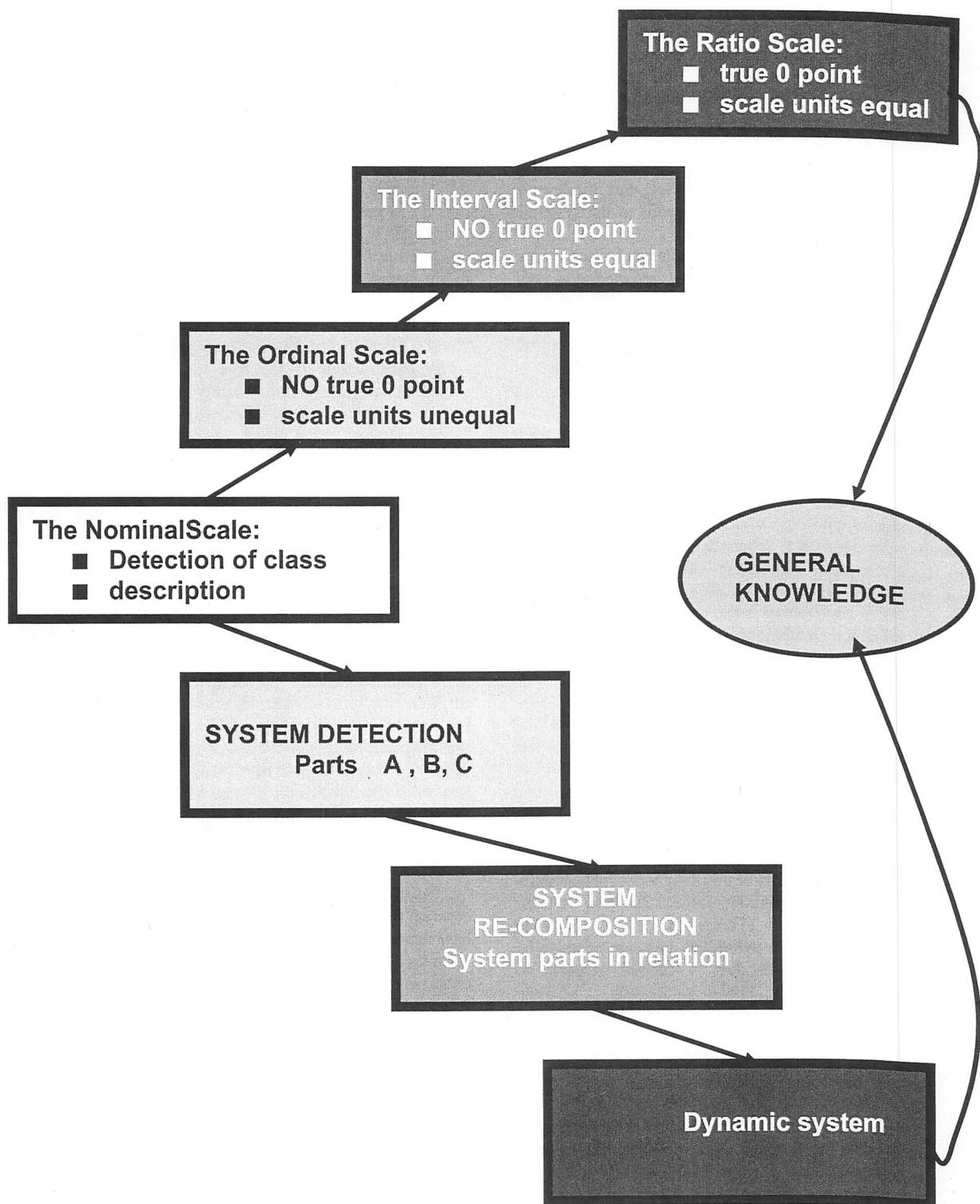


Figure 6. The quantitative and qualitative trajectories in knowledge construction

new forms of social regulation of sciences. The fate of the public role of qualitative psychology of course stays inescapably within the frame of these social negotiation processes. Yet the conceptual core of qualitative psychology cannot be made hostage to such orchestrated "public hearings" but needs to follow from the internal consistency of researchers' scientific—as contrasted with public—thinking.

General conclusions

Qualitative psychology is becoming increasingly popular, as many new treatises and discussions by many fascinated (by richness of its promises) or disillusioned (in traditional psychology) researchers indicate (Mey, 2004; Murray & Chamberlain, 1999; Smith, Harré & van Langenhoeve, 1995). From my standpoint as is evident from the coverage above, this new development in the social sciences is a blessing in disguise. On the one hand, it does open the opportunities for innovative ways of developing new approaches to complex psychological issues that were not approachable since the avalanche of "the Empire of Chance" (see Gigerenzer et al, 1989) in the social sciences. On the other side, however, it runs the risk of being "managed" by the social regulatory system of the sciences-in-societies that can easily make the new opportunity into a regular practice of mindless accumulation of "good qualitative data"—to replace the presently prevailing practice of equally mindless accumulation of "good quantitative data". The issue at stake is not the kind of data either perspective generates, but the **focus on discovery** (rather than socially positioned interpretations—see Kleining & Witt, 2001) of the whole discipline.

When the focus is on discovery, there is no difference between the natural and social sciences. Looking at qualitative psychology it becomes clear that its commitment to the structural-dynamic trajectory outlined above is similar to other sciences. Qualitative investigation is primary in all basic sciences, where quantification is used selectively as a technical tool, rather than a symbolic means for public demonstrations of being "scientific." There is no ideological separation of quantitative and qualitative perspectives—the kind of mathematical systems that fit either are applied in accordance with the research questions.

In this paper I have outlined the substantive complementary nature of the two perspectives. Qualitative psychology branches off from the common ground it shares with its quantitative counterpart—the basic notion of the nominal scale—on a different trajectory of systemic analyses of single cases.

Our contemporary move towards qualitative psychology can be productive in a way that may be somewhat unexpected. It may—because of its facing of complex conceptual challenges—reverse the tradition of methods domination in psychology. The question of what kind of data represent the theoretically relevant features of the phenomena brings back the centrality of theoretical, abstract thought. The realities of feeling, thinking, acting, and suffering in human lives deserve to be understood in terms of basic science.

References

- Abbey, E. & Davis, P. (2003). Constructing one's identity through autodiologue: A cultural psychological approach. In I. Josephs (Ed.), *Dialogicality in development*. (pp. 69-86). Stamford, Ct.: Ablex.
- Albertazzi, L. (2001). Presentation and production. In L. Albertazzi, D. Jacquette & R. Poli (Eds.), *The school of Alexius Meinong* (pp. 239-259). Aldershot: Ashgate
- Ash, M. G. (1995). *Gestalt psychology in German Culture 1890-1967*. Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Baldwin, J. M. (1906). *Thought and things: A study of the development and meaning of thought, or genetic logic*. Vol. 1. *Functional logic, or genetic theory of knowledge*. London: Swan Sonnenschein & Co.
- Baumgartner, E. (2001). Fritz Heider (1896-1988). In L. Albertazzi, D. Jacquette & R. Poli (Eds.), *The school of Alexius Meinong* (pp. 153-156). Aldershot: Ashgate
- Benetka, G. (2002). *Denkstile der Psychologie*. Wien: WUV-Universitätsverlag
- Benussi, V. (1904). Zur Psychologie des Gestalterfassenes. In A. Meinong (Ed.), *Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie* (pp. 303-448). Leipzig: J.A. Barth.
- Benussi, V. (1913). *Psychologie der Zeitauffassung*. Heidelberg: Carl Winters Universitätsbuchhandlung.
- Branco, A. U., & Valsiner, J. (1997). Changing methodologies: A co-constructivist study of goal orientations in social interactions. *Psychology and Developing Societies*, 9, 1, 35-64.
- Branco, A. U. & Valsiner, J. (Eds.). (2004). *Metacommunication and communication in human development*. Stamford, Ct: InfoAge Press
- Brentano, F. (1981). *Sensory and noetic consciousness*. London: Routledge & Kegan Paul. [German original published in 1929]
- Brentano, F. (1995). *Psychology from an empirical standpoint*. London: Routledge [German original in 1874]
- Brush, S. G. (1996). The reception of Mendeleev's Periodic Law in America and Britain. *ISIS*, 87, 595-628.
- Cairns, R. B. (1986). Phenomena lost: issues in the study of development. In J. Valsiner (Ed.), *The individual subject and scientific psychology* (pp. 97-111). New York: Plenum.
- Diriwächter, R. (2003, June). What really matters: Keeping the whole. Paper presented at the 10th Biennial Conference of International Society for Theoretical Psychology, Istanbul, Turkey.
- Diriwächter, R. (2004). Völkerpsychologie: The synthesis that never was. *Culture & Psychology*, 10(1), 179-203.
- Ehrenfels, C. von (1988a). On Gestalt qualities. In B. Smith (Ed.), *Foundations of Gestalt theory* (pp. 82-117). München: Philosophia Verlag. [German original 1890]

- Ehrenfels, C. von (1988b). Gestalt level and gestalt purity. In B. Smith (Ed.), *Foundations of Gestalt theory* (pp. 118-120). München: Philosophia Verlag. [from *Kosmogonie*, 1916]
- Ehrenfels, C. von (1988c). On Gestalt qualities (1932). In B. Smith (Ed.), *Foundations of Gestalt theory* (pp. 121-123). München: Philosophia Verlag.
- Gigerenzer, G. (1991). From tools to theories: A heuristic of discovery in cognitive psychology. *Psychological Review*, 98 (2), 254-267.
- Gigerenzer, G., Swijtink, Z., Porter, T., Daston, L., Beatty, J. & Krüger, L. (1989). *The empire of chance*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Herbst, D. P. (1995). What happens when we make a distinction: an elementary introduction to co-genetic logic. In T. Kindermann and J. Valsiner (Eds.), *Development of person-context relations* (pp. 67-79). Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Imanishi, K. (2002). *The world of living things*. London: Routledge (original: *Seibutso no sekai*, 1941)
- Jacquette, D. (Ed.) (2004). *The Cambridge companion to Brentano*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kuiken, D., & Miall, D. S. (2001). Numerically aided phenomenology: Procedure for investigating categories of experience. [68 paragraphs]. *FQS: Forum Qualitative Sozialforschung*, 2, 1 [http://qualitative.research.net/fqs/fqs-eng.htm]
- Kleining, G., & Witt, H. (2001). Discovery as basic methodology of qualitative and quantitative research [81 paragraphs]. *FQS: Forum Qualitative Sozialforschung*, 2, 1 [http://qualitative.research.net/fqs/fqs-eng.htm]
- Knorr Cetina, K. (1999). *Epistemic cultures: How the sciences make knowledge*. Cambridge, Ma.: Harvard University Press.
- Köpping, K.-P. (Ed.) (1999). *The Games of gods and man: Essays in play and performance*. Hamburg: LIT Verlag
- Kusch, M. (1999). *Psychological knowledge: A social history and philosophy*. London: Routledge
- Laird, J. L. (2004). A microgenetic developmental perspective on statistics and measurement. In R. Bibace, J. Laird, K. Noller & J. Valsiner (Eds), *Science and medicine in dialogue*. Westport, Ct: Greenwood.
- Lamiell, J. T. (2003). *Beyond Individual and Group Differences: Human Individuality, Scientific Psychology, and William Stern's Critical Personalism*. Thousand Oaks, Ca: Sage
- Lewin, K. (1943). Defining the field at a given time. *Psychological Review*, 50, 292-310.
- Lindenfeld, D. (1972). Meinong, the Würzburg School, and the role of experience in thinking—a historical-critical approach. In R. Haller (Ed.), *Jenseits von Sein und Nichtsein: Beiträge zur Meinong-Forschung* (pp. 117-125). Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt.
- Lyra, M. C. D.P. (1999). An excursion into the dynamics of dialogue. *Culture & Psychology*, 5, 4, 477-489.
- Mally, E. (1904). Untersuchungen zur Gegenstandstheorie des Messens. In A. Meinong (Ed.), *Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie* (pp. 121-262). Leipzig: J.A. Barth.
- Marek, J. C. (2001). Meinong on psychological content. In L. Albertazzi, D. Jacquette & R. Poli (Eds.), *The school of Alexius Meinong* (pp. 261-286). Aldershot: Ashgate.
- Meigs, A. (1990). Multiple gender ideologies and statuses. In P. R. Sanday & R. G. Goodenough (Eds), *Beyond the second sex: new directions in the anthropology of gender* (pp. 101-112). Philadelphia, Pa.: University of Pennsylvania Press.
- Meinong, A. (1907). *Über die Stellung der Gegenstandstheorie im System der Wissenschaften*. Leipzig: R. Voigtländer.
- Mey, G. (Ed.) (2004). *Qualitative Forschung in der Entwicklungspsychologie*. Köln: Kölner Studien Verlag.
- Murray, M., & Chamberlain, K. (Eds.) (1999). *Qualitative health psychology*. London: Sage.
- Piaget, J. (1922). Essai sur la multiplication logique et les débuts de la pensée formelle chez l'enfant. *Journal de Psychologie*, 19, 222-261.
- Piaget, J. (1970). Piaget's theory. In P. H. Mussen (Ed), *Carmichael's manual of child psychology*. 3rd ed. Volume 1. (pp. 703-732). New York: Wiley.
- Porter, T. M. 1986). *The rise of statistical thinking 1820-1900*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Porter, T. M. (1992). Quantification and the accounting ideal in science. *Social Studies of Science*, 22, 633-652.
- Sato, T., Yasuda, Y., & Kido, A. (2004). Historically structured sampling (HSS) model: A contribution from cultural psychology. Paper presented at the 28th Congress of Psychology, Beijing, China, August, 12.
- Smith, B. (1988). Gestalt theory: an essay in philosophy. In B. Smith (Ed.), *Foundations of Gestalt theory* (pp. 11-81). München: Philosophia Verlag.
- Smith, J., Harré, R., & van Langenhoeve, L. (Eds) (1995). *Rethinking methods in psychology*. London: Sage.
- Smith, J., & Dunworth, F. (2003). Qualitative methodology. In J. Valsiner & K. J. Connolly (Eds.), *Handbook of developmental psychology* (pp. 604-621). London: Sage.
- Thorngate, W. (1986). The production, detection, and explanation of behavioural patterns. In J. Valsiner (Ed.), *The individual subject and scientific psychology* (pp. 71-93). New York: Plenum.
- Valsiner, J. (1984). *The childhood of the Soviet citizen: Socialization for loyalty*. Ottawa: Carleton University Press
- Valsiner, J. (1986). Between groups and individuals: Psychologists' and laypersons' interpretations of correlational findings. In J. Valsiner (Ed.), *The individual subject and scientific psychology* (pp. 113-152). New York: Plenum.
- Valsiner, J. (1995). Meanings of "the data" in contemporary developmental psychology: constructions and implications. Gastvortrag am 12. Tagung der Fachgruppe Entwicklungspsychologie der

- Deutschen Gesellschaft für Psychologie*, Leipzig, 27. September.
- Valsiner, J. (1997). *Culture and the development of children's action*. 2nd ed. New York: Wiley.
- Valsiner, J. (1998a). The pleasure of thinking: A glimpse into Karl Bühler's life. *From Past to Future: Clark Papers on the History of Psychology*, 1, 1, 15-35.
- Valsiner, J. (1998b). *The guided mind*. Cambridge, Ma.: Harvard University Press.
- Valsiner, J. (2000a). Data as representations: contextualizing qualitative and quantitative research strategies. *Social Science Information*, 39, 1, 99-113.
- Valsiner, J. (2000b). *Culture and human development*. London: Sage.
- Valsiner, J. (2003). Culture and its Transfer: Ways of Creating General Knowledge Through the Study of Cultural Particulars. In W. J. Lonner, D. L. Dinnel, S. A. Hayes, & D. N. Sattler (Eds.), *Online Readings in Psychology and Culture* (Unit 2, Chapter 12), (<http://www.wvu.edu/~culture>), Center for Cross-Cultural Research, Western Washington University, Bellingham, Washington USA.
- Valsiner, J. (Ed) (2004 in press). *Heinz Werner and developmental science*. New York: Kluwer.
- Valsiner, J., & van der Veer, R. (2000). *The social mind: Construction of the idea*. New York: Cambridge University Press
- Van der Veer, R. & Valsiner, J. (1991). *Understanding Vygotsky: A quest for synthesis*. Oxford: Basil Blackwell
- Van Geert, P. (1998). We almost had a great future behind us: the contribution of non-linear dynamics to developmental-science-in-the-making. *Developmental Science*, 1, 143-159.
- Vygotsky, L. S. (1971). *Psychology of art*. Cambridge, Ma: MIT Press.
- Vygotsky, L. S. (1982). *Myshlenie I rec'*. In L. S. Vygotsky, *Sobranie sochinenii*. Vol. 2. *Problemy obshchei psikhologii*. Moscow: Pedagogika.
- Vygotsky, L. S. (1986). *Thought and language*. 2nd ed. Cambridge, Ma.: MIT Press.
- Wagoner, B., & Valsiner, J. (in press). Rating tasks in psychology: from static ontology to dialogical synthesis of meaning. In A. Gülerçe, I. Steauble, A. Hofmeister, G. Saunders and J. Kaye (Eds). *Theoretical Psychology*. Toronto: Captus Press.
- Wildgen, W. (2004). *The evolution of human language: scenarios, principles, and cultural dynamics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Wittgenstein, L. (1958). *Philosophical investigations*. Oxford: Blackwell.
- Wölfflin, H. (1886/1994). Prolegomena to a psychology of architecture. In H. F. Mallgrave and E. Ikonomou (Eds.), *Empathy, form, and space: Problems in German aesthetics, 1873-1893* (pp. 149-190). Santa Monica, Ca.: The Getty Center for the History of Art and the Humanities.

日本質的心理学会第1回大会協賛団体御芳名

(株) 金子書房
(株) 北大路書房
京都大学学術出版会
(株) 新曜社
(株) 誠信書房
(財) 東京大学出版会
(株) ナカニシヤ出版
(株) ベネッセコーポレーション ベネッセ未来教育センター
(株) マーケティングサービス
(株) ミネルヴァ書房
(株) 有斐閣

(敬称略：50 音順)

本大会の開催にあたり、上記の団体より多大のご支援をいただきました。ここに、御芳名を記して厚く御礼を申し上げます。

2004 年 9 月

日本質的心理学会第1回大会準備委員会
委員長 やまだようこ

日本質的心理学会第1回大会準備委員会

委員長

やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科）

副委員長

サトウタツヤ（立命館大学文学部）

広報委員長

杉万 俊夫（京都大学大学院人間・環境学研究科）

企画委員長

矢守 克也（京都大学防災研究所）

事務局長

溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター）

委 員（50 音順）

荒川 歩（立命館大学人間科学研究所）

塩瀬 隆之（京都大学大学院情報学研究科）

田垣 正晋（大阪府立大学社会福祉学部）

田端 拓哉（京都大学大学院教育学研究科）

徳田 治子（京都大学大学院教育学研究科）

保坂 裕子（兵庫県立大学環境人間学部）

松嶋 秀明（滋賀県立大学人間文化学部）

山崎 浩司（京都大学大学院医学研究科）

日本質的心理学会第1回大会アブストラクト集

発行日：2004年9月11日

発行者：日本質的心理学会第1回大会準備委員会

委員長 やまだようこ

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科発達教育研究室

develop@www.educ.kyoto-u.ac.jp Fax 075-753-3092

シリーズ社会文化的アプローチ 社会文化的小アプローチの実際

一学習活動の理解と変革のエスノグラフィ― 石黒
広昭編著 A5・248頁・3675円 本書は2つのパート
からなり、パート1ではヴィゴツキアンアプローチを
さらに拡張可能にする新しい視座を提供し、パート2
では、パート1で拡張される学習理解の枠組みがどの
ように具体化されるのか、その実践理論を描く。

母子間の抱きの人間科学的研究

一ダイナミック・システムズ・アプローチの適用―
西條剛央著 A5・160頁・2520円 母子間の「抱き」
を動的なシステムとして捉えつつ新しい視点を導出。
「抱き」の発達研究、人間科学的研究の実践、D S A
アプローチの実践的研究、人間科学的研究の認識論と
なる構造主義実践の側面をもった博士論文。

北大路書房

〒603-8303

京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

振替 01050-4-2083

▶価格(税込み)で表示しています

心理学におけるフィールド研究の現場

尾見康博・伊藤哲司編著 A5・260頁・2940円 人
類学や社会学でのフィールドワークとは一味違う「心
理学のフィールド研究」をどう始め、進めていくのか。
「家族」「学校」「福祉」「地域」「社会現象」の5
つのフィールドにそれぞれ3テーマずつ、研究に取り
組むためのヒントを具体的に語る。

質的研究法による授業研究

一教育学/教育工学/心理学からのアプローチ― 平山
満義編著 A5・318頁・3360円 授業研究において
はいま、従来主流であった量的方法に見直しが求めら
れ、質的研究法に注目が集まっている。その研究方法
としての独自性と現段階であげられている成果を、教
育学、教育工学、心理学の分野から具体的に紹介する。

通史 日本の心理学

佐藤達哉・溝口 元編著 4725円

記憶研究の最前線

太田信夫・多鹿秀継編著 4200円

質的研究法による授業研究

平山満義編著 3360円

心理学のための データ解析テクニカルブック

森 敏昭・吉田寿夫編著 3772円

心とは何か

足立自朗・渡辺恒夫他編著 5460円

シズ 21世紀の社会心理学 全10巻

高木 修 監修 2310~2625円

クリティカルシンキング入門篇

ゼックミスタ他著/宮元博章他訳 各1995円

文章理解の心理学

大村彰道監修 秋田喜代美・久野雅樹編集 2940円

シズ 認知心理学を語る 全3巻

森 敏昭編著 21世紀の認知心理学を創る会著 各2625円

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15

URL. http://www.nakanishiya.co.jp/

TEL.075-723-0111

FAX.075-723-0095

社会構成主義の理論と実践

K・J・ガーゲン著

既存理論の批判的再構成を越えて、社会
構成主義の積極的可能性を示す。

永田素彦・深尾 誠訳 六〇九〇円

看護のための人間科学を求めて

楽学舎(代表・杉万俊夫)編

研究者・現場当事者と対象との掛け合い
の中から紡ぎ出される、新たな科学への
理解を深める。 二一〇〇円

臨床社会心理学

その実践的展開をめぐる

田中共子・上野徳美編

最新の先駆的研究をもとに、新たな枠組
みとモデルを提供する。 二一〇〇円

調査的面接の技法

鈴木淳子著

ブライバシーや人権に十分配慮しながら、
調査目的に適った、実りあるデータを収
集するための技法を紹介。 二六二五円

人間科学研究法シンドロ

高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一編

伝統的な学問体系の壁を越え、新たな発
想で課題に取り組むための「知の技法」。

二九四〇円

PAC分析実施法入門

「個」を科学する新技法への招待(改訂版)

内藤哲雄著 特定個人の個別事例を質的
記述的に分析する技法と、その実施法の
紹介。待望の新版。 一八九〇円

犯罪被害者の心理と支援

長井 進著

被害者支援から法的諸問題まで、いまほ
んどうに必要とされていることは何なの
かを総合的に提言する。 二九四〇円

マキャベリの知性と心の理論の進化論

ヒトはなぜ賢くなったか

R・バーン&A・ホフイットゥン編

知性の進化過程を解明する革命的論文
集。藤田・山下・友永監訳 六三〇〇円

社会的ジレンマの処方箋

都市・交通・環境問題のための心理学

藤井 聡著

ジレンマ解消に向け、心理的・構造的方
略の二面作戦を論じる。 二九四〇円

環境リスク心理学

中谷内一也著

リスク認知研究の最新の成果をふま
え、環境リスクマネジメント政策への、
具体的な提言。 二一〇〇円

人間理解のグループ・ダイナミクス

吉田道雄著

集団とのかかわりを通して人間を科学的
に理解するGDの考え方を、初心者向け
に易しく解いた随筆風入門。 一八九〇円

心理学リーディングス

素朴だが不忠実な日々の出来事と人間心理

山口裕幸編
身近なレベルから心理学の世界の扉を
開く、素朴心理学のすすめ。 二二一〇円

税込価格で表示してあります。

心理学の新しいかたち

シリーズ

全11巻

責任編集
下山晴彦

心理学の最先端の研究と共にアカウンタビリティを示すことを共通テーマとし、各専門領域で発展しつつある「新しいかたち」を提案する。

- 1 心理学論の新しいかたち 下山晴彦編
- 2 心理学史の新しいかたち 佐藤達哉編
- 3 心理学研究法の新しいかたち 吉田寿夫編
- 4 実験心理学の新しいかたち 廣中直行編
- 5 認知心理学の新しいかたち 仲真紀子編
- 6 発達心理学の新しいかたち 遠藤利彦編
- 7 教育心理学の新しいかたち 鹿毛雅治編
- 8 社会心理学の新しいかたち 竹村和久編
- 9 臨床心理学の新しいかたち 下山晴彦編
- 10 環境心理学の新しいかたち 南博文編
- 11 芸術心理学の新しいかたち 子安増生編

人間関係を良くするカウンセリング(仮)

心理・福祉・教育・看護・保育のために
武田 建著 臨床心理、社会福祉、教育、看護、保育などの領域で対人援助活動をするときに、相手との良好な人間関係を築き上げるための方法を紹介。近刊

高齢者のカウンセリングと

ケアマネジメント(仮)

B・インガソル・ディートン／R・キャンベル／黒川由紀子監修・望月弘子訳 高齢者とその家族に対する具体的な援助について、様々な事例を詳細に検討。近刊

病気だけど病気ではない

糖尿病とともに生きる生活世界

著 代幸 236p
文化人類学の民族誌的手法を駆使しながら糖尿病者へのインタビューや患者会の参与観察を通して、国民病と言われる糖尿病者たちの生活世界をつぶさに描き出した。「病気であること」の経験を描いた民族誌は現代医療のあり方を鋭く問う。
3150円

アクティブカウンセリング入門(仮)

森田療法を取り入れた新しい面接技法
石山一舟・我妻則明著 臨床心理士・看護師・保健師など幅広い専門職に活用できる比較的簡便な面接技法。解決困難な事例が速やかに解決に導かれる。近刊

緩和のこころ

癌患者への心理的援助のために
岸本寛史著 緩和医療を臨床心理学的な観点から検討し直し、患者の方々一人ひとりの気持ちに添うためにはどのようにすればよいかを考える。
2520円

暮らしに生かすカウンセリング

ロジャーズ派カウンセリングの英国から
畠瀬直子著 著名なロジャーズ派カウンセラーである著者が、英国の大学を訪問し、市民生活に深く根ざした心理相談の様子を紹介。
2100円

ゴッフマンの社会学2 出会い 相互行為の社会学

佐藤毅・折橋徹彦訳 対面的相互行為を詳細に分析した「ゲームの面白さ」と、独自の研究局面を切り拓いた「役割距離」の二論文。
2625円

ゴッフマンの社会学4 集まりの構想 新しい日常行動論を求めて

丸本恵祐・本名信行訳 集まりの構造と集団や社会に変形する過程を、シンボリック相互作用論および現象学的社会学の視点より考察。
3150円

臨床心理士を目指す人のためのテキスト

臨床心理学全書 全13巻

監修 大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦
わが国の「臨床心理学」の体系を大成し、その新しいパラダイムを呈示した画期的シリーズ。臨床心理士に求められる水準を明確に示したテキストの決定版。

- 1 臨床心理学原論 大塚義孝編 4515円
- 2 臨床心理学査定学 岡堂哲雄編 5040円
- 3 臨床心理学面接学 東山紘久編 9月刊行
- 4 臨床心理学実習論 下山晴彦編 5355円
- 5 臨床心理学研究法 丹野義彦編 4725円
- 6 臨床心理学査定技法1 下仲順子編 5670円
- 7 臨床心理学査定技法2 皆藤 章編 3570円
- 8 臨床心理学面接技法1 伊藤良子編 3570円
- 9 臨床心理学面接技法2 田寛誠一編 4305円
- 10 臨床心理学面接技法3 亀口憲治編 3780円
- 11 臨床心理的コミュニケーション援助論 金沢吉展編 3360円
- 12 学校臨床心理学 倉光 修編 4410円
- 13 病院臨床心理学 大塚義孝編 4830円

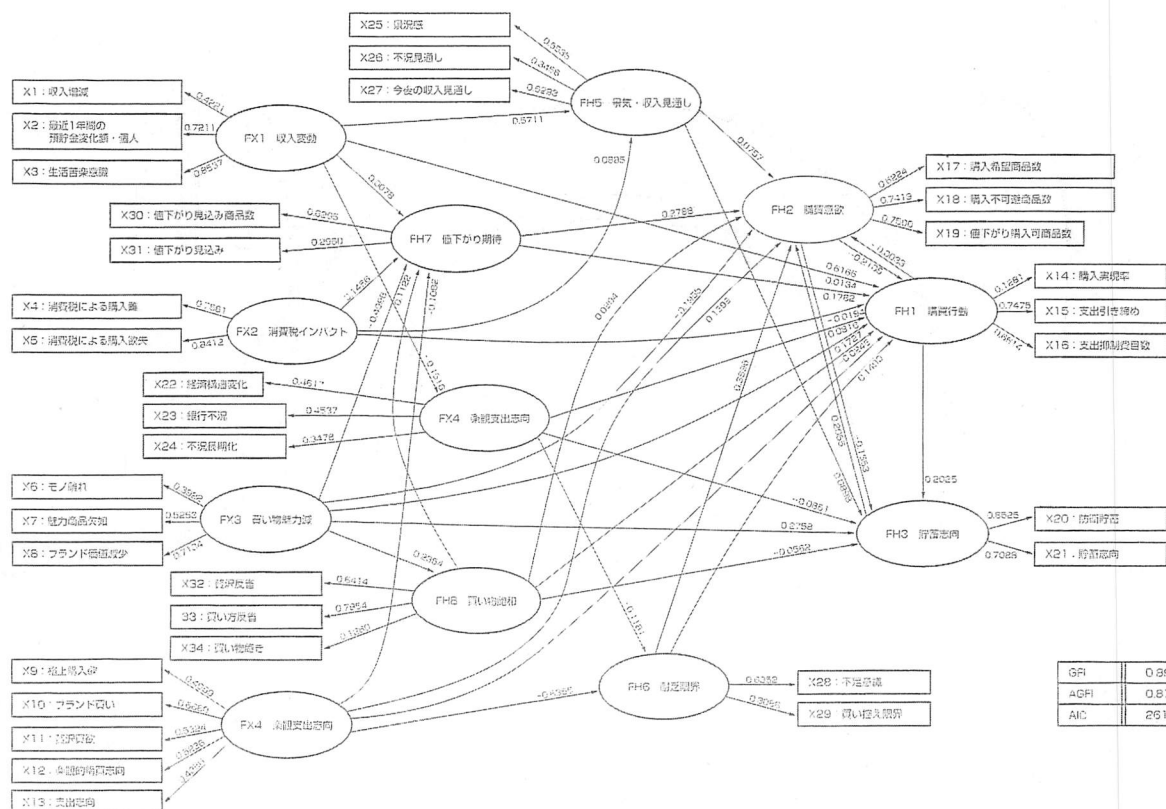
ソーシャルワークの作業場

寿という街

須藤八千代著 ドヤ街、横浜寿町でソーシャルワーカーとして働いてきた著者が、移りゆく街の姿とそこに生きる人々への尽きない関心を描く。
1470円

SEISHINSHOBO
誠信書房

〒112-0012 東京都文京区大塚3-20-6 TEL. 03-3946-5666/FAX.03-3945-8880
ホームページ <http://www.seishinshobo.co.jp/> E-Mail: sei@seishinshobo.co.jp [税込価格]



情報の偏食

していませんか？

バランスのくずれた情報は、
会社の健康や将来を危うくします。

— 私たちは、科学性を重んじるリサーチャーです。 —
科学性高いリサーチで企業と生活者のよりよい関係を築きます。

Since 1965

株式会社 マーケティング・サービス

東京都中野区本町4-44-13西京城西ビル TEL:03-3383-2271 Fax:03-3383-2274
URL www.marketing-service.co.jp

2005 年
3 月刊行開始

京都大学学術選書

シリーズ

心の宇宙

山中康裕・藤田和生 他 全 13 巻 (予)

四六判 250 頁平均 予価 1500 ~ 1800 円

第一回配本 『心理臨床学のコア』 山中康裕

著者独自の内閉論や神経症症状の 4 分極化論、あるいは縁起律的な共時性現象・マ
ンダラ象徴など、通常の概論書では語られない、しかし、こころの臨床を考える上
での〈本質的〉な概念を、独特の語り口で描く。

既刊書から

好評三刷 高次機能解明の鍵「ワーキングメモリ」研究の最前線

脳とワーキングメモリ 荻阪直行編著 B5 判 340 頁 7350 円

参与的研究によるチンパンジー母子の認知発達経過

チンパンジーの認知と行動の発達

友永雅己・田中正之・松沢哲郎編著 菊判 508 頁 CD-ROM 付 4200 円

実験心理学の誕生と展開 荻阪直行編著 A5 判変型 348 頁 5880 円

京都大学学術出版会

京都市左京区吉田河原町 京大会館内
HP <http://www.kyoto-up.gr.jp>



価格は税込みです

● ベネッセ未来教育センターの刊行物 ●

第3回 学習基本調査報告書

各版とも B5 判 172 ~ 192 頁・1 冊 400 円 (税・送料込)

- **小学生版** (研究所報 Vol.27)
- **中学生版** (研究所報 Vol.28)
- **高校生版** (研究所報 Vol.29)

小・中・高校生に対するアンケート調査 (1990、1996、
2001 年実施) から学習実態をとらえるとともに、同時に
行った学力テストの結果から学習到達度の状況をつか
む画期的な調査レポート!

第2回 幼児の生活アンケート報告書

B5 判 172 頁・400 円 (税・送料込)

子どもの 1 日の生活時間や習い事の状況、テレビやビ
デオの視聴、母親の教育観や育児不安、父親の家事育
児参加の実態などについて、わかりやすく解説。1995
年調査と 2000 年調査の比較から変化をとらえる。

第2回 子育て生活基本調査報告書

小・中学生版 — 小学生・中学生の保護者を対象に

B5 判 160 頁・1000 円 (税・送料込)

教育改革の進展によって、しつけや家庭教育に対する
保護者の意識・行動は変化したのか。子どもの発達や
学年段階に応じて、教育に対する意識や子どもとのコ
ミュニケーションはどのように変わるのか——小 1 ~
中 3 までの子どもをもつ保護者を対象とした大規模・
経年比較調査から、子育ての現状をさぐる。

幼児版 — 幼稚園児・保育園児の保護者を対象に

B5 判 144 頁・1000 円 (税・送料込)

幼児の子どもをもつ家庭での子育ての実態やしつけに
関する保護者の意識は変化しているのか。1997 年と
2003 年に実施した経年比較調査から、子どもとのかか
わり、悩み、習い事の実態など、幼児期の子育ての課
題に迫る。

購入をご希望される方は、直接下記へお申し込みください

◆ FAX、郵便はがきの場合 下記の事項を明記のうえ、お申し込みください。

①氏名、②郵便番号・住所、③電話番号、④ご希望の刊行物タイトル、⑤冊数

● FAX: 042-356-7306 ベネッセ未来教育センター「読者サービス」係

● はがき: 〒206-8686 (住所は不要) ベネッセ未来教育センター「読者サービス」係

◆ 電話の場合

● TEL: 042-356-0840

受付 / 10:00 ~ 17:00

土・日・祝日を除く

ベネッセ未来教育センターの調査結果は、WEB サイトでもご紹介しています。 <http://www.crn.or.jp/LIBRARY/>

株式会社 ベネッセコーポレーション ベネッセ未来教育センター 〒206-8686 東京都多摩市落合 1 - 34

S・マーフィ重松著／辻井弘美訳

多文化間カウンセリングの物語

ナラティブ

エスニシティだけでなく、世代・性・出自などの間で、文化がところを内から引き裂くことがある。私という物語をつむぎ直すとは、どういうことか。ナラティブ・セラピーのモノグラフである本書は、同時に、自己の語りを恢復しようとする人とカウンセリングがともに歩む詩的な物語でもある。〈主要目次〉 プロローグ／1歌を忘れた少年／2神と神話の癒し／3眠りから目覚めたへ出自／4名前が語るもの／エピソード

四六判・二五六頁／三〇四五円

好評既刊

無藤 隆・高橋恵子・田島信元編

発達心理学入門Ⅰ・Ⅱ

各二五二〇円

幼児教育へのいざない

佐伯 胖

一八九〇円

円熟した保育者になるために

家族心理学

柏木恵子

三三六〇円

社会変動・発達・ジェンダーの視点

社会心理学

山口 勸編

二七三〇円

アジアからのアプローチ

文化心理学

柏木恵子・北山 忍・東 洋編

四七二五円

理論と実証

行為と発話形成のエスノグラフィ

柴山真琴

留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか

六三〇〇円

アフオーダンスの構想

佐々木正人・三嶋博之編訳

知覚研究の生態心理学的デザイン

三九〇円

東京大学出版会

<http://www.utp.or.jp/> [価格税込]

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 TEL075-581-0296 (営業直通) FAX075-581-0589
<http://www.minervashobo.co.jp/> E-mail: eigyo@minervashobo.co.jp 宅配可・価格税込 振替01020-0-8076

information

発達 100巻セット

100号刊行記念による復刊。ご注文は一冊から承ります。ぜひ全巻をお揃え下さい。

定価二一〇〇〇〇〇円
特価一八〇〇〇〇〇円
*特価は04/12末迄

10/25刊行

発達

100

巻頭*生きる意味を語ろう

一二六〇円

【特集】親子の絆…子ども虐待の現場から／親子の絆…不安定の原因を探る／自己と他者過去と未来…物語ることによる自己の再構成／大人の条件

拡散 diffusion

「アイデンティティ」をめぐり、僕達は今

大倉得史 ゆれ動くこころ模様を克明に描き、さまざまな試みの果てにたどりつく「自分らしい生き方」とは。京大生が語りあう同時代。 二二〇〇円

ヒューマン・エソロジー

人間行動の生物学

アイブルアイベスフェルト 日高敏隆監修 桃木暁子ほか訳 30年以上にわたるフィールドワークの集大成。人間の共通の振舞いを解明。 一五七五〇円

ライフストーリー

エスノ社会学的バースペクティブ

D・ベルトー 小林多寿子訳 著者夫妻の体験を交えながら、対象の選択、インタビューの仕方、論文のまとめ方までを懇切に紹介する。 二七三〇円

人生を物語る

生成のライフストーリー

やまだようこ編著 人生を物語ることの意味とは何か。具体例をもとに、学問の壁を超えたものの見方を創造的にひらく方法を提示する。 三一五〇円

フィールドワーク よみがえるコミュニティ

人間科学

杉万俊夫編著 先駆的な住民自治の社会システムづくりをめざす過疎地域など実例をもとに「人間科学のフィールドワークとは何か」を主張。 二七三〇円

フィールドワークの技法と実際

箕浦康子編著・マイクロ・エスノグラフィ入門 人間理解のための知的ツールの技法を東京大学での授業の記録を通して紹介する。 二四一五円



有斐閣

出版案内
(価格は税込)

東京・神田・神保町2/Tel:03-3265-6811
http://www.yuhikaku.co.jp/

●図書目録送呈●

New
Liberal Arts
Selection

●古典的「教養」の枠を超えた、大学テキストシリーズ
ニュー・リベラル
アーツ・セレクション
心理学 三七八〇円
A5判

無藤 隆・森 敏昭・遠藤由美・玉瀬耕治著 心理学とは何か。専門諸領域に進むうえで必須の基礎知識から最新の研究動向まで、図表をふんだんに使い、徹底的に、丁寧に解説する。大学4年間ずっと手元において学べる一冊。(二色刷)

心理学 研究法 (有斐閣アルマ) 二二〇五円
高野陽太郎・岡 隆編◎心を見つめる科学のまなざし

流れを読む心理学史 (有斐閣アルマ) 一七八五円
サトウタツヤ・高砂美樹著◎世界と日本の心理学

心理学・倫理ガイドブック
日本発達心理学会監修／古澤頼雄・斉藤こずゑ・都筑 学編著
◎リサーチと臨床 四六判 二二六〇円

実践エスノメソドロジー入門
山崎敬一編 (CD-ROMつき) A5判 二九四〇円

マルチメディアでフィールドワーク
山中速人編◎CD-ROM『7人のフィールドワーカー』付き
A5判 二七三〇円

組織と経営について知るための
実践フィールドワーク入門
佐藤郁哉著 四六判 二四一五円

私をつつむ母なるもの
イメージ画にみる日本文化の心理
やまだようこ著 B5判 四八九三円

カテゴリー

フィールド

現場心理学

—表現の冒険—

やまだようこ・サトウタツヤ・南 博文 編

B5判・並製・204頁 定価3,360円(税込)

身近な生活場面を重視し、語りの分析、アクション・リサーチ、参与観察などを通して、生きた人間像を模索する。心理学の方法論・表現法の見本帳としても必携。



主要目次

第Ⅰ部 人生と語り

いのちと人生の物語。母親と子どものやりとり 教室の談話分析 移動と定着の人生を語る。他

第Ⅱ部 現場とアクション

ゴミ分別収集がはじまるとき 住民運動と文化 精神病院のリロケーション 自白の信用性鑑定。他

第Ⅲ部 環境と移行

まちの変化とNさんの生活世界。1、2歳児の仲間関係をとらえる保育者の見方 場所の語り。他

文化と心理の緊密な関係を解く!

認識と文化

編集：田島信元・無藤 隆
各四六判・上製

- 共同行為としての学習・発達——社会文化的アプローチの視座
田島信元 著 定価2,940円(税込)
- 協同するからだとは——幼児の相互交渉の質的分析
無藤 隆 著 定価2,100円(税込)
- フアンタジーと現実
麻生 武著 定価2,100円(税込)
- 親になるプロセス
氏家達夫 著 定価2,310円(税込)
- 具体性のヴィイゴツキー
茂呂雄二 著 定価2,100円(税込)
- 「わたし」の世界の成り立ち
岩田純一 著 定価2,100円(税込)
- アメリカの学校文化 日本の学校文化——遊びの「ミニ」の創造
白井 博著 定価3,360円(税込)
- 対話の中の学びと成長
佐藤公治 著 定価2,100円(税込)
- モノ語りとしてのナショナリズム——理論人類学的探求
中川 敏 著 定価2,100円(税込)
- 「教えること」のエスノグラフィ——「教育困難校」の構築過程
古賀正義 著 定価2,730円(税込)
- 相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述
西阪 仰 著 定価2,100円(税込)

〒112-0012 東京都文京区大塚3-3-7

K 金子書房

ホームページ <http://www.kanekoshobo.co.jp>
TEL 03(3941)0111 FAX03(3941)0163

質的心理学研究 (年刊)

ここ数年、数を増してきた質的研究。数量化できないデータ(質的データ)をどう処理し、どうまとめればよいのか。質的研究から生み出された「知」を「共同の知」として蓄積し、次世代に伝えるために、発表や議論の場を提供する、新しいスタイル研鑽の場。

B5判並製約176×220頁／定価2940円(税込)

バックナンバー紹介

(下記は投稿論文。他書評多数)

■第1号 (2002年)

田中共子・兵藤好美・田中宏二「高齢者の在宅介護者の認知的成長段階に関する一考察」

松嶋秀明「いかに非行少年は問題のある人物となるのか？」

田垣正晋「生涯発達から見る『軽度』肢体障害者の障害の意味」

西條剛央「生死の境界と『自然・天気・季節』の語り」

やまだようこ「なぜ生死の境界で明るい天空や天気が語られるのか？」

大倉得史「ある対照的な2人の青年の独特なありようについて」

やまだようこ「現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス」

安藤香織「環境ボランティアは自己犠牲のか」

■第2号 (2003年) ※第2号から「特集」を設定。

【特集 イメージと語り (責任担当：やまだようこ)】

川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ「KJ法の原点と核心を語る」

矢守克也「4人の震災被災者が語る現在」

小倉康嗣「再帰的近代としての高齢化社会と人間形成」

小倉康嗣「コメント論文：審査意見に対するリプライ」

能智正博「『適応的』とされる失語症者の構築する失語の意味」

やまだようこ「ズレのある類似とうつしの反復」

【一般論文】

坂上裕子「断乳をめぐる母親の内的経験」

柴坂寿子・倉持清美「園生活の中で泣きが多かったある子どもの事例」

菅村玄二「生死の境界での語り——実験心理学から見た質的心理学」

やまだようこ「『実験心理学』と『質的心理学』の相互理解のために」

西條剛央「『構造構成的質的心理学』の構築」

■第3号 (2004年)

【特集 フィールドワーク (責任担当：サトウタツヤ)】

森田京子「アイデンティティ・ポリティックスとサバイバル戦略」

宮内洋「〈出来事〉の生成」

本山方子「小学3年生の発表活動における発表者の自立過程」

溝上慎一「大学生の自己形成教育における自己の発現過程」

矢吹理恵「日米国際結婚夫婦の妻におけるアメリカ文化に対する同一視」

【一般論文】

清水武「遊びの構造と存在論的解釈」

やまだようこ「小津安二郎の映画『東京物語』にみる共存的ナラティブ」

八木真奈美「日本語学習者の日本社会におけるネットワークの形成とアイデンティティの構築」

西條剛央「構造構成的質的心理学の理論的射程」

質的心理学研究

Qualitative Research in Psychology
第3号 2004/No.3

【特集】
フィールドワーク
責任担当
サトウタツヤ

新曜社

無藤隆・やまだようこ・麻生武・南博文・サトウタツヤ 編

ワードマップ 質的心理学

創造的に活用するコツ

質的研究の構想からフィールドと対象の選択、データの収集、さまざまな方法、データの整理、論文のまとめ方で、先達のノウハウを満載した質的研究を志す初学者のための必携入門。

四六判並製／9月刊行

大橋靖史 著

行為としての時間

生成の心理学へ

私たちは時に、一瞬を永遠のように感じるかと思えば、時間が静止してしまったかのように感じる。災害被災者へのインタビュー、目撃証言、裁判記録などの研究から、新しい時間のとらえ方を提唱する。

A5判上製256頁／定価3780円(税込)

杉山幸子 著

新宗教とアイデンティティ

回心と癒しの宗教社会心理学

【島田一男賞受賞】

西洋と日本の宗教心理学の歴史を概観して、回心研究の現代的な展開を検討し、著者自身の新宗教の現場へのフィールドワークを通して、宗教的社会化等を考察する。

A5判上製224頁／3675円(税込)

株式会社
新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 多田ビル

TEL : 03-3264-4973(代) FAX : 03-3239-2958

E-mail info@shin-yo-sha.co.jp URL http://www.shin-yo-sha.co.jp/